

目次

青山 太郎	2～3	竹尾 淳	60～61
池坊 繁屋	4～5	田近 一郎	62～63
石川 豊美	6～7	田中 明子	64～65
石郷 祐介	8～9	谷口 泉	66～67
伊東 宣明	10～11	堤 浩一	68～69
伊奈 和彦	12～13	中村 麻理	70～71
岩橋 涼	14～15	成田 裕一	72～73
内田 英伸	16～17	朴 永孝	74～75
御家 雄一	18～19	長谷川 聡	76～77
大矢 信吾	20～21	濱口 輝士	78～79
岡田 有司	22～23	平林 義章	80～81
小田 裕昭	24～25	日渡 美世	82～83
落合 洋文	26～27	本多 一彦	84～85
加藤 清子	28～29	松原 友子	86～87
河木 智規	30～31	宮島 彩	88～89
北川 絵里奈	32～33	山田 直子	90～91
木村 亮介	34～35	山田 ゆかり	92～93
國友 宏渉	36～37	吉田 友敬	94～95
栗林 芳彦	38～39	吉田 洋	96～97
黒瀬 聡	40～41	渡邊 正樹	98～99
後藤 千穂	42～43		
小橋 一秀	44～45		
小林 あづみ	46～47		
近藤 徹弥	48～49		
柴山 一幸	50～51		
周 欣欣	52～53		
関 豪	54～55		
高橋 圭	56～57		
竹内 陽介	58～59		

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：准教授

氏名：青山太郎

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私は自らの専門領域である映像表現やその分析・批評などの実践的教育を通して、学生自身が人と人、社会、歴史や文化、さまざまな感情や感覚をつなぎ、来るべき「よりよい」（美しい、楽しい、快適な、充実した、など）共生のあり方を想像し、デザインすることを可能とするような洞察力と想像力、表現力を涵養します。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：メディアデザイン入門	この講義では、近代デザインの歴史から、デザインを巡る近年の事例、理論、課題などを紹介・教授している。とりわけ、「人新世」や「ポストヒューマン」と呼ばれる現代社会において、「デザイン」という営みに何が求められるかを理解し、今日的なデザインプロセスを成立させる手法や考え方の基礎を学生が身につけることを目指している。具体的には、第1フェーズにおいて「現代におけるデザインの役割と責任とは何か」を歴史的に検討し、第2フェーズにおいては、アーツ・アンド・クラフツ運動にはじまる近代デザインの歴史を概略的にたどってきた。第3フェーズでは現代的なデザイン・プロセスのうちのデザインリサーチに特に注目し、その内容を教授した。第4フェーズでは、デザイナーとして「そのデザインが本当に社会にとって必要かどうかを考える」方法をあらためて学生とともに検討した。
2.教育活動や教育業績 科目名②：映像史とアーカイブ	この講義では、映画誕生以前から今日に至るまで多様な発展を遂げてきた「映像」（映画、テレビ番組、ネット動画）の歴史を概観しつつ、その時代ごとの表現方法がいかなる種類の「リアリティ」を探求するものであったかを学生が理解すること、および、そのアーカイブ映像を分析することを通じて、それぞれの作品に刻印された「リアリティ」と「欲望」のあり方を学生が理解することを目指している。具体的には、第1フェーズでは、映画発明以前のメディアの検討から始め、初期映画、古典映画、ポスト古典映画にいたる映画史を確認し、第2フェーズではテレビ番組の、第3フェーズではドキュメンタリー映画のリアリティとは何かを議論し、第4フェーズでは「現代映画」と呼ばれる作品の「現代性」とは何かを学生とともに検討した。
3.教育活動や教育業績 科目名③：映像制作演習II	この授業では、基本的に学生自身による解釈を必要とする課題を提示し、それを実装するために学生はグループワークに取り組み、完成した作品については教員と他のグループの学生全員で講評を行い、細かく分析するというかたちをとった。特に、制作スケジュールの計画から制作状況の中間報告、最終成果の講評までひとりひとりの進捗をケアし、適宜質問を受け付け、それぞれの状況に応じたコメントをすることで、学生自身が自主的に課題に取り組むことが出来たように考えられる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：ドキュメンタリー演習	映像メディアコースおよびメディアデザインコースの仕上げとして位置付けられるこの授業では、最新の映像学・デザイン学の研究知見を紹介しつつ、フィールドワークに基づくドキュメンタリー映像作品の制作課題を課している。少人数の演習形式とし、最終成果の講評にいたるまでに中間審査を複数回取り入れた。それによって学生のモチベーションを維持し、作品のクオリティを向上させた。今年度は「いま、公共性とは何か」を課題とし、空間の特殊性と人間の社会生活の関わりをテーマとする作品制作をさせた。学外者への取材なども自主的におこなわれ、最終的に6作品が完成し、学修効果も十分あったと思われる。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：メディアデザイン入門	全体に熱心な参加態度が見られたが、理解度については十分とは言えないところがあり、授業内容が難解である旨のコメントが散見された。受講生の自学（授業教材を利用した復習）を前提にしたが、その取り組み具合にばらつきがあったことが要因と考えられ、学修度の二極化がこの授業でも見られた。これらの課題は以前から認識されていたものであったため、講義内容をすべて原稿に起こし、これを授業中にスクリーンに投影しつつ、webclassで共有することで、内容が難解であったり、情報量が多い場合でも受講生が復習しやすいようにした。これにより、全体的に授業理解の深度は以前より向上したと感じられるものの、積極的な活用をさらに促す必要があると考えられる。また、毎回授業後にリアクションペーパーを回収し、受講生の全体的な理解度を確認しつつ、特に核心に触れる質問を取り上げ、次の授業でフィードバックをおこなったが、これにより、学生のモチベーションが向上したと感じられる。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：映像史とアーカイブ	「授業内容は一番面白かったです」というコメントに見られるようにおおむね内容については好意的に受け取られていたが、「メディアデザイン入門」同様、受講生の自学の取り組み具合にばらつきがあったと思われ、学修度の二極化が見られた。これらの課題は以前から認識されていたものであったため、講義内容をすべて原稿に起こし、これを授業中にスクリーンに投影しつつ、webclassで共有することで、内容が難解であったり、情報量が多い場合でも受講生が復習しやすいようにした。これにより、全体的に授業理解の深度は以前より向上したと感じられるものの、積極的な活用をさらに促す必要があると考えられる。また、毎回授業後にリアクションペーパーを回収し、受講生の全体的な理解度を確認しつつ、特に核心に触れる質問を取り上げ、次の授業でフィードバックをおこなったが、これにより、学生のモチベーションが向上したと感じられる。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：映像制作演習II	演習課題については、制作過程で受講生のアイデアを適宜チェックし、教員と学生のあいだで、また学生同士のあいだで意見交換する時間を十分に設けた。さらに、アイデア発表や進捗報告を全体に向かってプレゼンテーションする時間も増やすことで、学生が自分たちのアイデアを言葉で表現し、自らその内容を検討できるよう促した。その結果、それぞれのグループが特色あるアイデアを提案することができ、いくつかのグループでは自分たちの表現を追究する姿勢が見られた。全体的に緊張感を保った演習が実施できていたものと考えられる。自由記述からは、学生たちが自由にアイデアを出し合い、それにもとづいて課題に取り組みという環境が好評で、理解度や満足度も高評価であったといえる。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：ドキュメンタリー演習	前期開講の「ドキュメンタリー・シナリオ」と連続する上級科目ということで、受講者数およびアンケート回答者数は少なかったものの、授業評価の理解度および満足度は非常に高かったものと思われる。また、参考作品の分析レポートや、最終的な成果物（ドキュメンタリー映像）のクオリティも回を重ねるごとに向上していることから、授業のねらいについての理解度も十分なものであったと考えられる。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープングラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	12月に愛知芸術文化センターで開催された、日本全国の映像系教育機関より選出された学生作品を紹介するイベント「Moving Image Festival 2025」に、本学の学生作品を出品することに2年連続で成功し、好評を得た。また、3月に開催された日本映像学会中部支部第3回研究会でも本学の学生に発表をさせた。このうち、1作品は上記「映像制作演習II」における優秀作品である。こうした活動を通じて、学生の自己肯定感の向上と、制作意欲の活性化につなげつつ、教員同士でも授業を進める上での工夫などについて意見交換を行った。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標	今年度は、上記のほか、《つかの間へ》展（2025年12月23日〔火〕-12月27日〔土〕TOUTENBOOKSTORE、名古屋市の）アートディレクションを担当、卒業生の野村隆也氏の制作活動をサポートした。また、大学院での指導学生である佐藤稜真さんが制作した映画作品『S』を修士論文中間発表会で発表した。さらに同作の公開を現在企画中で、こうした学外への作品展示・発信について今後も積極的に取り組んでいきたい。 また次年度については、全科目について、基本的には今年度までの方法を踏襲しつつ、課題の細かい設定を見直し、学生のさらなる学修意欲の向上を図る。そのうえで、理解の進みが遅い学生のフォローを早めに行い、学修度の二極化の進行を最小限にとどめたい。
------------------------	--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：池坊 繁屋

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私は、立学の精神にあるように自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨くことを惜しまないような人材を育成していきたいと考えています。

また、情報メディアに関する知識と技術を身につけ、自分の専門分野における当たり前が感覚的にわかるような人物になれるように指導していきたいと考えています。さらに、様々な問題に対して情報の観点から主体的に取り組むことができるように一緒に体験をしていき、学生がその楽しさを実感したり、少しでも自分自身に誇りが持てるような体験と一緒にしていきたいと考えています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①: 人工知能	本講義は、3年・前期・選択科目。令和7年度受講者は54名（1クラス：金曜2限）。2022年度入学生カリキュラムから設置され、令和6年度に始めて開講された。人工知能(Artificial Intelligence: AI)の基礎知識とその概要を体系的に学びます。AIの歴史から多岐にわたる技術種類や応用分野において、AIを活用する際の構築から運用までの流れなどを知識として修得し、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」応用基礎レベルの1科目としてその内容を理解します。
2.教育活動や教育業績 科目名②: ICT基礎	本講義は、1年・後期・必修科目。令和7年度受講者は67名と78名（2クラス：火曜1限、金曜4限）。ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術)の基礎知識と基礎技能を、タブレット端末による実習を通して身につけ、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」応用基礎レベルの1科目としてその内容を学びます。
3.教育活動や教育業績 科目名③: 情報基礎理論	本講義は、1年・後期・選択（情報システムコース必修）科目。令和7年度受講者は40名と47名（2クラス：水曜4限、木曜3限）。情報処理技術者試験の「コンピュータシステム」分野において、主に「コンピュータ構成要素」、「システム構成要素」、「ハードウェア」分野の基礎知識を修得し、演習問題を進め資格取得を目指します。
4.教育活動や教育業績 科目名④:	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①: 人工知能	(1クラス：金曜2限) 「11.授業の内容は理解できた」は、3.45、「12.この授業に満足している」は、3.61であった。3年生：48名と4年生：6名の受講委であった。理解度は平均3.4以上であり、最終的な満足度ではほぼ良い結果が得られていた。自由記述では、レポート課題をすることにより自分の考えをまとめることができたなどの意見が書かれていた。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②: ICT基礎	(2クラス：火曜1限、金曜4限) 「11.授業の内容は理解できた」は、3.51と3.57、「12.この授業に満足している」は、3.57と3.54であった。理解度については平均3.5以上であり、全体的に知識やスキルを修得できていると感じていることがわかる。また、最終的な満足度も平均3.5以上であり、3名を除いて良い結果が得られていた。自由記述については、概ね良い意見が書かれていた。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③: 情報基礎理論	(2クラス：水曜4限、木曜3限) 「11.授業の内容は理解できた」は、3.56と3.21、「12.この授業に満足している」は、3.64と3.54であった。理解度は平均3.39であり、約5名程度理解することが難しかったようだ。約半数が情報システムコース以外の学生であることも1つの理由と考えられる。最終的な満足度は平均3.59であった。自由記述については、概ね良い意見が書かれていた。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④:	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	講義内容の理解を深めるため、授業の最後に小テストや演習課題を行った。また、学生の事後学習や欠席者の学びを目的として、WebClassに講義資料を上げ自由に閲覧できるようにした。 WebClassによる各授業感想の収集、授業評価アンケートを実施した。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

授業評価アンケートにおいて、講義および実習の理解度や満足度はほぼ大学平均以上であり、肯定的な意見が多数みられた。特に、授業最後に行っている小テストや演習問題について好評な意見がみられていた。 令和8年度についても、基本的には今年度までの方法を踏襲しつつ、総合的な満足度で良い結果を得られるように学生の学修意欲の向上を図っていきたい。

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：准教授

氏名：石川 豊美

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブ리케이션などのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

学校、病院、福祉施設、事業所等をはじめとした様々な施設で給食は提供されている。限られた給食経営資源を効果的・効率的に使い、安心・安全でおいしい食事を提供できるだけではなく、多様化する利用者の嗜好やニーズにも的確に対応できる人材を育成する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：給食実務論	近年管理栄養士を取り巻く社会環境は大きく変化し、保健・医療・福祉等における食生活の課題に対応できる給食施設が求められている。管理栄養士の実務の基本である給食管理・運営に必要なマネジメントの基礎能力を養い、喫食者のニーズに対応した食事提供ができるよう、給食実務の基本全般について学習する。特定給食施設において、経営・栄養・衛生・作業・施設管理等円滑な給食運営を行うために必要な実務内容について知識と技術を習得し、実践できる能力を身につける。
2.教育活動や教育業績 科目名②：給食経営管理学	給食運営や関連サービスを総合的に判断し、栄養面・安全衛生面・経済面など全般のマネジメントを行う能力を養うことを目的とする。フードシステム、マーケティング、フードサービスの原理や応用を理解するとともに組織管理などのマネジメントの基本的な考え方や方法を学習し、給食の経営管理を修得する。
3.教育活動や教育業績 科目名③：給食経営管理実習Ⅰ	給食実務論、給食経営管理学で得た基本的な知識や技術を基礎に、給食管理運営業務について実習室を使用し、管理者として実践できるように体得することを目的とする。施設の組織体を想定し、グループ編成による役割分担で、健康人を対象とした給食運営の実習を行い、計画から評価まで一連を通して給食マネジメントを実践する。
4.教育活動や教育業績 科目名④：給食経営管理実習Ⅱ	実習Ⅰで習得した給食管理技術に基づき、実習Ⅱでは応用編として、各種給食施設に応じた栄養・食事管理の展開をし、対象者別の栄養管理技術を習得する。個人の栄養調査を喫食状況調査で行い、実際の栄養摂取量の把握方法を学び、さらに栄養評価・判定を行う。また、納入から調理配膳までの作業工程の中で、品質管理・作業管理・衛生管理・温度管理を重点的に行い、経営の評価・判定へと進める。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：給食実務論	授業の冒頭にテストを実施し、テスト後に前週のスライドを用いて解説し、自己採点をさせた。解説に用いたスライドは前週の授業スライドですすでに配布済みのものを用いて、解けなかった問題を後で復習しやすいように配慮した。小テストの内容が前回の授業のまとめになるようにと配慮したことが、学生にとってはボリュームが多すぎ、負担になってしまったので、次年度はもう少し内容を絞る必要があると考える。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：給食経営管理学	毎回、講義の最後にチャレンジテストとして講義内容に関する国家試験の過去問に触れるようにし、授業で学んだことがどのような形で国家試験に出題されるのかイメージできるようにした。 臨地実習や国試勉強につながるよう、病院や福祉施設など施設別の経営管理については、保険点数の算定要件や業務の範疇などについて教科書で紹介されている関係の法律や通達等の必要な部分をWebClassで資料として配信し、実際の法規等も原文に触れるようにし、根拠を確認するように心がけた。しかしすべての資料に授業内で触れることは時間的に難しく、課題が残った。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：給食経営管理実習Ⅰ	大量調理は1つの料理を一人が最初から最後まで担当するのではなく、作業区分ごとに分担して調理を行う。学生にとって大量調理は初めてであり、本実習では作業手順や大量調理機器の操作の修得を目標としていることから、実習では汚染区域担当と清潔区域担当を週ごとに交替し、各自両方の作業を体験し、作業全体を見ることができるよう配慮した。また調理実習の前週には当日の作業の流れに沿って、調理操作や機器の使用方法について説明し、当日のイメージトレーニングを試みたが、学生の理解度のばらつきが大きかった。またグループ内での情報の共有がうまくできず、帳票作成に時間がかかってしまった。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：給食経営管理実習Ⅱ	初回の授業で班ごとに献立を検討したが、春休み中に各自テーマに沿って考案・試作した献立を持ち寄り、予定献立の検討を行ったため、スムーズに予定献立を作成することができた。班ごとに実習に向けての準備を進めたが、献立ごとに作業分担し、それぞれが自覚をもって計画から実習まで取り組むことができ、2年後期の給食経営管理実習Ⅰと比べて様々な面で理解が深まったのではないかと考える。 実習前に、調理担当者に調理工程の説明をさせることで、機器の使い方を覚えるきっかけになった。実習の回を重ねるたびに自ら考えて行動することができるようになり、学生の成長を実感した。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	日本栄養改善学会学術総会 参加 日本給食経営管理学会学術総会 参加 日本給食経営管理学会研修会の受講 日本栄養士会研究教育事業部リーダー研修会 受講
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

給食実務論で食事計画力アップのため、毎週期間献立を作成したことで、料理に対する関心を深めることができた。しかし食材のポーションサイズや基本的な調味濃度が身についていない、食材の旬や扱い方を知らないといった献立作成以前の課題の積み残しが問題となっている。今後は食事計画論・臨地実習事前指導とも連携を取りながら学生の献立作成に対する苦手意識を少しでも取り払えるような教材の開発を試みる。

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：助教

氏名：石郷 祐介

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

情報メディア分野における教育を、単に情報技術やプログラミング技術を習得するためのものではなく、学生が自ら課題を発見し、情報を活用し、他者と協働しながら、社会に向けて価値ある表現やシステムを創造する力を育成することであると考えている。

情報メディア学科のディプロマ・ポリシーでは、情報システムやネットワークに関する知識・技術に加え、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力の育成が示されている。

私の教育では、プログラミングやアプリ開発を通して、単なる技術習得にとどまらず、「誰の、どのような課題を解決するのか」を学生が考えることで、講義で扱うから学ぶのではなく、社会における技術や分野の意味・役割を理解したうえで学ぶ姿勢を育てている。

また、正解がひとつに定まらない課題に対し、アプリケーション、Web、映像、サウンド、デザイン、電子工作などの多様な技術を組み合わせながら、学生が自身の経験や関心を出発点としてアイデアを形にすることを大切にしている。

さらに、コンテスト、ハッカソン、展示、地域連携活動などを通して、学生の制作活動が独りよがりなものとならず、社会との関わりの中で自らの活躍の場を見いだせるよう支援している。これらの活動を通じて、学生が自由な発想と責任ある態度をもって学び、他者と協働しながら、社会の課題に創造的に働きかける力を育成していきたい。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：プログラミング入門	学生が主体的にプログラミングの基本概念を学べるように、各自が自由にテーマを選択し制作する課題を設定している。また、過去の講義データから、プログラミング理解度を測る指標を独自に作成し、その検証結果をまとめて、大学紀要にて論文発表し、受講生の理解度を高めるための課題設計や指導方法の改善に取り組んでいる。
2.教育活動や教育業績 科目名②：プログラム演習IV	3年生を対象としたプログラム演習として、プログラマを志望する学生に向けて、エンジニアに求められるプログラム設計手法を扱っている。ただし、これらは理解が難しい抽象的な概念であるため、設計の意図や効果を視覚的に把握しやすく、かつ学生ひとりひとりが独自の工夫を盛り込みやすいシューティングゲームを題材とした課題を設定している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：情報メディア特別演習	年間30件を超える学外の開発イベントや展示会において、学生が自らアイデアを考案し、プロトタイプ作品を制作して参加している。2025年度までに、優秀賞を含む13件の賞を受賞した。さらに、他大学と合同で「HelloWorld展」を、年2回定期開催した他、群馬県前橋市や岐阜県郡上市のNPO法人、愛知県安城市の社会福祉協議会、稲沢市の企業団体と連携したプロジェクトにも取り組んでいる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：プログラミング入門	3科目すべてで評価4～3の合計が90%を超え、評価4のみでも65%以上となるなど、高い結果だった。自由記述では「相談しやすかった」「相談したら適切に答えてくれた」といった意見が多く、講義内外での質問対応が理解度向上に寄与したと考えられる。期末課題については、例年「制作期間が短い」との意見があったため、今年度はSAを2名体制とし、質問対応を充実させた。その結果、自由記述でも「SAが2名いて助かった」との声が多く見られた。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：プログラム演習Ⅳ	専門性が高いこともあり、受講生ごとの理解度に差が生じやすい。そのため、解説中心のフェーズを早めに終え、期末課題の制作時間を長めに確保することで、個別の質問対応やフォローに充てる時間を重視している。期末課題では、近年AIを使用してプログラムを作成する学生が急増しているため、学生自身で動作を確認せず、要件に満たさない課題の提出が増えているので、要件の見落としを防ぐためのチェックシートを用意し、学生自身が提出前に動作確認を行える仕組みを整えたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：	
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	講義内で実施している課題について、学生の理解度や達成度を評価・分析し、その結果を論文としてまとめ、教育効果の検証を行っている。また、他大学や専門学校の教員と意見交換を行いながら、教材や授業で活用するツールの改善・更新に取り組んでいる。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>プログラミング入門では、期末課題の提出率が93.6%となり、過去3年間継続して90%以上を維持している。令和8年度も、同水準の提出率を維持したい。</p> <p>情報メディア特別演習では、年間30件の学外イベントや展示会に参加し、学生チームは5件の受賞を達成した。なかでも、名古屋テレビ放送主催の開発イベントと大阪で開催された開発イベントでは、2年連続で受賞した。また、産学・地域連携の取り組みとして、企業やNPO法人との連携プロジェクトを5件、他大学との共同研究プロジェクトも実施した。</p> <p>これらの活動に関連して、情報メディア学科ニュースには、28件の記事が掲載され、学外の企業や団体に対しても本学の教育活動や学生の取り組みを広く知ってもらい、展示会やイベントに招待されるようになってきた。令和8年度も、学生の主体的な制作活動と社会との設定をさらに充実させ、同様の成果を継続的に生み出せるよう取り組みたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：助教

氏名：伊東宣明

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私は、「現代美術」「映像表現」「障害のある人の創作活動」「展覧会企画」という専門分野を基に、主に「映像メディアコース」と「メディアデザインコース」の授業を担当しています。

① 生きる力を育む教育
これまでさまざまな教育現場で指導してきましたが、単に「知識」を伝えるのではなく、どのような職場や制作現場でも実践的に活用できる力を育むことを心がけてきました。専門的な知識や技術だけではなく、本当の意味で社会で活躍できる人間にはなれないと考えています。芸術的感性を磨くことで世界の捉え方を得、また新しい知識を吸収する方法や、他者と共に働くためのルールなど、単に知識や技術を学ぶことにとどまらず、卒業後にも学生が役立つ「生きる力」を身につけられるように、常に意識して授業を行っています。

② 私自身が学生にとっての居場所であること
若い世代は多様な悩みを抱えており、場合によっては大学に通うこと自体が難しくなることもあります。そういった時こそ、教員である私が学生にとっての「居場所」となり、安心して相談し学び続けられる環境を提供することが重要だと考えています。
私のプロジェクトへの参加や、イベント・アルバイトへの協力を通じて、学生に社会とのつながりを持つ機会を作るよう努めています。その過程で、学生の些細な悩みにも真摯に耳を傾け、誠実に向き合い、一緒に解決策を考えます。何よりも、学生を「見放さない」という姿勢を大切にしています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：デジタルアート入門	1年次に履修する本科目は、ほとんどの学生にとってIllustratorやPhotoshopに初めて触れる機会となります。Illustratorについては独自教材を用い、数回にわたる復習を通じて確実にスキルを身につけることを目指しています。 反復練習によって全員が基本操作を習得することで、IllustratorやPhotoshopの技術だけでなく、実技における基本的なスキル習得の方法も体得できるよう工夫しています。 ☑ ☑
2.教育活動や教育業績 科目名②：WEBデザイン	単に「WEBデザイン」を制作するだけでなく、まずはUX・UIの視点から取り組み、架空の顧客を設定したうえで、マーケティングや色彩設計を行い、カンパ（デザイン）の試作を経て、最終的に架空のカフェのWEBデザインを完成させました。 また、制作工程を細かく段階に分け、ワークショップ形式で進行することで、全くの初心者でも無理なく、着実にデザインを組み上げることができました。 ☑
3.教育活動や教育業績 科目名③：専門演習	デザインと映像を学びたい3年生を対象とした専門ゼミであることから、昨年度の基礎演習を踏まえ、「デザイン」と「映像」の2分野に分け、学生が興味を持ちやすいように個別にカリキュラムを構成しました。 「デザイン分野」では、オープンキャンパス参加者向けのステッカー制作、公募への挑戦、実践的な課題に取り組みました。 「映像分野」では、ドキュメンタリー撮影や短編映画の制作に加え、論文執筆にも挑戦しました。 いずれの分野においても学生の成長は著しく、学内チャンスのデザインに採用されたほか、福沢市秋葉記念美術館の市民展ポスターに選出され、本学70周年ロゴコンテストではグランプリ・準グランプリを受賞しました。また、ニッポンものづくりデザインアワード2025で企業賞を受賞し、クリーンプラネットキャラクターデザインコンテストでは審査員特別賞を受賞、さらに日本映像学会での作品発表など、数多くの成果が見られました。 さらに、成果だけでなく、早期からポートフォリオ制作や多くのフィードバックを行うことで、技術面や精神面での成長も大いに感じられました。

4.教育活動や教育業績 科目名④：卒業演習	<p>前期は個人面談を中心に、学生一人ひとりの就職活動のサポートと制作研究に関するアドバイスをを行い、これにより学生が自身の進路や研究テーマを明確に認識し、取り組みやすい環境を提供しました。</p> <p>夏休みには早期に論文執筆を行わせ、後期には卒業制作と卒業論文を往復することで、学生は自らの研究テーマに基づいて深い考察と実践的な制作活動を行うことができました。</p> <p>進路に関しては、多くの学生が希望していた制作系の会社に内定をもらい、新たな進路先も開拓され、学生たちは希望する分野でのキャリア形成に向けて大きな一歩を踏み出しました。卒業研究論文と卒業制作という負荷のかかる課題であったものの、どの成果物も学びを真摯に反映させ、最終的に学生たちは自らの努力と成果に誇りを持ち、無事に卒業を迎えることができました。</p>
--------------------------	---

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：デジタルアート入門	<p>昨年度の反省を踏まえ、SA2人体制を全授業で行うことで、授業評価アンケートでは科目の平均値は3.6~3.9（4点満点）と概ね高水準で推移し、全体として学生の理解度・満足度は良好でした。「安心して学べた」「自然と身についた」との声が多数を占めました。総じて、負荷は高めでありながらも満足度は高く、当初の意図通り教育効果と学習意欲の両面で非常に評価の高い授業であったといえます。</p>
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：WEBデザイン	<p>授業評価アンケートでの満足度（項目12）は平均3.83と高く、授業全体に対する評価は非常に良好であった。各評価項目の平均値は3.67~3.89の範囲にあり、すべての項目において高い評価が得られていることから、授業設計および指導方法は概ね適切であったと判断できる。</p> <p>自由記述においては、丁寧な説明により理解しやすかったこと、基礎から段階的に学ぶことができたこと、修正指導を通して理解が深まったこと、Studioやデザインツールの操作を習得できたこと、授業の流れが明確で分かりやすかったことなど、指導方法および授業構成に対する肯定的な意見が多く見られた。特に、「基礎に戻りながら説明してくれた」「修正を通して理解できた」といった記述から、段階的かつ反復的な指導が学生の理解の定着に有効に機能していたことが確認できる。また、「最初は使い方が分からなかったがすぐに使えるようになった」という記述から、本授業は初心者に対しても無理なく技能習得を可能にする構成となっており、基礎から応用へと着実に理解を深める教育効果があったと考えられる。一方で、「締切が集中して大変だった」という意見も見られたが、これは制作課題を通して技能の定着を図る授業の特性によるものであり、全体としては理解の促進と技能習得に寄与する適切な学習負荷であったと判断される。</p>
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：芸術	<p>授業評価アンケートでの満足度（項目12）は平均3.79であり、全体として高い評価が得られている。各評価項目の平均値は3.42~3.84の範囲にあり、授業構成および指導内容は概ね適切であったと判断できる。</p> <p>自由記述においては、芸術に対する理解が深まったことや、新たな視点や価値観を得ることができたこと、自ら考える機会が多く設けられていたことなど、授業内容の教育的意義に対する肯定的な意見が多く見られた。特に、作品鑑賞や課題制作、思考を促す授業構成により、単なる知識の習得にとどまらず、芸術の本質や多様な価値観について理解を深めることができたという記述が多く確認された。</p>
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	<p>本授業は、映像制作における実践的な能力の育成を目的とし、Project Based Learning（PBL）型の授業として設計している。学生はPremiere Pro等の編集技術の習得に加え、ドキュメンタリーや短編映像の制作を通して、企画・構成・撮影・編集に至る一連のプロセスを経験することで、思考と制作を往復しながら学ぶ構造となっている。</p> <p>授業評価の結果からは、授業内容の理解度や達成感に関する項目において高い評価が得られており、特に「実践的に学ぶことができた」「映像制作において重要な視点を学べた」といった記述から、学びが単なる技術習得にとどまらず、意味のある経験として学生に定着していることが確認できる。また、教員による継続的なフィードバックや対話的な指導により、学生が安心して試行錯誤できる環境が形成されている点も、本授業の特徴である。</p> <p>一方で、「課題が難しい」「制作の負荷が高い」といった意見も見られ、課題設定の難易度や作業量が学生にとって一定の負担となっていることが明らかとなった。これは実践型授業において不可避な側面でもあるが、初学者にとっては導入段階でのハードルとなる可能性がある。</p> <p>今後の改善としては、課題の段階的設計（模倣から応用、自由制作へと移行する構造）の導入や、早期に達成感を得られる小規模な成功体験の設計が重要であると考えられる。また、評価基準や完成イメージの明確化、ピアレビューの導入などにより、学生が自律的に学びを進められる環境を整備することで、負荷を適切にコントロールしつつ、より高い教育効果を目指す。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<p>昨年度に引き続き、すべての授業において学内学習サイト「WEBCLASS」を活用し、学生からの質問を随時受け付けています。寄せられた質問には必ず回答し、その内容を翌週の授業で口頭にて共有するとともに、PDFとして配布することを徹底しています。これにより、授業内で生じた不明点を迅速に解消するとともに、必要に応じて授業内容の微修正を行うなど、きめ細やかな指導が可能となりました。</p> <p>また、学外での体験を通じた実践的な教育にも注力しています。昨年度に立ち上げたデザインプロジェクトの充実を図るとともに、新たに映画・映像プロジェクトを立ち上げ、授業とゼミ、学生プロジェクトの連携を強化しました。</p>
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>本学に着任して以来、学生とのコミュニケーションを最優先に教育活動に取り組んできました。授業に加え、ゼミ生とのBBQや芋会、東京や地方の美術館巡りの引率などを通じて、お互いの信頼関係の構築を大切にしてきました。こうした関係性の構築により、学生の学習意欲が徐々に高まっていることを実感しています。</p> <p>また、ゼミ生が制作した作品が福沢市荻須記念美術館の市民展ポスターに採用されたほか、本学70周年ロゴコンテストではグランプリおよび準グランプリを受賞しました。さらに、ニッポンものづくりデザインアワード2025で企業賞を受賞し、クリーンプラネットキャラクターデザインコンテストでは審査員特別賞を受賞、日本映像学会での作品発表など、数多くの成果が見られました。また、初めてのゼミ卒業生についても、多くが希望する制作会社への就職が決まり、学びと実践の成果が進路にも結びついています。</p> <p>今後も、「教える・教わる」という関係にとどまらず、学生と共に歩みながら成長していくことを目指し、教育活動に取り組んでまいります。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：伊奈和彦

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養や食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

本学の立学の精神に基づき、自由と責任を自覚し、品性と社会的責任を備えた人材の育成を教育の基盤とする。また、情報メディア学科のディプロマポリシーを踏まえ、情報システムやメディアに関する知識・技術の修得に加え、情報活用力、コミュニケーション力、創造力、課題解決力を統合的に育成することを重視する。
その実現のために、フレッシュマンセミナーにおいては学修姿勢や主体性の形成を図り、学生プロジェクトでは実践的活動を通じて主体性と協働性を育む。さらに、博学連携の取り組みを通して社会や地域と結びつけた学びを提供し、知識と実践の往還を促す。これらを相互に関連づけることで、学生の経験を学びとして定着させ、人間力と専門性の両立を図る。
以上の教育実践を通じて、学修成果を実社会に生かし、社会から信頼される人材の育成を目指す。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナーでは、本学の立学の精神に基づき、大学での学修に必要な主体性と責任感の育成を重視し、少人数での対話や振り返りを通して学修習慣の確立とコミュニケーション能力の向上を図っている。また、大学生生活への適応支援にとどまらず、将来を見据えた学びへの意識づけを行い、基礎的な人間力の形成を促している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：AI教育プロジェクト	学生プロジェクト（AI教育プロジェクト）では、情報メディア学科のディプロマポリシーに基づき、創造力・課題解決力・協働力を統合的に育成することを目的として、学生主体のプロジェクト型学修を実施している。特に、「あいち朝日遺跡ミュージアム」との連携による展示活動では、AIやデジタル技術を活用した作品制作に取り組み、稲作過程を題材とした教育用ゲームなどが来館者や地域から高い評価を得た。さらに、これらの成果を学会発表へと発展させ、学修成果の社会的発信にもつなげている。今後は、活動の振り返りと成果の言語化を強化し、学びの定着を一層図っていく。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：フレッシュマンセミナー</p>	<p>フレッシュマンセミナーでは、学生の大学生活への適応支援や学修習慣の定着、コミュニケーション能力の向上に一定の成果が見られた。一方で、学生の主体性や将来を見据えた学びへの意識づけには個人差があり、受動的な姿勢にとどまる学生への働きかけが十分であったとは言い難い。今後は、目標設定や振り返りの機会をより体系的に設け、学生が自らの成長を実感できる指導の充実を図る必要がある。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：AI教育プロジェクト</p>	<p>学生プロジェクトでは、AIやデジタル技術を活用した実践的な活動を通じて、創造力や課題解決力、協働性の育成において一定の成果を得ることができた。特に、「あいち朝日遺跡ミュージアム」との連携による展示や学会発表は、学生の学修成果を社会に発信する貴重な機会となった。一方で、活動が実践中心となる中で、学修成果の整理や言語化、評価の明確化が十分でない側面も見られた。今後は、振り返りや成果の可視化を強化し、経験を学びとして定着させる指導の充実を図る必要がある。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>令和7年度は、大学での教育経験が初年度であったことから、これまでの高校教員としての指導経験を生かしつつ、大学教育への適応と授業改善に努めた。具体的には、学生の主体性や対話を重視した指導方法を取り入れ、フレッシュマンセミナーや学生プロジェクトにおいて実践的な教育活動を展開した。また、これまでの博物館運営の経験を基盤として大学と博物館との連携協定を推進し、学生プロジェクトにおいて「あいち朝日遺跡ミュージアム」との連携による実践的な学修機会を創出した。これにより、学生の学びを社会と接続するとともに、大学および地域双方にとって有益な教育活動を実現した。さらに、これらの取り組みについては研究機構においても博学連携の実践として整理・報告を行い、教育改善の一環として位置づけている。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度の成果・教育業績 令和7年度は、大学着任初年度として、これまでの高校教員および博物館運営の経験を生かした教育実践を行った。フレッシュマンセミナーでは、学生の主体性やコミュニケーション能力の基礎形成に取り組み、学生プロジェクト（AI教育プロジェクト）では、実践的な制作活動を通じて創造力・課題解決力・協働力の育成を図った。特に、「あいち朝日遺跡ミュージアム」との連携による展示活動では、地域と連携した学修の実現とともに、教育成果を学会発表として発信するなど、教育と研究の両面で一定の成果を得た。 ※今年度、本学とあいち朝日遺跡ミュージアムは連携協定を締結した。</p> <p>令和8年度の目標 令和8年度は、これまでの実践を踏まえ、教育活動の体系化と学修成果の可視化を一層進める。新たに担当する基礎演習では、遺跡や文化財、博物館を題材とした学びを通して、情報メディア分野との接続を意識した知識の習得と発想力の育成を図り、学生の今後の専門的学修への動機づけを高める。また、フレッシュマンセミナーおよび学生プロジェクトとの連携を強化し、学びの連続性を意識した指導を行うとともに、振り返りや評価方法の改善を通じて、学生の成長を実感できる教育の充実を目指す。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 助教

氏名： 岩橋 涼

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

食を学ぶにあたっては、日常の食行動と国内外における社会的・経済的課題を関連づけ、食を多面的に捉える視点を養うことが重要である。フードビジネス業界で必要とされる知識の習得および食への理解を促すために、この点を重視した教育が必要であると考えている。講義では、身近な食に関する話題からグローバルな食料システムに関する諸問題まで取り扱うことで、フードビジネスの専門領域に関する知識を身につけるとともに、社会の発展に貢献するための倫理観や責任感を養うことをめざす。国内外で生じている食に関連する問題については、学生がまず問題への理解を深め、そのうえで問題解決のための方策を考え、実践する能力を身につけることを重視する。授業ではグループワークによるディスカッションやプレゼンテーションをおこない、学生が自らの考えを発信し、他者との意見交換ができる機会を提供する。それらを通じて、多角的な視点からの検討を促し、コミュニケーション力を高めることをめざす。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：食物流通論	2年の必修科目である食物流通論では、フードスペシャリスト資格認定試験の科目の一つとして、食市場や食生活の変化、食物流通の基礎理論や特徴、食消費を取り巻く課題について学ぶ。初回授業では、導入として前日の夕食に何を食べたかという問いから「私たちが食べているものがどこからくるのか」について考え、食物流通を理解することの重要性を認識できるよう授業を組み立てている。定期試験以外に3回的小テストを実施することで、知識の定着を図るとともに、定期試験対策にも取り組みやすいようにしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：食品貿易論	食品貿易論では、グローバルな視点から食料・農業の現状に対する理解を深めるため、とうもろこしや小麦といった具体的な農産物を取り上げたり、海外のドキュメンタリー映画を視聴するなどの取り組みをおこなっている。また、適宜グループワークを取り入れて学生同士が考えを述べたり意見交換する機会を設けている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：食品産業論	食品産業論は3年後期の選択科目であり、食料品の生産・流通・消費について理解を深めるとともに、具体的なトピックを通して食品産業を取り巻く諸問題について考えていく。これまでの学びをふまえて、食品産業に関わる多様な取り組みを学ぶとともに、フードビジネスおよび食をめぐる諸問題に対して自らの考えを論理的に述べられるようになることをめざす。レポート課題では、よりよいレポート作成をめざすため、問いの立て方やレポートの構成などを説明する。
4.教育活動や教育業績 科目名④：専門演習	専門演習では食と農をつなぐという視点から、とくに農業への理解を深めることを目的としている。具体的には、農業に関する統計資料からデータを読み取り、グラフ化して比較・検討をおこなう。データに基づいて地域農業の現状を知るとともに、複数地域を比較することで共通点や相違点を考察する。発表の機会を取り入れ、ディスカッションを積極的にこなす。また、JAの直売所や出荷場などへの見学や担当者へのインタビューをおこない、現場の取り組みへの理解を深める。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：食品流通論	授業評価アンケートは良好な結果であり、自由記述ではノートや教科書の重要ポイントなどわかりやすく勉強がしやすかった、全体的に見やすいスライドだった、などの回答がみられた。小テストについては勉強不足だったと反省を述べる記述もあったため、普段からしっかり勉強に取り組むよう促していきたい。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：食品貿易論	授業評価アンケートは良好な結果であり、自由記述では毎回の課題があり授業の内容が定着しやすい、食品に関連する問題や課題について様々な視点から学べたといった肯定的な意見がみられた。受講者数が多くグループワークはできなかったものの、周囲の人との話し合いを設けた授業は好評であったため、今後もこのような機会を設けていきたい。しかし、レポートでは自分で考えずAIを用いて作成したと思われるものがあり、対応を検討していきたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食品産業論	授業評価アンケートは良好な結果であり、自由記述ではスライドが見やすかった、現代の社会問題を取り上げるので知らないことも学べてよかったとの記述があった。要望として、就職活動による欠席を考慮してほしいとのコメントがあり、欠席者用の任意課題は設定したものの対応を検討する必要があると感じた。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：専門演習	授業評価アンケートの対象外であるため、自己省察のみおこなう。統計資料の閲覧とグラフ化は細かい作業であったが、学生は丁寧に取り組んでいた。他地域との比較については、データをもとに考察することが一定程度できたと思われる。また、今年度はJAからの感謝祭出店の依頼によりパン工房ベルクと共同による商品開発にも取り組んだ。学生にとって学びの多い機会となったと考える。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	授業評価アンケートを実施し、結果をふまえて授業内容の改善・充実を図っている。また、毎回の授業で課題や感想（あるいは授業に関する疑問等）をwebclassで提出させており、学生からの意見に対応している。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度に担当した講義科目における授業評価アンケートの結果から、授業の基本的な方向性については次年度も継続していきたいと考える。ただし、学生によって授業への取り組み方に差があるため、より多くの学生の主体的な学びを促す授業づくりを心がけたい。</p> <p>令和8年度は、講義内容の大枠はあまり変えず、一部のトピックでは最新のものや学生の興味・関心に沿ったものへの変更をおこなう。また、受講生の人数によってやり方を工夫する必要があるが、自分の考えを他者に伝えること、他者の考えを聞いて話し合う機会を充実させたい。最終レポートを課した科目については、AIを用いて作成したと思われるものがあり、適正な評価が難しくなることから、一部定期試験に変更する。ただし、学生自身が自らの考えを文章として論理的に表現できるよう、文章を読む機会や書く機会を取り入れることについては引き続き重視する。この点については、演習を中心に実施したいと考えている。卒業演習については、所属学生が3年生からの継続となるため、卒業研究として成果を出すための指導をしていきたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 教授

氏名： 内田 英伸

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

- ・地域食材の新規活用法を開拓するため、機能的栄養素に対する理解を深め、自分たち、親たち、祖父母たちの健康について考えさせる。
- ・交友関係を大切に、他人に信頼され、実行力のあるリーダーになるように努力させる。
- ・志を高く持ち、長期展望を抱きつつ、日々、学修、自己研鑽を続けることのできる人材を育成する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：食品学実験	・モルの計算、ガラス器具の減菌、微生物の培養と顕微鏡観察、中和滴定、酸化還元滴定、糖とアミノ酸の分析、タンパク質の定量 ・試薬の調製法、食品添加物の理解、食品表示法の学習、機器機器方法の理解 ・実験の結果の観察、データの集計と考察 ・配布資料の作成とプレゼンテーション
2.教育活動や教育業績 科目名②：食品表示	・食品表示の法令違反とそれに対する懲罰の事例を知る ・課題プリントへの朱書き、返却、手渡しで学生とのコミュニケーションを図る ・希望者にwebclass対策講座（オフィスアワーでの個別学習）を開講 ・検定試験問題集の反復演習（ウェブクラスのクイズ、復習のプリント、小テスト、期末テスト） ・初級検定の団体申込（11月）、中級検定の受験勧誘（11月、翌年6月）
3.教育活動や教育業績 科目名③：統計処理	・商品売上、官能評価、社会調査に関するアンケート結果を集計し、統計解析する基礎を学ぶ ・分散と標準偏差、確率分布のいろいろ、帰帰分析、統計的解析の手法、クロス集計、ノンパラメトリック検定について概説 ・例題のオンデマンド解説、エクセル課題の解答と提出 ・提出課題への朱書き、返却を通じ、学生とのコミュニケーションを図る ・資料をまとめ、整理する習慣を身につける（課題プリントの2穴パンチ、綴じ紐綴じ、整理、保管後、レポートとして提出） ・実験模擬データの統計解析（例えば、メンデルの細胞質遺伝の法則の検定）
4.教育活動や教育業績 科目名④：食品安全学	・食中毒が食品関連事業所にあたる影響を学ぶ ・HACCP、ISO22000、FSSCの規格について学び、食品衛生の管理法について理解を深める ・フードスペシャリスト検定試験のための反復演習（ウェブクラスのクイズ、復習のプリント、小テスト、期末テスト） ・食中毒を引き起こす生物の細胞構造、不活化を理解する ・高校レベルの生物、化学を復習し、食品添加物、洗剤、汚染物質について理解する
5.教育活動や教育業績 科目名⑤：加工食品学	・食品保蔵のための技術を学習する。 ・食品加工の目的、原理を理解する （食品添加物の働き、水分活性の定義、膜濃縮、浸透圧の計算（塩蔵v.s.糖増）、発酵微生物の増殖特性、殺菌、凍結乾燥） ・ビール、ヨーグルト、かまぼこ、お酢、つけものの加工の工程、工場について学ぶ
6.教育活動や教育業績 科目名⑥：演習（専門・卒業）	・食品加工、衛生管理、食品表示、食品学実験に関する知識を融合させ、関連する学習に興味を持つ ・食品関連事業所の食品管理部門や食品加工工場の現場について理解を深める ・地場産品の複合商品、その流通について模索する ・一次資料、調査結果をポスターにまとめ、発表する

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：食品学実験</p>	<p>今年度の科目担当が6年目となり実習に慣れてきたため、「理解度」「満足度」のポイント得点は4点を中心に分布するなど学生からの評価は良くなっている。さらに、「目的・方法の提示」も同様に良い点であった。その一方、「実験方法の説明を実験前にして欲しい」というコメントがあり、実験前の実習の導入部を丁寧に実施する必要性を感じた。本年は、全体として実験後の考察をしっかりとレポートに書くよう重点的に指導したため、最初の実験目的の説明が手薄になったかもしれない。今年度に特有の事情として助手が変わったこと、試薬棚の瓶の所在が把握できなくなったこともあったことが影響したことは否めないが、そのような授業環境下でも時間内に実習を終わらせるよう気を付けたためもあると思う。還元糖の検出、クロマトグラフィーなど待ち時間の長い実験を行う回には、まず、実験操作を開始し、説明を後回しにせざるをえないのであるが、来年度は、毎回、学生の顔を見つ、短時間であっても、実習の全体像を最初に説明したい。アンケートの回収率が昨年より下がりが、また、「思っていることが私たちと先生とずれていて」というコメントがあった。その原因として、2年次学生のGPAの二極分化、その背景にある、高校で学ぶ基礎科学、基礎生物の知識量の差があると思う。質問が少なく、授業後早く教室を出ていく学生にも興味を持ってもらうよう、個々の学生との対話を密にすることから対応してゆきたい。しかしながら、学力が高く、意欲のある学生を伸ばすことも大事であり、翌年度にゼミに来てもらい、丁寧に指導することで補ってゆきたい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：食品表示</p>	<p>今年度は、1組の評価点が「授業への出席」「授業理解」の点において2組より低く、1組では一部の学生の学習意欲を十分引き出しきれなかったようである。その一方、2組ではこれらの評価点が良く、また、食品表示検定の団体受験の申し込み者数も多く、学習意欲が高かった気がする。以上の理由として、今年度、食品学実験の受け持ちが2組だけとなり、1組学生と対面でコミュニケーションをとる機会が減ってしまったこと、また、1組の講義の使用教室であるC302でOHPが使用できず、2組のように実物の食品ラベルを十分見せることができなかったことがあると思う。1組では、食品学実験の成果発表会のプレゼン原稿を何度もやり取りし、スライドを推敲したため、ディスカッションすることの意義が十分理解してもらえたと思っている。今年は食品表示検定の受験対策を強化し演習問題を昨年より増やしたため、学習意欲が低い学生や優秀でも十分意識疎通でなかった学生の評判が良くなかったかもしれない。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：統計処理</p>	<p>カリキュラムで社会調査士の資格を取得するためにこの科目は新たに必須となり、今年度の履修者は39人と、昨年度の16人の2.4倍に増加した。それにともない、学習意欲が低く、遅刻を繰り返したり、期末課題を提出しなかった学生が散見された。受講生が多い中でのパソコン演習は指導の目が届かなくなるはずであったが、課題問題のレベルは昨年度のものと同じレベルとした。それにもかかわらず、評定点の多くは昨年とほぼ同じレベルを維持した。しかしながら、授業への満足度は昨年に比べ平均点の差はほとんどないものの、ばらつきが大きくなり、学習意欲の低い学生の存在が伺われた。将来、自分のお店を開業し、費用対効果を考えた経営戦略を立てる上で、売上高や利潤の高い商品などを統計処理して把握することは重要であり、その際、本講義の内容を思い出してもらいたいと常々伝えている。アンケートの回収率を更に高めるため、学期末に欠席が増える学生を把握しこまめに話しかけるようにしたい。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：食品安全学</p>	<p>「課題にしっかり取り組む」という項目の点は1組、2組で3.75、3.60と概ね良かった。「理解できた」については、1組、2組で3.10と3.15であり、理科系の難しい内容が多い中で、概ね良好な点であった。今年度は穴埋めのプリントをシンプルに書き直し初心者に配慮したが、これが授業の理解につながったと考えている。教科書に関連する体験談、豆知識は概ね好評であったと思う。その一方、4時間の1組で、「教員の話の聴き取りやすさ」が2時間の2組に比べ著しく低く、「雑談がつまらない」というコメントもあり、また、授業開始直後にトイレタイムを設けたにもかかわらず、トイレに行かせてほしいというコメントが複数上がり、お互いの意識疎通がスムーズでなかったことが伺われる。この科目は必修科目であったため、授業後に「ボランティア活動」の日程調整を行い、欠席した学生の予定変更をボランティアの受入れ先、同級生に埋め合わせてもらうこととなった。そのため、自己都合による予定変更を繰り返さないよう諫めたこともあり、不興を買ってしまった。また、1組には配慮願を提出した再履修者、長期間入院した2年生、インターンシップ参加で欠席しがちな3年生がいたためか、教室に居なくても何とかなるという雰囲気は充満してしまっていた。その一方2組にはシニアの社会人の科目履修生がおられ、とても、熱心に勉強されていたため、教室に緊張感があった。全体の中の少数ではあっても、安全学（の教科書）、関連する食品表示などに興味を持つ学生を掘り起こすことができ、この点で良かったと思うので、これら学生に対し専門ゼミなどで継続して指導したい。</p>
<p>5.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名⑤：加工食品学</p>	<p>昨年度の履修生45人に比べ今年度は30%増加して60人に増えた。昨年に比べ、情報メディア学科の学生が昨年度より多く、また、フードビジネス学科の3年生、4年生が多かった。各週のレポートを平気で白紙のまま提出してくる学生が散見され、また、授業開始直後の5分間にトイレタイムを設けたが、その後もトイレに行く2年生学生が複数いた。授業評価には記載されていないが、4年生から「教室を出て、廊下で大声を出し、手をたたいて戻ってくる下級生がいた」というコメントがあり、授業が崩壊しかけたので、レポートでの学生管理を強化した。学期のはじめに、本科目をなぜ履修するのか、本科目で何を学びたいのかを各学生に問うようにし、単位取得だけの安易な履修を求めないようにしたい。また、自分自身が頻年なので90分の真ん中でトイレタイムを設け、学生の反応を見てみたい。その一方、食品加工はいかにうまく食品を保存するかという人類の英知の集約であり、フードビジネスの利潤に直結する重要な事項に触れる科目である。そのため、急速凍結、ビールの醸造、牛乳の殺菌・包装、ヨーグルトの発酵、かまぼこの製造、シラスの加工、海苔の包装など身近な加工食品について具体的に詳しく解説するトピックスを設定してみた。フードビジネス学科2年生は学期末に必修科目である安全学においてアンケート提出の催促が十分なされているが、今後、同学科3、4年生と情報メディアの学生に対し、繰り返しアンケート提出を周知することでアンケートの回収率を高めたい。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業課より要配慮の通知があった学生には、ゼミの教室を訪問、指導教員とその学生と連携し対応した。 ・ 授業で質問をしてくる学生に、対面の検定試験対策講座へ参加してもらった。 ・ 授業の途中で外出する学生には「ボランティア活動」の日程調整に際し、学友とのラインでの情報交換、授業課事務職員との面談の機会を設けた。 ・ 福友祭でポスターのグループ発表の後、イチョウ講演会で個人発表させ、5名の受賞者を顕彰した。 ・ 卒業研究発表会では4年生の口頭発表を下級生にzoomなしの対面で聴講させ、4件の学会発表で学生と共著で研究成果発表した。 ・ 卒業ゼミ生1名に、岡崎の基礎生物学研究所の細胞動態研究部門研究室への体験入学に参加させた。 ・ ゼミで工場見学2件、ミニレクチャー2件を実施した。
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度の成果・教育業績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2025年度食品表示検定表彰 団体初級・中級、学校の部門3位 ・ 学術論文（2026年3月） 一般講演会「イチョウは生きている化石」報告書、内田英伸、吉田洋、内田美重、名古屋文理大学紀要 26: 11-18 ・ 第66回日本植物生理学会年会発表（2026年3月、東京） 愛知県新城市作手のオハツキイチョウの形態、藤井友香、古橋龍馬、呂虹橋、山下博史、小林正美、内田美重、景山伯春、井上和仁、内田英伸 ・ 日本植物学会第89回大会発表（2025年9月、福岡） イチョウの早生種と晩生種の形態形成と色素組成の比較解析、山下博史、澁谷龍弥、呂虹橋、内田美重、小林正美、景山伯春、井上和仁、内田英伸 ・ 日本植物形態学会第37回大会発表（2025年9月、福岡） 愛知県新城市のオハツキイチョウの特性について、呂虹橋、彦坂歩美、藤井友香、古橋龍馬、堀田紗優美、内田美重、佐藤征弥、山下博史、小林正美、景山伯春、井上和仁、内田英伸 ・ 日本メンデル協会第2回大会発表（2025年6月、福井） イチョウの早生種と晩生種のRNAseq解析、山下博史、澁谷龍弥、呂虹橋、内田美重、小林正美、景山伯春、井上和仁、内田英伸 ・ 福友祭（2025年10月）内田ゼミポスター発表13件 ・ 第3回イチョウ講演会学生ポスター展示会（2025年11月）ポスター発表13件、地域貢献賞1名、学術研究賞1名、健康奨励賞3名 ・ BEC社（株）昭和の食品表示の子会社）のミニレクチャー（2025年5月） ・ 基礎生物学研究所細胞動態研究部門研究室体験入学への学生参加（大学院進学指導）、1名（2025年7月） ・ キリンビール愛知工場の見学（2025年7月） ・ 明治なるほどファクトリー愛知の見学（2025年11月） ・ 明治福沢工場の先輩のミニレクチャー（2025年12月） 	<p>令和8年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食品学実験では、栄養素の機器分析の回を新たに2回導入、プレゼンテーションの回を昨年度の1回から2回に増やす。 ・ 食品表示では、初級検定の申込者を確保し団体受験を成立させ、昨年度初級の検定合格者に対し、中級受験を個別に促す。 ・ 新たな外部サポーターを掘り起こし、卒業生のミニレクチャーが可能か検討する。 ・ サークル活動を通し、学生とのコミュニケーションを十分図りたい。
--	---

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：助教

氏名：御家雄一

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

情報メディア学科においては、情報社会を支える基礎的な技術力とともに、他者と協働し、創造的に課題を解決できる能力の育成が求められています。これらの資質・能力の育成に資する教育活動を、情報科学の基礎とメディア表現の両面から展開しています。
教育活動においては、学生が自らの興味関心を軸に、主体的・対話的に学びを深められるよう意識しています。情報科学の基礎的な内容を扱う際には、ビクトグラムデザインなど視覚的表現を取り入れ、抽象的概念の具体化と理解の深化を図っています。これは、視覚的思考を通じた問題解決力の育成を目指すものであり、学際的な学びの在り方として位置づけています。
また、教職課程の教員として、将来教育現場に立つ学生が、情報という学問を通じて「伝える力」「読み取る力」を涵養し、社会の課題に対して責任ある態度で向き合えるよう、指導にあたっています。情報を扱うということは、単なる技術の習得にとどまらず、情報倫理、歴史的背景、そして人間観にも深く関わるものであると考えています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：情報リテラシー	情報リテラシーの授業においては、数理・AI・データ・サイエンスリテラシーを包括的に扱い、高等学校との接続を重視した教育を展開している。そのため、各教科の高等学校教科書を精査し、近隣校の授業見学や教員へのヒアリングを通じて、高校現場の教育実態を継続的に調査している。特に東京都の先進的な指導実践を重視し、定期的な訪問を通して情報を収集している。授業では、思考力を育成するため、仮説・検証・結果と仮説の比較を繰り返す課題設計を行い、高校から大学へのシームレスな接続を図っている。また、基盤変換に関する教材を開発し、全国高等学校情報教育研究会にて高校生向け教材として発表、同時に大学でも活用可能な内容として展開しており、大学・高校双方に通用する教材開発・実践に取り組んでいる。
2.教育活動や教育業績 科目名②：サウンドプログラミング	サウンドプログラミングは、サウンド制作コースと情報システムコースの学際的要素を持つ3年次開講科目であり、双方に苦手意識を抱く学生が多い傾向にある。そこで、授業序盤では基礎的な音響知識とプログラミング技術の両面を丁寧に扱い、エンターテインメント性を取り入れた課題によって学習への興味を引き出し、理解の定着と苦手意識の払拭を図っている。学生が主体的かつ対話的に学べるよう、サンプルデータを用いた体験型学習を重視し、腑に落ちる理解を促進している。加えて、外部の作品ポートフォリオを参考にしながら、仕組みの考察・再現・創作へと発展するワークショップ型授業を実施し、表現力の拡張と探究的な学びの実現を図っている。こうした取り組みにより、知識の定着のみならず、視野の広がりや深い読み取り力を養成している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：情報科教育法	情報科の歴史や高校現場の現状に関する理解を深めるとともに、模擬授業を通して学生自身の授業実践力と教員としての視点の涵養を図っている。これまで生徒を一方的に「教える対象」と見ていた学生も、本授業を通じて、生徒との距離感や関わり方の重要性に気づく場面が多く見られた。授業では、高校現場における生徒の反応を想定した指導案作成と、それに基づく模擬授業を実施し、教員が同テーマで即興的に授業の一部を再現することで、「なぜこのような行動や発言をしたのか」といった意図や配慮を明示的に解説し、実践的な授業設計力と柔軟な対応力を養成している。このような指導により、学生は現場の多様な状況に応じた教育実践力を身につけている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：情報リテラシー	多くの学生が「内容が分かりやすかった」と評価し、特に抽象的な概念に対しても身近な例を用いることで理解が深まったとの声が多く見られた。一方で、高校内容と重ならない高度な内容を扱った際には、授業の要点が不明瞭であったと感じる学生も一定数存在し、例えば話の複雑さによって途中で集中が途切れてしまう場面があったと自己分析している。また、学内システムの活用を通じた学習習慣の定着を図ったが、その運用に対して混乱や厳しさを訴える声もあった。課題の評価基準や出席管理に関しても明確に示したつもりではあったが、一部学生からは否定的な意見も見受けられた(出席を15分間認めよといった理不尽なものもあったりする)。これらを踏まえ、今後は例えば話と理論的説明のバランスを再検討し、特に序盤での離脱を防ぐための授業構成の工夫を行いたいと考えている。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：サウンドプログラミング	「興味のなかった分野だったが楽しく学べた」「わかりやすかった」といった肯定的な意見が多く寄せられた。難易度の高い内容も含んでいたが、進捗に応じて取り組めるよう複数レベルの課題を用意したことで、多くの学生が前向きに取り組めたと考えている。一方で、学生自身の目標設定がやや低く、達成感のある体験の裏に、十分な挑戦がなされなかったケースも見受けられた。今後は、より高い到達目標を意識させる課題提示やフィードバックの工夫が必要だと感じている。また、授業資料の事後共有や復習支援の仕組みは好意的に受け止められており、学習支援として有効であった。学生の主体的な学びをさらに引き出すために、楽しさと達成感の先にある深い学びへと導く授業設計を検討していきたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：情報科教育法	履修者が少数であったため、個別指導に近い形で授業を進めることができた。学習内容の一部は実際に学生が体験しながら学び、また模擬授業を実施した際には、現場経験のある教員が同一テーマを即興で実演することで、授業の意図や改善点について具体的な検討を行った。これにより、学生は自身の指導方法を客観的に見直す視点を得ることができたと考えている。また、他教科との接続を重視し、複数教科書を参照しながら、教科横断的な視点での授業設計を意識した点も、本学における情報科教育法の特徴の一つであると考えている。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・情報処理学会 情報教育シンポジウムSSS2025にて論理回路学習に使用できるWebアプリケーションの実装と活用について報告し最優秀発表賞受賞した。平成30年度より開発しているWebアプリケーションの知見は本発表でも活かされ、これはインタラクティブな授業資料の作成に役立ち、学生の理解度向上や満足度向上の一助となる。 ・全国高等学校情報教育研究会全国大会に参加し、現場の教員の悩みや取り組みの共有し、教科教育法の指導内容に活かした。また授業実践方法の発表をした。 ・愛知県高等学校視覚教育研究協議会尾張地区研究会 視覚教育に関する講演や視覚教育教材等の作成に関する講義にてAIを活用した情報科の授業の手法やプロンプトの工夫例、AIの仕組みについて教授し、生徒や学生のAI活用について検討した。 ・東京都立高校へオンラインで3Dプリンタの使用法について伝え、特にオンライン環境での技術指導方法について検討し試した。あわせて本学のデジタルファブリケーション教育について高校の環境と照らし合わせレベル感など検討した。 ・岡崎市立小学校の現職教員に情報科と情報化に着目し、現在の教育の手法について共有し、小学校での指導方法について検討した。このことにより生涯教育について再度考え、教職課程の授業改善に至る。 ・私立高校の教員向けに探究学習に関するガイダンスと指導法の伝授、また現実的な指導方法について検討した。学校間のギャップや現場と理想の差について把握し、新入生への授業手法の検討材料となった。 ・東京都立高等学校情報教育研究会研究大会に参加し、文部科学省と東京都教育委員会の策定する最新の動向を把握し、個人情報保護等の観点からのAI使用に関するガイドラインについて把握した。その上で数理・AI・データサイエンスリテラシーレベルに対応する情報リテラシーの内容の検討をした。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度は、高等学校の学習指導要領が改訂され年次進行で施行された最初の入学生であるため、教育上の配慮事項が多く発生した。特に情報Ⅰの必修修化に伴い、前提知識が異なる学生が多く発生することとなった。また、AI活用の急速な発展によりツールの活用指導の方法が年度内での変化が大きく発生し続けた。これらの急速な世界情勢の変化に対応できるような授業を迅速に取り入れ、事前に作成しているシラバスから逸脱しないよう配慮しながら、AI活用等における指導を必修科目に取り入れた。また、学生の研究活動にも反映させ、成果を学会発表に活かした。</p> <p>令和8年度には、高等学校の指導にて対話的な学びを多く取り入れた指導を受けた学生が増える。近年の傾向で時間管理がおろそかになる学生が散見される。また、最近の企業の働き方改革に、労働者の作業をアバターに反映させるエージェントを表示することを取り入れてモチベーション向上を図る取り組みが話題となった。こういった取り組みを学生のモチベーションや自己管理の向上に結びつけるような教材・教具の開発と活用をして、学生の成果に繋げられるようにしたいと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼いの健康管理アプリの開発-Vibe CodingによるWebアプリ開発-:山田優凜, 御家雄一, 長谷川聡, スマートライフ学会2026年大会 ・ARとWebアプリによる3DCG食品サンプルの開発-食育活動に利用する食品サンプルのCG化-:雲龍由璃, 御家雄一, 後藤千穂, 長谷川聡, スマートライフ学会2026年大会 ・ARや小型ロボットを用いた弥生遺跡ミュージアムのDX:長谷川聡, 御家雄一, 内山士元, 松本拓十, 田中桜佑, 山田優凜, 石井瑛土, 後藤柚衣, 原田幹, 伊奈和彦, スマートライフ学会2026年大会 ・3Dプリンタを用いた高校情報教育における立体教材設計と高校の探究活動支援の実践:御家雄一, 長谷川聡, スマートライフ学会2026年大会 ・小林裕司, 御家雄一: 論理回路の設計を体験できるブラウザ学習教材の開発と実践, 情報処理学会 情報教育シンポジウムSSS2025, pp.1-8 (2025.08)(最優秀発表賞受賞) ・情報Ⅰにおける授業「デジタル化」の圧縮プラン~人型ピクトグラム教材を用いて~:御家雄一, 第18回全国高等学校情報教育研究会全国大会
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： 情報メディア学科

職位： 教授

氏名： 大矢信吾

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルアプリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

本学情報メディア学部では、情報システムや多様なメディアに関する知識・技術の修得を基盤とし、それらを実社会で活用できる実践力の育成を行っている。とりわけ、企業から求められる情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を相互に関連づけながらバランスよく伸ばす教育に力を置いている。また、各コースでの専門的学修を通じて、技術的理解と表現力・企画力を統合し、多様な分野や状況に柔軟に対応できる力を養う。

さらに、学生が主体的に学び、他者と協働しながら課題に取り組み過程を重視し、実習を伴う実践的な経験を通して思考力と応用力を高めていく。こうした学びの積み重ねにより、基礎学力と社会人としての基礎力を土台に、人間力を高め、変化する社会の中で自ら課題を発見し、解決へと導くことのできる人材の育成を目指している。さらに、専門性を社会的文脈の中で活かし、新たな価値を創出できる力を備えた人材を育てることを目的とする。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：写真技術	写真技術の科目では、カメラ操作や撮影手法の習得にとどまらず、光やレンズ、露出といった基礎原理の理解を重視している。近年、SNS等で共有される表層的な撮影テクニックに依拠するのではなく、なぜその表現が成立するのかという原理から丁寧に解説し、学生が状況に応じて応用できる力を養うことを目的としている。構図や色彩、視点の取り方についても、単なる模倣ではなく、自ら考え選択できるような段階的に指導している。 また、本科目では日常的な撮影行為を学びの中に位置づけ、スマートフォン等の身近な機器も活用しながら実践的な理解を深めている。学生は撮影と講評を繰り返す中で、自身の表現を言語化し、他者の視点を取り入れる経験を重ねるようにしている。こうしたプロセスを通じて、観察力や表現力、さらにはコミュニケーション能力の向上を図るとともに、写真を単なる情景の切り取りではなく、意図をもつ表現手段として活用する動機を育成することを目的としている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：CAD	この科目では、iPadを積極的に用いているが、設計支援ツールアプリの操作技能の習得にとどまらず、図面を通じて空間を理解し、形状を論理的に捉える力の育成を重視している。本科目は実習形式を取り入れているが、単なる操作訓練ではなく、作図の原理や幾何学的な考え方を座学的に整理しながら進める点に特徴がある。学生は課題を通して、平面情報から立体を構成する過程や、寸法・投影の意味を段階的に理解していく。 また、空間把握や幾何学的認知に苦手意識を持つ学生に対しては、視覚的な補助資料や段階的な課題設定に組み込み、理解のプロセスを暗黙のうちに支援している。個々の理解度に応じた指導を行い、試行錯誤を通じて認識のずれを修正する機会を確保することで、基礎的な認知能力の向上を図っている。こうした取り組みを通じて、CADを単なるツールとしてではなく、課題解決のための思考手段として活用できる力を養うことを目指している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：演習（ゼミ）	写真表現の探求を軸としつつ、学生が自らテーマを設定し、継続的に思考と制作を往還させることを重視している。撮影技術の修得にとどまらず、なぜその表現を選択するのかという意図や背景を問い直し、作品としての意味を深めていく過程を重んじている。各自の関心に基づく制作と考察を通じて、写真を自己表現の手段として位置づけ、個々の視点を明確にしていく。 また、本ゼミではプレゼンテーションを重視し、発表と講評を繰り返す中で、自身の考えを言語化し、他者の意見を受け止めながら再構成する力を養う。こうした対話的なプロセスを通じて、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、多様な視点に触れることで表現の幅を広げていく。 さらに、研究的視点を取り入れ、先行事例の調査や理論的整理を行うことで、制作をより深い文脈の中に位置づけることを目指している。こうした学びを通じて、学生が自己の関心と向き合いながら表現を深化させ、最終的には自己実現へとつなげていくことを本ゼミの目的としている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：自然科学1	本講義は自然科学のなかで、とりわけ物理学を通じて、私たちの生活と科学技術との関わりを理解し、物事を科学的・論理的に捉える力を養うことにある。自然科学から得られる知識や技術が、社会や日常生活をどのように支えているかを踏まえ、多面的に考える姿勢の育成を目指している。 これを実現するために、本講義では古典物理学から最新の科学に至る内容を概観しつつ、エネルギー問題や環境問題など現代的な課題との関連を意識した授業展開を行っている。また、コンピュータシミュレーションやVR・ARといった情報技術との関係にも触れ、科学と技術の接続にも言及する。このとき、身近な現象や具体例を取り入れることで興味・関心を喚起し、基礎的な内容から段階的に理解を深める構成とすることで、科学的思考力の定着を図る。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：写真技術</p>	<p>当該科目をSNSの延長線上と考えていると見られる受講姿勢が目立っていたため、この点の理解との違いを可視化する工夫をしたい。本科目の意味を十分に理解してもらうことが先決のように考えられた。同一の被写体を異なる考え方で撮影し比較することで、理論に基づく判断の重要性を具体的に理解させることができると考えている。</p> <p>今年度の反省に基づき、次年度に向けた授業改善・取り組みとして、まず課題理解を先行させる仕組みの強化が挙げられる。撮影に入る前に、「露出や被写体などの何をコントロールするのか」「どの条件が変動するのか」といった点を簡潔に言語化させることで、題意を十分に把握せず撮影に進む状況を抑制したい。</p> <p>次に、撮影における「正解志向」対策をする必要があった。正解志向は、撮影の場合全く役立たない。条件が完全に整わない状況を前提とした課題を設定し、結果の出来不出来だけでなく、設定や調整の過程を評価対象に含めることで、環境に応じて判断する力の育成につなげていきたいと考えている。</p> <p>また、撮影後の振り返りについても、課題を再検討し改善を図りたい。漠然とした撮影ではなく、「設定したパラメータ」「得られた結果」「想定との差異」を整理させることで、経験を知識として定着させることを意図する。これにより、実践が一過性のものにとどまることを防ぎ、応用力の育成につなげるような教授内容の検討を行いたい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：CAD</p>	<p>CADに関する授業改善としては、まず作図に困難を感じる学生に対し、空間や図形の把握をどのように支援するかが重要な課題である。単に操作手順を習得させるのではなく、立体や構造を頭の中で組み立てる力を養うための指導方法を検討する必要がある。また、一般の学生に対しても、図面を読み取り、自らの力で完成形を描き上げる能力の育成が求められる。そのためには、図面と完成形の対応関係を段階的に理解させる教材や課題の工夫が必要である。さらに、CGとCADの違いについても明確に理解させる必要がある。見た目の表現を重視するCGと、設計情報を扱うCADの目的や役割の違いを意識させることで、学習内容の位置づけをより明確にしたい。次年度はこれらの点を踏まえ、講義内容および教材の再検討を行う予定である。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：自然科学I</p>	<p>自然科学I（基礎物理学）に関する授業改善としては、抽象的な概念の理解と創造、数学的な素養、および学習への興味・関心の三点が基盤となるが、現状では特に数学的な素養と興味・関心の不足が学習の障害となっている。なお、本授業で扱う数学的内容は中学2年生程度にとどめているが、それでも数式や数値的な考え方に対する抵抗感が理解の妨げとなっている。一方で、興味・関心の不足は、内容理解に取り組む前段階での意欲に影響を及ぼしており、結果として学習の定着にも影響していると考えられる。これらを踏まえ、次年度は特に興味・関心の喚起を重視し、身近な現象や具体例を取り入れた授業展開や資料の工夫を行うことで、学習への導入を改善したい。また、理解を支える補助的な説明や段階的な課題設定を通じて、基礎的な数学的素養の定着も図る。以上の方策により、概念理解と学習意欲の双方をより改善したい。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>写真技術、CAD、自然科学Iの各科目に共通する課題として、受講者の関与の低さと基礎理解の不足が挙げられる。これに対し、FDで得られた知見を踏まえ、まず授業初期段階において各科目の学習意義と到達目標を提示し、学習への動機づけを行なった。また、課題提出の前段階で意図や条件を言語化させる過程を導入し、思考を伴った実践へと誘導した。さらに、結果のみならず過程を評価する方針を示し、個人ごとの主体的な試行を促すようにした。同時に、具体例や比較を通じて理論と実践の対応関係を可視化し、理解の深化を狙った。これらを通じて、各科目における学習意欲と基礎力の双方の改善を試みた。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>本学部の教育理念およびこれまでの授業実践を踏まえ、専門知識・技術の修得と、それらを活用するための思考力・表現力・コミュニケーション能力の統合的な向上を図る試みを行なった。次年度ではさらに、情報活用や課題発見能力を、個別の技能としてではなく、相互に関連づけながら育成することを重視したい。</p> <p>授業においては、CADや写真技術の科目で展開してきたように、操作や手法の習得に偏ることなく、その背景にある原理や構造を丁寧に扱い、学生が自ら考え応用できる力を養おうとした。また、実習と座学を往還させる構成を維持しつつ、学生の理解度や反応を踏まえ、教授内容や課題設定、評価方法の見直しを継続的に行なった。次年度も空間把握や表現理解に困難を感じる学生への対応については、視覚的支援や段階的な課題の再設計を進め、より個々の特性に応じた学びの環境を整えることに努めたい。</p> <p>さらに、ゼミ活動においては、プレゼンテーションや講評の機会を一層充実させ、学生が自身の考えや表現を言語化し、他者との対話の中で再構成する力を高めるよう計らった。次年度では、写真表現の探求と研究的視点の導入を通じて、制作と考察を往還する学びを深化させ、主体的なテーマ設定と継続的な探究を支援していく。</p> <p>これらの取り組みを通じて、学生が主体的に学び、他者と協働しながら課題に向き合う姿勢を育むとともに、専門性を社会的文脈の中で活かし、新たな価値を創出し得る力を身につけることを目標とする。さらに、学びの過程そのものを見直し続ける姿勢を教育に組み込み、教育内容の質的向上と学生の成長の両立を図っていく。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：准教授

氏名：岡田 有司

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

管理栄養士養成課程専門科目である「臨床栄養学」担当教員として、主として医療機関で活躍できる管理栄養士になれる学生教育を行うことを自分の教育理念・目標としています。
管理栄養士の対象者は「ヒト」であるが「臨床栄養（学）」の対象者は傷病者・患者・利用者などの虚弱な「ヒト」であるため、学生には第一に正常な「ヒト」を理解した上で「臨床栄養（学）」の対象者である傷病者・患者・利用者などの虚弱な「ヒト」を理解することを学生に求めています。具体的には「解剖生理学」「生化学」「基礎栄養学」「ライフステージ栄養学（応用栄養学）」などの基礎医学系科目の知識を身につけていることを求めています。
また学生には対患者の対応ができるように知識・技術の教育を行っています。
管理栄養士（もしくは管理栄養士養成課程の学生）は他の医療従事者（その職種を養成校の学生）との「臨床的」な認識の違いがあることを自身は実務経験・他大学での非常勤講師の経験から自覚しており、他の医療職の考え方を学生に伝えることが卒前教育が必要であると考えています。
管理栄養士国家試験での出題問題数が多く、最低限国家試験に必要な知識は覚えるように教育を行っています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：病態栄養学Ⅰ	「臨床栄養学」分野の基礎となる傷病者・患者・利用者などの虚弱な「ヒト」の栄養評価を主として教育する科目であるため、正常な「ヒト」の解剖学や生理学、生化学、栄養学の復習を行いながら授業を展開しました。また医療従事者として最低限知っておくべき事項を受講生に質問を行いながら、授業に緊張感を持たせながら授業展開を行いました。 また臨床栄養管理実習Ⅰとの連携を意識して授業展開を行いました。
2.教育活動や教育業績 科目名②：病態栄養学Ⅱ	各疾患概要を教授した後、「病態栄養学Ⅰ」の知識を基に栄養評価（栄養アセスメント）、栄養治療の基礎が学習できるように授業展開を行いました。同時に「病態栄養学Ⅰ」で学習した内容の復習、関連科目の復習を行いました。 「病態栄養学Ⅰ」同様、受講生に質問を行いながら授業展開を行い、授業に緊張感を持たせるように工夫を行いました。
3.教育活動や教育業績 科目名③：臨床栄養管理実習Ⅰ	病態栄養学Ⅰとの連携を自身も意識し、受講生にも意識させるように授業展開を行いました。 傷病者・患者・利用者などの虚弱な「ヒト」の栄養評価を教授するため、医療従事者として栄養学だけではなく医療従事者として傷病者・患者・利用者进行评估することを意識する授業展開を行いました。 受講生に「臨地実習Ⅰ（病院）」を意識してもらうためこの実習ではスマホ・タブレットの使用を全面的に禁止する工夫を行いました。
4.教育活動や教育業績 科目名④：臨床栄養管理実習Ⅱ	「病態栄養学Ⅰ」「臨床栄養管理実習Ⅰ」で身につけた知識・技術を基に各疾患の一連の栄養管理・栄養治療の流れを症例検討をベースに受講生が学習できるように工夫しました。 受講生に「臨地実習Ⅱ（病院）」を意識してもらうためこの実習ではスマホ・タブレットの使用を全面的に禁止する工夫を行いました。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：病態栄養学Ⅰ</p>	<p>授業評価アンケートでは概ね良好な評価を得ていると考えています。授業の性質上、新たな知識を覚える内容が多く、「理解する」ではなく「覚える」内容であること、前回のアンケートの結果などより、進行速度を意識しました。 自由記載に関しては、他の科目との関連を意識し、授業を行ったことからの記載であったように考える。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：病態栄養学Ⅱ</p>	<p>授業評価アンケートでは概ね良好な評価を得ていると考えています。授業の性質上、新たな知識を覚える内容が多く、「理解する」ではなく「覚える」内容であったため一部の受講生には毎回の授業内容が多い、進行速度が速いように感じられたと考えられます。 自由記載に関して、今回に受講生のほぼ全員が前年度の病態栄養学Ⅰの受講生であり、授業スタイルになれたための記載であると考えられました。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：臨床栄養管理実習Ⅰ</p>	<p>授業評価アンケートでは概ね良好な評価を得ていると考えています。この授業内容は、新たな知識を覚え、それを使う内容が多く、「理解する」「覚える」に加えて「使う」内容がほとんどの科目である。またこれまでの自身の教育経験上、受講生が1度では「理解・覚え・使う」ことが困難な内容であることを知っているため、複数回同じ課題を受講生に提供しています。 自由記載に関しても、昨年度同様、課題が多い等の評価があるが、上記同様繰り返し学習してもらう必要があるため授業を組んだ結果と考える。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：臨床栄養管理実習Ⅱ</p>	<p>授業評価アンケートでは概ね良好な評価を得ていると考えています。この授業内容は、臨床栄養管理実習Ⅰを踏まえ、新たな疾患の栄養管理を検討（新たな知識を使う）する実習です。この実習の受講生の多くが臨床栄養管理実習Ⅰの受講生であり、ある程度実習スタイルになれた状態で受講したのと考えられます。自由記載に関しても、課題が多い等の評価があるが、上記同様繰り返し学習してもらう必要がある内容であるため授業を組んだ結果と考えられます。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>「授業がおこなわれているその時」実臨床で行われている業務、必要とされている知識・技術を自身が学会などで情報収集し、授業に活かせたと考えております。特に診療報酬改定や診療ガイドライン改訂に対応した授業展開に心がけています。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和8年度も診療報酬改定が行われますが、これに対応した授業を行うための資料作成を行います。 令和8年度は令和7年度の授業評価アンケート結果や自身の反省点を授業に取り入れていきたいと考えております。 また関連科目との「つながり」を意識した授業を行う計画を立てています。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：小田裕昭

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

生命は、エネルギーを得てそれを消費する代謝によって成り立ち、その代謝がエントロピーを減少させることにより、自己組織化して自立した生命体を形成している。これは、物理化学的に見た生命観であるが、これらの科学的な事実は、生命の一つである私たちが謙虚にしてくれる。生命は自由であり、生きていくために他者への責任を持つことにつながるものである。これらの基礎知識を理解することにより、人を謙虚に品性豊かにしていく。これが基礎科学の最も大きな役割だと思ふ。生命の進化において、すでに起こった過去の上に次のイベントを積み重ねていく作業が繰り返されている。この流れの中に現在の私たちがいるという事実は、過去の事実から多くのことを学び将来へつなげていくことを必要としている。これは歴史の上に立脚した謙虚な見方である。そういう中で、専門家として、まずは自身の健康・幸せに、そして身近な周りの人の健康・幸せを作り出し、世界の多くの人の健康・幸せに貢献することが必要であると考えている。

特に栄養を主たる目的とした本学科では、栄養の本質を基礎科学から理解することで、健康、加齢、病気を理解して、それを他者の喜びにつなげていくことができる人を育てることが大きな目標となる。そのためには、生命を支える化学反応を理解せずに、健康や幸せを理解することは難しいということを知り、それを理解してあげたいと考えている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：生化学I、II	講義ではあるが、学生に質問をどんどんして考えさせる学習方法、ソクラテス・メソッドを行っている。 基礎科目であるためなかなか興味がない学生も多い。特に文系と言われる科学系（特に化学）の授業をあまり受けてこなかった学生にもわかるように、日常で起こる科学的現象（主に化学）と栄養を結びつけて解説している。 板書を通して、五感すべてを使用して学ぶことを意識して、バワボを使わず、その資料も渡さず、板書するようにしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：生化学実験	生化学がミクロで起こる反応を学習するものであり、化学が分子の動きを勉強するものである。そしてマクロな現象として生命活動を支えている。そのため、講義だけでは理解するのが難しい場合も多々ある。講義でも日常生活で起こる現象を紹介しているが、なかなか理解しづらい。生化学実験では、生化学の講義で学んだ現象を実際に体験することで、自身の体も生化学的反応の総体であることを理解して、生化学の理解を深めている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：食生活と栄養	大学院の講義であるため、栄養の基礎の講義から健康情報学に対応しい「データ駆動型個別化栄養－プレジジョン栄養学－」の考え方を概説している。本講義でも基本的にソクラテス・メソッドで質疑応答を基本にして行っている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：生化学I、II	質疑応答をする講義に対して慣れてないため、学生に最初は戸惑いがあったが、最終的には慣れてきたようだ。ただ、答えをスマホに聞くだけの質疑応答になることも多々あり、必ずしも評判は良くない。スマホに聞いて答えが出るのでは、本来の目的に合わないため、考える質問にするが、そうすると訳がわからないという評価になっている。訳がわからないと思う少し前ぐらいの質問を考えるように務める。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：生化学実験	私がこの実験実習を引き継いだ時点で、毎回レポートを出していたのでそれを引き継いだ。このレポート提出に対する負担が大きいというアンケートが多かった。しかし、レポートこそが最も学習効果を高めるものだと考えている。特に、現実の社会では集団でやるのが大きいので、チームで討論をしてほしいと考えて、すぐにレポートを出せるようにしたが、これも期限が短いと言って不満が出た。あまり開けるとすでにある答えを参照することになり、自身で考えることにならないため、レポート締め切りを1週間ぐらいにするを考えている。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食生活と栄養	評価は非常に良かった、大学院ではソクラテス・メソッドは非常に良いと学生も感じたようだ。答えのない問いに答えることこそが、現代の社会で求められていることを知ることは意義が大きいと考えられる。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	初年度であるため、その都度改良を続けてきた。考えることを中心に据えることが、学生に負荷がかかるということはわかったが、その分理解力が上がっていると考えている。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>大学院の講義では、健康情報学研究科の名前にそのまま合うような研究をしている関係で、どのバックグラウンドを持つ学生も興味深く聞いてくれた。この教材と方法論をさらに活かしていきたい。板書するスタイルの講義であるため、私自身の字があまりきれいでないことで、読みにくいという指摘を受けていたので、それを改善していく。</p> <p>実験実習のレポートも学生に負荷がかかるが、それこそが学習のポイントであるため、締切の設定などをさらに適切な時間を検討する。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：落合洋文

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

基礎教育センターとしては（1）学生と教員がともに楽しく学べること、（2）大学らしく、高校までには経験したことのない創造的な学びの場を提供すること、（3）教員も学生もひとりの人間としてお互いを尊重すること、の3つを教育理念としています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：数的処理Ⅰ・Ⅱ	公式を覚えて使う式の数学教育ではなく、自然現象や社会現象の理解を深めるため、数値を使って想像する力を養うことを目標としています。数理モデルの作成や利用はその具体例です。またこの科目では1人で考えるのではなく、グループで話し合い協力して1つの課題に取り組むグループ学習を基本としています。グループでの討議を助けるため、2～3人の教員で授業を運営します。本学の取り組みは科研費研究「高水準数学リテラシー概念下での大学数学教育の実践」などにおいて文系数学の好ましい実践例として評価されています。
2.教育活動や教育業績 科目名②：日本語Ⅰ・Ⅱ	日本語という言語の特性を踏まえて、論理的に考えること、言外を読むこと、明快に説明すること等々に係る力を身につけることを目標としています。学科の学修内容にも考慮し、例えば情報メディア学科では特化型AIの企画書作成を課題とし、グループで話し合い協力して企画書を完成させる過程で上記の目標に近づくように指導しています。グループでの討議を助けるため、2～3人の教員で授業を運営します。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：数的処理Ⅰ・Ⅱ</p>	<p>身近な問題を理解したり解決したりするのに数学（特に数理モデル）が役立つことがわかり、数学を身近なものに感じたという意見が多かった。授業評価アンケートの満足度は3.5以上、理解度は3～3.5である。チームティーチングにより学生が質問しやすい環境を作っているようである。また授業をビデオ撮影して動画をYouTubeにあげており、これが復習に役立っているようである。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：日本語力Ⅰ・Ⅱ</p>	<p>授業評価アンケートの満足度は3.5以上、理解度は3～3.5である。チームティーチングにより学生が質問しやすい環境を作っているようである。また授業をビデオ撮影して動画をYouTubeにあげており、これが復習に役立っているようである。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>数的処理Ⅰ・Ⅱでは数理データサイエンスに係る内容を強化するため、数理モデルを用いる自然現象、社会現象のモデル化の比重を高めた。全国の大学で始まっているAI・数理データサイエンス教育プログラムにおいて数理に係る部分の実践例や教材が少ないという指摘が数学関係者からあがっているが、本学は豊富な教材をもっており、他大学にも供給しているほどである。また令和5年8月にはこのような問題に取り組む大学、高専の教員を対象として、数理モデル教材の作成ワークショップを開催し、講師を務めた。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年8月には数理データサイエンス教育に取り組む大学、高専の数学教員を対象として、数理モデル教材の作成ワークショップを開催し、講師を務めた。令和8年は数理モデルの問題集を化学同人から出版予定であり、豊富な教材を駆使して、また大学院の選択科目「モデル化とシミュレーション」との連携を視野に入れ、AI・数理データサイエンス教育における数理モデルの活用をいっそう強化する。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：助教

氏名：加藤 清子

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなどを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

これまで約20年間、周産・女性診療科を受診している中高年女性に対し医師と協働し、栄養アセスメントに携わった経験がある。幾度も失敗や成功を繰り返しながら、長い経験を経て得られた臨床感覚であり、やりがいを感じていた。直接的に経験しなければわからないことも多いだろうが、私自身の臨床経験から栄養指導の実際を学んでいただく機会を提供したいと考えている。

20年近く前の自分自身を思い起こすと、個別の栄養アセスメントにおいて正確な食事内容の聴取、改善箇所の把握に一生懸命で、専門的知識を生かして患者さんの栄養状態を改善することを第一に考えていた。しかし、そのような方法では上手くいかない方も多くことに気づき、自分の至らない点を探し、焦っていた時期があった。先輩の栄養アセスメントにオブザーバーとして参加させてもらって気づきがあった。先輩は、心の扉を開けてもらえるように相手の話したいことに耳を傾け、そのうえで食事の話や運動の話をするという対話を大切にしていた。臨床栄養では、何かしら抱えている疾患がある患者さんと向き合うため、教科書的な話だけでは伝わらないと痛感した。そして栄養アセスメントをおこなう上で信頼関係が欠かせない。相手の心にお邪魔する気持ちで、お話を聴かせていただくということを心がけるようになり、現在の臨床実践につながっている。私が経験した、このような数々の失敗や成功体験を共有し、一人一人が個別の特徴と人格を持つ人間を対象にしているからこそ、機械的にはできない部分を学生に伝えたい。

本学が示す「管理栄養士に合格する」だけでなく「実践力のある管理栄養士」を目指すとのメッセージは、まさに自分がこれまでの学んできたことを伝えることによって果たせる役割があるのではないかと考えている。次世代の管理栄養士となる学生の学びの助けとなるよう教育に従事し、それぞれの学生さんがご自分の人生を歩み、将来的に仕事のやりがいをも実感できることを願っている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：栄養教育論Ⅲ	企業の健康診断において基準値を超えた、“メタボリックシンドローム”の対象者に対する個別の栄養相談に長い年月にわたり携わってきた。いわゆる「特定保健指導」である。様々な職業の方に対して面談を行ない、食事習慣・生活習慣改善のため如何にお伝えしたら実行に移していただけるか、試行錯誤しながら行ってきた。また、特定保健指導は病気にに関する知識がなければ説得力を持って対象者に説明することができないため、各疾患の病態生理や食事療法に関する知識とともに栄養指導の実践的な能力を身につけてきた。
2.教育活動や教育業績 科目名②：臨床栄養管理論Ⅰ・Ⅱ	これまで「系統的健康・栄養教育プログラム」の研究データ収集（体組成や安静時代謝、血管年齢測定、体力測定、食事調査、心の健康状態調査）と分析に取り組んできた。「系統的健康・栄養教育プログラム」は、管理栄養士と医師が中心に、食生活、運動習慣の見直しを行い、更年期女性特有の健康問題を改善することを目的としている。約7000名の20年間の追跡したデータ収集をほぼ一人で担当し、医師の研究にも積極的に協力してきた。私自身も、栄養指導を改善していくため、「体組成の変動と食事摂取の変化との関連」、「高たんぱく質食と各種栄養素摂取状況、体組成との関連」等について検討し学会発表を行ってきた。近年では、不定愁訴の影響で運動ができていない更年期女性など、より特定の問題を持つ女性に特化した食に関する支援力を入れて研究活動をおこなっていた。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：栄養教育論Ⅲ</p>	<p>私の担当した授業全体の平均値は、満足度3.79、理解度3.55となり、大学全体の評価結果(講義)と比較して、高い結果であった。また、「教員の話し方は、はっきりとして聞き取りやすかった=3.87」「教科書やプリントは授業の理解に役立った=3.83」「板書やモニター提示の仕方や内容が適切だった=3.80」「授業の進み方は適切であった=3.64」が高い評価であった。これらは授業をおこなう際に自ら留意していたことであり、これを評価された点は良かったと思う。自由記述においては、「授業のスライドもわかりやすく、確認問題や症例検討も充実していて楽しい授業だった」「先生が生徒の疑問に丁寧に答えてくださるので理解が深まって良かったです」「頭に残りやすいイラストが勉強に役立った」といった嬉しいコメントが多く寄せられた。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：臨床栄養管理論Ⅰ・Ⅱ</p>	<p>自由記述においては、「一つ一つ丁寧に分かりやすく聞き取りやすいので、授業の内容がはいつてきます」「病気の仕組みまで丁寧に教えてくださるので臨床栄養学について理解を深めることができた」といった嬉しいコメントが多く寄せられた。また、「毎回分からないところや質問したいことを紙に書いて提出し、次の授業でそれらについて説明するという授業の進め方によって、疑問点が解決しやすい」という意見が多くあったので、今後も続けていきたい。しかし一方、「国試を解く時間が短く、毎回解き終わらなかった」という意見もあったので、改善点を探っていくつもりである。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>①毎回「前回の復習」から授業をスタートし、理解の定着を図った。学生から「臨地実習の休みの分もちゃんと学ぶことができ良かった」との意見を得られた。 ②学生全員に対して毎回授業の終わりにリアクションペーパーを提出してもらい、授業に対する様々な率直な意見や質問を聞いた。学生からは、「質問を書くこと次の授業で回答してくれる仕組みがとてもありがたかった」「理解が深まって良かった」「他の人の質問がわかって、それは自分にも役立つ」と好評であった。③問題の答え合わせのとき、学生にマイクを渡して順番に回しながら答えてもらった。学生の声小さすぎてみんなが聞き取れない、という問題が解決した。学生からもマイクがある方が良いとのコメントを得た。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度では「女子大学生における月経前症候群（PMS）と食事摂取状況及びライフスタイルとの関連」をテーマに文教大学 秋吉教授との共同研究を進めてきた。国内の先行研究では、PMSの影響を受ける人に総エネルギー摂取量が増える傾向が確認され、またストレスが強いと甘味、塩味、高カロリー食品を欲しやすいとの関連が示唆されており、直接的な因果関係を示すものではないものの、本研究の結果と類似する傾向がみられた。また、本研究で身体的に辛いと感じる人は「脂ののった魚」の摂取量が少ないことがわかった。脂肪酸の種類とPMS辛さの関連については、今後さらなる検討が必要である。現在は次年度に向けて、共同研究者の文教大学秋吉教授とともに研究の進め方を検討している。 令和8年度の目標としては、自身のスキルアップを図るため、学会参加や講習の受講を積極的に行う予定である。そしてそこで得た最新の情報を授業内容に取り入れながらブラッシュアップを重ねていく。合わせて、従来からおこなってきた学生に寄り添った授業に磨きをかけていく。また、参加型の授業時間を一部設けることで学習内容の理解がさらに深まるような取り組みにも挑戦する予定である。さらに、これまで以上に国試対策にも力を入れて取り組みたいと考える。具体的には、国試に向けての勉強方法についてわかりやすく紹介し、やる気の向上と早期国試対策につなげていきたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 准教授

氏名： 河木智規

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心をもち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音楽技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブ리케이션などのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

--

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：フードサービス論Ⅰ	1. 各授業ごとに小レポート課題を出し、翌週の授業の冒頭で情報共有・意見交換をしている。 2. 各授業の冒頭で前回授業の復習を5分程度している。 3. 各授業内で約6割の学生の意見（質問の回答や個人の意見等）を求めている。 4. 半期に1度、フィールドワークによる課題を提出させ（パワーポイント）プレゼンテーションと意見交換を実施している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：ホスピタリティ論	1. 各授業ごとに小レポート課題を出し、翌週の授業の冒頭で情報共有・意見交換をしている。 2. 各授業の冒頭で前回授業の復習を5分程度している。 3. 各授業内で約6割の学生の意見（質問の回答や個人の意見等）を求めている。 4. 今学期より、一部ロールプレイングを実施してみたが、「ホスピタリティ」の理解に寄与することが確認できた。
3.教育活動や教育業績 科目名③：チェンストアシズム	1. 各授業ごとに小レポート課題を出し、翌週の授業の冒頭で情報共有・意見交換をしている。 2. 各授業の冒頭で前回授業の復習を5分程度している。 3. 各授業内で約6割の学生の意見（質問の回答や個人の意見等）を求めている。 4. 半期に1度、フィールドワークによる課題を提出させ（パワーポイント）プレゼンテーションと意見交換を実施している。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：フードサービス論Ⅰ</p>	<p>特に実社会に密接に繋がる授業だけに、刻々と変化する業界や企業の行政記数字や取り組みを綿密に調査し授業に反映することに注力し、極力データの開示を進めていく。また、業界が抱える課題や今後の方向性についても言及していく。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：ホスピタリティ論</p>	<p>前期のアンケートより希望の多かったグループワークとロールプレイングの中から、今期は一部ロールプレイングを実施し一定の効果が確認できた。「ホスピタリティ」の理解のためには、疑似体験としてのロールプレイングを次年度以降の授業の中で多くの学生に経験させていくこととする。併せて、グループワークを通じた情報の共有と相互理解の深研を進めていく。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：チェーンストアシステム研究</p>	<p>特に実社会に密接に繋がる授業だけに、刻々と変化する業界や企業の行政記数字や取り組みを綿密に調査し授業に反映することに注力し、極力データの開示を進めていく。また、業界が抱える課題や今後の方向性についても言及していく。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>「ホスピタリティ論」では、疑似体験としての「ロールプレイング」多くの学生に経験させ理解を深めることに役立てていく。 多様な考え方やいろいろなアプローチがあることを「グループワーク」によって理解させたい。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>授業中での学生の発言の機会を増加させていく。そのために、WebClassの掲出されるデータにより予習をすることを求めていく。その上で、グループワーク・ロールプレイング・プレゼンテーション等多用して多くの学生に意見を述べる機会を増やしていく。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：准教授

氏名：北川 絵里奈

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私は、管理栄養士として人々の健康の維持・増進に貢献したいという志を持った学生を育成することを教育の目標としている。管理栄養士には、食と栄養に関する専門知識だけでなく、対象者の状況を理解し、適切な方法で栄養教育を実践する力が求められる。そのため、知識の修得にとどまらず、将来の実践につながる理解と応用力を育成することを重視している。

私が担当する「栄養教育論」では、将来、管理栄養士として栄養教育を実践するために必要な基礎的専門知識を体系的に教授している。栄養教育の意義や目的、行動変容を促す理論やモデル、栄養カウンセリングの基本技法、栄養ケア・マネジメント、多様な場面における栄養教育の特徴について、事例を交えながら具体的に理解しやすい形で伝えることを心掛けている。また、「栄養教育実習」では、講義で学んだ知識を基盤として、医療・福祉・学校教育・産業保健・地域保健など、さまざまな現場における栄養教育の展開方法を実践的に学ぶ機会を設けている。学生は対象者を設定し模擬栄養教育を行うことで、食・栄養・健康に関する知識を統合的に活用し、対象者に分かりやすく伝える実践力を養う。

こうした学びを深めるためには、学生自身が将来の管理栄養士としての姿を思い描きながら主体的に学習に取り組むことが重要であると考えている。そのため授業では、「実践を意識して学ぶこと」「将来の自分を想像しながら授業に参加すること」「授業で見つけた課題や反省点を次の学びに活かすこと」を繰り返し伝えている。また、学習内容が実務においてどのように活用されるのか具体的に示すことで、学生の学習意欲を高め、主体的な学びを促す授業設計を心掛けている。今後も、理論と実践を結び付けた教育を通して、社会の多様な場面で活躍できる実践力を備えた管理栄養士の育成に貢献できるよう、教育内容および授業方法の継続的な改善に取り組んでいきたい。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：栄養教育論Ⅰ	「栄養教育論Ⅰ」では、対象者の健康維持・増進およびQOL向上を目的とした栄養教育の基礎理論を教授している。具体的には、行動変容を促す行動科学理論や栄養カウンセリングの基本技法、栄養教育のマネジメントサイクルの概念、栄養ケア・マネジメントの方法について指導している。授業では、教科書やスライド、配布資料を用いた講義に加え、カウンセリング演習などのアクティブラーニングを取り入れている。演習課題や小テストにより理解度を確認し、知識の定着を図るとともに、定期試験により到達目標の達成度を評価している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：栄養教育論Ⅱ	「栄養教育論Ⅱ」では、妊娠・授乳期、乳幼児期、学童期、成人期、高齢期など各ライフステージにおける栄養教育の方法および支援のポイントを教授している。さらに、栄養教育の事例を基に、アセスメントから栄養教育計画の立案、実施、評価、再立案に至る一連のプロセスを実践的に学べるよう指導している。授業では教科書、スライド、配布資料を用いた講義に加え、事例検討やディスカッションによるアクティブラーニングを取り入れている。ライフステージごとの課題提出により復習と知識整理を促し、定期試験により到達目標の達成度を評価している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：栄養教育実習Ⅰ	「栄養教育実習Ⅰ」では、アセスメントから栄養教育計画の立案、実施、評価、再立案に至る栄養教育マネジメントサイクルを実践的に学ぶ科目である。前半はペアワークにより管理栄養士役と対象者役を体験しながら、栄養教育資料の作成やカウンセリング演習を行う。後半はグループワークにより、各ライフステージを対象とした模擬栄養教育を実施し、指導案や教材・配布資料の作成を通して栄養教育の実践力を養う。成績評価はレポート、プレゼンテーション、授業への参加状況などを総合的に評価している。
4.教育活動や教育業績 科目名④：栄養教育実習Ⅱ	「栄養教育実習Ⅱ」では、栄養教育実習Ⅰで学んだ内容を発展させ、模擬対象者を設定した栄養教育を実践的に行う科目である。前半はグループワークにより、ライフスタイル別の個人栄養指導をロールプレイ形式で実施し、対象者の生活背景や食事状況を踏まえた課題抽出から栄養教育計画の立案、実施、評価までのプロセスを学ぶ。後半は個人ワークとして集団指導のプレゼンテーションを行い、学生同士の相互評価や栄養教育計画の再検討を通して、知識と技術を統合する力を高める。成績評価はレポート、プレゼンテーション、授業への参加状況などを総合的に評価している。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：栄養教育論Ⅰ	授業の理解度（2A：3.50、2B：3.64）および満足度（2A：3.58、2B：3.68）ともに大学平均（理解度3.49、満足度3.57）と同程度かやや上回る結果となり、概ね良好な評価が得られた。自由記述では、「プリントやスライドが分かりやすい」「小テストによって理解の確認ができた」「説明が丁寧で理解しやすかった」といった意見が見られ、授業資料の提示方法や理解確認の機会の設定が学習の助けとなっていることが示唆された。特に、授業内での復習や確認の仕組みが理解の定着に寄与していると考えられる。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：栄養教育論Ⅱ	授業の理解度（3A：3.57、3B：3.43）は大学平均（3.44）と同程度かやや上回る結果となった。満足度（3A：3.43、3B：3.43）は大学平均（3.52）をやや下回る結果となった。自由記述では「事例紹介が理解に繋がってよかった」「ディスカッションを通して意見を交換できた」など肯定的な意見が寄せられ、授業方法自体は学習効果に貢献していたと考えられる。一方で、「内容が詰め込み気味で大変だった」「課題のまとめが負担に感じられた」といった指摘もみられた。これらから、授業内容や課題設定が一部の学生にとって負担感を与え、満足度の低下につながったと考えられる。特に、課題の目的や意義が十分に共有されず、学習負担として受け止められたことが影響した可能性がある。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：栄養教育実習Ⅰ	実習の理解度（3A：3.47、3B：3.62）および満足度（3A：3.53、3B：3.54）ともに大学平均（理解度3.70、満足度3.69）をやや下回ったが、4点中3.5点以上であり概ね良好な評価が得られた。自由記述では「2回発表の機会があり、改善して成長を実感できた」「グループ活動で学びが深まった」「対象者に伝える工夫を経験できた」といった肯定的意見が多数を占め、実践的な学習体験に価値を感じていた学生が多かった。一方で、「授業内容が詰まってお時間不足だった」「グループによって能力差が大きい」との改善要望もみられた。したがって、学習活動そのものには高い評価があるものの、進行のタイトさやグループ構成の影響が理解度低下の一因になったと考えられる。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：栄養教育実習Ⅱ	実習の理解度（3A：3.48、3B：3.56）および満足度（3A：3.33、3B：3.50）ともに大学平均（理解度3.68、満足度3.68）をやや下回ったが、4点中ほぼ3.5点以上であり概ね良好な評価が得られた。自由記述では、「グループワークや個人ワークを通して実践的に学べた」「発表の機会が多く学びにつながった」「質問する経験が臨地実習での行動につながった」など、主体的・協働的な学習活動の有効性を示す肯定的な意見が多く見られた。一方で、「課題や準備の負担が大きい」「臨地実習と並行して作成物に取り組みることが大変であった」といった指摘もあり、課題量や授業外学習時間の確保の難しさが、理解度および満足度に影響している可能性が示唆された。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニング、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・学生による授業評価アンケートを前期・後期に実施した。結果については、理解度・満足度の数値および自由記述の内容を整理し、授業の改善計画書を作成した。授業内容の理解度や課題負担に関する学生の意見を踏まえ、授業進行や課題量の調整、理解確認の機会の設定など、次年度の授業改善に反映させている。 ・学会および研修会に積極的に参加し、専門分野および教育内容の最新知見の把握に努めた。具体的には、第79回日本栄養・食糧学会学術総会、第72回日本栄養改善学会学術総会、第14回日本栄養改善学会東海支部学術総会に参加し、栄養学研究および栄養教育に関する最新の研究動向を把握した。また、日本人の食事摂取基準（2025年版）研修会や2025年度全国栄養士大会（オンラインを含む）など計6件の研修会・セミナーに参加し、最新の栄養政策や栄養指導の実践事例について知見を深めた。これらの知見は、栄養教育論の講義内容や事例紹介、栄養教育実習における教材・課題の更新に反映し、教育内容の充実を図っている。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p><令和7年度の成果・教育業績></p> <p>栄養教育論Ⅰ・Ⅱおよび栄養教育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、授業資料の工夫や小テストによる理解確認、ディスカッションやロールプレイング、グループワーク等のアクティブラーニングを取り入れた授業を実施した。授業評価アンケートでは、講義科目の理解度（3.50～3.64）および満足度（3.58～3.68）は大学平均（理解度3.49、満足度3.57）と同程度またはやや上回る結果となった。自由記述では「資料が分かりやすい」「小テストで理解を確認できる」「説明が丁寧」といった意見が見られ、授業資料の提示方法や理解確認の仕組みが学習の定着に寄与していることが示唆された。</p> <p>実習科目では理解度（3.47～3.62）、満足度（3.33～3.54）と概ね良好な評価が得られ、「発表を通して成長を実感できた」「グループ活動で学びが深まった」「対象者に伝える工夫を学べた」など、実践的学習への肯定的な意見が多く見られた。一方で、課題量や授業進行のタイトさに関する指摘もあり、授業内容と課題設定のバランスが今後の改善課題として明らかとなった。</p> <p><令和8年度の目標></p> <p>授業評価の結果を踏まえ、授業内容と課題量のバランスを見直すとともに、学習目標や課題の目的をより明確に提示することで、学生の学習負担感の軽減と満足度の向上を図る。特に実習科目では、グループワークの進行方法や時間配分を改善し、学習活動に十分な時間を確保することで理解の深化を促す。また、栄養教育の理論と実践を統合的に学ぶ授業設計を継続し、臨地実習や将来の栄養教育に活かせる実践的能力の育成を目指す。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 准教授

氏名： 木村 亮介

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要とされる思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなどを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

「制作活動を通じた実践力の育成」

私の教育理念は、デザイン制作を軸としたアクティブな学びを通して、企画力・提案力・表現力を育むことにあります。デジタルとアナログのバランスを意識した実践的なスキルの習得を目指し、学生が獲得した知識や技術を活かして問題を発見・解決する力、適切なコミュニケーション能力、成果を形にする力を育成します。また、学生一人ひとりの潜在能力を最大限に引き出すことを目的に、異なる専門性や才能を持つ学生同士が協力し、共同プロジェクトに取り組む機会を提供します。学外での展示や発表を通じて多様な視点やアプローチを共有することは、協力・コミュニケーション能力の向上だけでなく、倫理観や責任感の醸成、地域や社会への関心を深めることにもつながると考えています。「制作活動を通じた実践力の育成」は、学生が知識とスキルを具現化し、将来のプロフェッショナルとして活躍するための総合的な能力を培うプロセスです。この過程を通じて、実践的なスキルや知識を効果的に身につけ、積極的に磨くことを目指します。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：卒業演習	「食」をモチーフに多角的な視点から課題を発見し、学生各自がデザインとしてアプローチするテーマを設定し、展示作品を制作します。リサーチを基にコンセプトを固め、表現媒体を選定し制作プロセスを指導します。また、学生それぞれが自身の作品について「テーマ」「背景」「着眼点」「制作」「検証」「結論」を説明するプレゼンテーションを実施します。制作した作品は、本演習の受講生と他の演習受講生が共同で美術館にて展示します（「ぶんり展」）。「ぶんり展」では、計画から搬入・展示・運営・搬出までのプロセスを学生が主体となって行います。
2.教育活動や教育業績 科目名②：専門演習	学外企業との協働プロジェクトとして、「NBMS商品開発プロジェクト」に取り組んでいます。企業から課題や取り組みについてヒアリングを行い、パッケージデザイン提案やSNS広報施策の立案など、デザインソリューションに向けた具体的なアプローチを指導します。提案では、アイデアスケッチをもとにAdobe IllustratorやPhotoshopを使ったラベルデザインの作成、レーザーカッターを活用したモック制作や照明を工夫した撮影のほか、動画撮影や編集などを行い、最終的にプレゼンテーションとしてまとめます。このプロセスを通じて、学生は総合的な制作スキルを磨き、企業へのデザイン提案を通じて実践力を養います。
3.教育活動や教育業績 科目名③：食とデザインⅡ	現在の「食」に関する概念を広げ、デザインとしてアウトプットを提案できる実践力を身につけることを目的に、オリジナルのパッケージデザインやコンセプト動画の制作を評価課題として進めます。また、受講生同士が互いの作品を講評し合う時間も重視し、学びを深めます。パッケージデザインの制作では、モックアップ（模型）作成の手順や素材の扱いを指導し、実践的なスキルを養います。動画制作では、練習動画を通じてモチーフやストーリーの考え方を学び、取り組みやすい手法を身につけることで柔軟な発想力を育みます。これらのアプローチからバラエティ豊かで質の高いアウトプットを生み出す力を養成します。
4.教育活動や教育業績 科目名④：デザイン基礎	Adobe Illustratorの基礎学習を通じて、「PCを使ってデザインすることの楽しさと可能性」を実践的に習得することを目的としています。毎回ごとに制作課題の難易度を少しずつ上げながらIllustratorの基礎技術から応用技術までを学び、一通りのスキルを習得します。その後、レーザーカッター用の切り出しデータの作成や、地域をテーマにしたロゴマーク制作など、より実践的な課題に取り組むことでデザインの基礎を学びながらIllustratorの応用力を養います。社会に出てからはPC操作は必須のため、「苦手なPC」を「楽しいPC・得意なPC」に意識を変えることも目的としています。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：デザイン基礎</p>	<p>2科目同じものを開講しており、令和7年度授業評価アンケート結果での授業理解度はそれぞれ3.77、3.71であり、概ね講義の目的について実践を通してながら理解できていると考えます。受講生のコメントでは「多くのデザインを作成して、デザインの楽しさを感じた」「パソコンを使うのが初めての私でも楽しくできた」「きちんと教えながら進んで行くので行き詰まる事は無かった」「授業の初めに前回の授業でやった作業の復習があり、理解が深まった」など、初めてPCを使ったデザイン制作に取り組む受講生でも、活動を通して理解しながら実践力をつけることができたと考えます。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：デザイン応用/パッケージデザイン</p>	<p>令和7年度授業評価アンケート結果での授業理解度は3.75であり、ほとんどの受講生が講義の目的について実践を通してながら理解できていると考えます。受講生のコメントでは「実際にラベルを作ってみたり、商品を考えたりすることができた」「自分なりの作品を自由に表現でき、自分のアイデアを表現することができるようになった」など、他のデザイン担当科目を踏まえた上で取り組み姿勢も見受けられ、科目を通して実践力をつけることができたと考えられます。「デザイン基礎」では使用していないPhotoshopの導入タイミングについても、前年度同様概ねうまくいった認識です。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食とデザインII</p>	<p>令和7年度授業評価アンケート結果での授業理解度は3.78であり、ほとんどの受講生が講義の目的について実践を通してながら理解できていると考えます。受講生のコメントでは「食品のデザインの知識だけでなく動画作成やマーケティングについても学べた」「食についてをデザインの観点から見ることで斬新だった」など、他のデザイン担当科目を踏まえた上で取り組み姿勢も見受けられ、科目を通して実践力をつけることができたと考えられます。オリジナル店舗の企画提案のフェーズではAIを使ったイメージ画像作成を行っていましたが、AIがより浸透した今年度ではより深い理解へと促すことができました。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：芸術</p>	<p>令和7年度授業評価アンケート結果での授業理解度は3.75であり、ほとんどの受講生が講義の目的について実践を通してながら理解できていると考えます。受講生のコメントでは「ほぼ毎回違う美術を学ぶことができたので色んなジャンルの美術の面白さを学ぶことができた」「今までやったことのないものもやり方を詳しく教えてくれてやりやすかった」など、ほとんどの学生が制作活動を通して知識や技術の吸収、作品完成による達成感を実践的に学ぶことができたと考えます。授業では教室全体を巡回して受講者全員に声をかけ、アイデアの指南や技術的な指導を行います。「教授の話し方や生徒との関わり方教え方がとても良かった」「作品を作っていく中で自信も湧いていものが作れたと思った」という受講生コメントから、それらも概ね効果的に機能していると考えます。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>大学の取り組みとして各授業においては授業アンケートを必ず実施し、結果の分析とコメントを参考にして次期授業での改善を毎回実施しています。また、フードビジネス学科の学修につながる取り組みとして、NBMSでの取り組みをはじめ、学外にて食に関係する業者や企業、教育機関、Station AIをはじめとする研究機関等を訪問するほか、地元大垣市でのまちづくり団体との関わりからキッチンカーや店舗、個人事業主とのつながりをつくり、パッケージデザインやコンセプトメイキング、イメージ戦略や展覧など実践的な食のビジネスについて研鑽を重ね、ゼミや授業での展開、本学学生を含めた学外でのワークショップを実施します。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度に担当した全8講義（演習を除く）の授業評価アンケートにおける授業理解度の平均は3.73であり、受講者は各講義の目的を概ね理解していると考えます。演習では、専門演習で企画・デザイン制作・提案力を養った後、卒業演習では「食」をモチーフに多角的なアプローチで制作活動を行いました。その成果として、令和7年度卒業制作を中心とした学生作品展示会「ふんり展2026」では、荻洲記念美術館にて5日間の学生作品の展示を実施。地域住民や本学訪問の高校生・教員など、学外へ向けた発信の場ともなりました。また、これらの取り組みを軸にオープンキャンパスでの体験授業や出前授業を通じて高校生向けの活動も展開しました。</p> <p>令和8年度の目標は、フードビジネス学科における「食とデザイン」の可能性を拡張し、AIなどのテクノロジーと協働する力を高めることで、学生本来の提案力・表現力の向上を図ることです。</p> <p>現在、ChatGPTをはじめとする生成AIツールは広く活用されていますが、その使い方や生成物に対する理解については、適切な指導が不可欠です。テキスト生成に加え、画像生成ツールの活用により、描画が苦手な学生でも視覚的なイメージを具体化でき、提案のビジュアライゼーションの水準を一定に保つことが可能になりました。これにより、発想そのものや提案内容に焦点を当てやすくなるとともに、アイデア共有の効率化にもつながります。一方で、アウトプットが均質化する環境においては、評価の軸を「結果」だけに置くことは適切ではありません。重視すべきは、生成物そのものではなく、そこに至る思考や発想のプロセスです。個々の経験や知見が専門性を形づくることを理解させ、それらを組み合わせる力、すなわち「考えながら学ぶ力」を育成することが重要であると考えます。</p> <p>情報メディア学科担当科目である「マルチメディア」では、AIを「使う側」としての理解を深める実践的な学習機会を数年前より設けており、講義後の考察では学生から多様な意見が寄せられます。当初（2023年）ではほとんどの受講生がChatGPTを使用したことがなかった状況から、今年度ではほとんどの受講生が使用している状況になります。その中で、どのようにすればAIを補助技術としてよりよく活用することができるのか、またそのためにはどのような視点を持つ必要があるのか、「考えながら学ぶ力」の育成を軸に、実践を通して模索します。</p> <p>また、フードビジネスの分野では、食品サンプルや食品成形、新たな食品提案やパッケージングの分野においても、安価で優れた性能の3Dプリンターの可能性が広がっています。3D設計技術の習得とPCや周辺機器に関する専門知識、その前に就職活動において「PCに不慣れ」という課題が3・4年生で生じることがないよう、デジタルデータの扱いを得意分野とできるよう、各担当科目や演習の設計を工夫してまいります。授業を通じて知識や技術を習得するだけでなく、自ら積極的に挑戦する経験を積み、各自の強みを最大限に活かせる力を育むことを目指します。そして、その力を自信につなげ、社会で活躍できる人材の育成に努めて参ります。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：國友宏渉

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

小学校・中学校・高等学校で身につけた知識、技能、人間性を土台にして、大学ではさらに高度な学習内容に取り組み、専門的知識、専門的技能、そして信頼、尊敬される人格を形成してほしい。健康栄養学科では、食、栄養、健康について幅広い知識と技術を習得してもらい、そのために日々の学生生活において、自己の責任において自身の健康を管理し、四年間の厳しい学習生活を乗り越えてほしい。その上で、人々が心身ともに健康で質の高い生活を送るために必要な、健康の維持・増進、病気の予防、治療ができるように、管理栄養士、栄養士として指導のできる資質を確実に身につけてほしい。そのために、われわれ担当教員は、各専門領域における学習の目的、目標を明確に伝え、学習目標を達成するための受講方法と予習、復習の方法を指導する。また、単元ごとの理解度、習熟度を確認するために、小テストなどを行い、受講者全員が目標に到達できるように心がける。さらに、学期末においては、授業内容のすべてが受講者に理解されたかをはかる期末試験を実施し、到達できなかった受講者に対して追加の試験等を課し、補足的な教育を行う。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：健康管理概論	本科目では、受講者自身の健康管理、健康の維持・増進のために受講してもらい、将来に管理栄養士、栄養士として人々の健康管理について指導できる指導者としての資質を身につけてほしい。そのために、日々の学生生活における健康管理の在り方、健康の維持・増進のための方法、病気の予防と治療のための正しい知識を学習してもらい、そこで、講義中にミニレポートや小テストを行い、受講生の理解度、習熟度を確認している。また、講義中に様々な学習課題に対しての意見を発表してもらい、受講者全員で問題や課題の共有を行い、みんなで考える姿勢、態度を養っている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：運動生理学	本科目では、運動を実施することによる身体の反応、適応について学習する。運動を行うと呼吸が荒くなる、身体が熱くなる。これは運動による身体の応答である。また一定期間運動を続けると、腕や足の筋肉が太くなる。これは運動による身体の適応である。このように、運動を実施することによる身体への影響を明らかにすることが運動生理学の重要な目的である。さらに、運動には精神的な面への影響もある。こうした運動の心身への影響は、健康の維持・増進に利用することができ、運動効果として捉えることができる。本講義内は、人々が質の高い生活を送るために必要な体力（行動体力、防衛体力）の向上について理解を深めることができ、人々の健康な生活に貢献するための重要な資質を培うものとなる。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	情報メディア学科、フードビジネス学科1年生の必修科目として開講している本講義は、大学生として4年間、健康な学生生活を送るために必要な基礎知識を身につけてほしいと考えている。延いては生涯を健康に暮らすために、健康管理に対して興味・関心をもってほしい。中でも日々の生活習慣、特に食生活習慣は重要であり、健康の維持・増進のために正しい食生活を送らなければならない。そこで本講義では、健康を支える食において、基本的な栄養に関する基礎を学習し、より理想的な食生活を実践できるようにすることである。偏った栄養摂取、過剰な栄養摂取、有害な栄養摂取などが起こらないように、健康と栄養の関係について詳しくなってほしい。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：健康管理概論	本講義における授業評価アンケートの理解度、満足度の結果は、平均値で3.52, 3.56であった。昨年度同様に高く、ここ数年間においても安定して3.5以上の評価となっている。評価値としては高く満足している。また、自由記述においても、「グラフや表による解説が分かりやすかった」「重要な点を解説してもらえた」「ためになった」という意見が多かった。一方、「スライドのスピードがはやい」「余分な話が多かった」といった意見もあり、改善すべきところもあった。15週でかなりの内容を教授する上で、やや詰め込みすぎのところがああり、もう少しポイントを整理する必要があると考えている。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：運動生理学	本講義における授業評価アンケートの理解度、満足度の結果は、3.55, 3.52であった。選択科目であるため元々運動と身体に興味のある学生が受講していることもあり、評価も高いと考えられる。内容的にかなり専門性が高く、初めて耳にするテクニカルタームが多いため、分かりやすくするための動画を用いている。そのことが受講生にとっては「分かりやすさ」を高めているものと思われる。今後も、できる限り図表、写真、動画を教材に利用して、身体の中で起こっている現象（生理反応）などを分かりやすくイメージできるように努めたい。また、日々の生活の中で経験する運動と応答、適応について取り上げ、より具体的な説明に心がけたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：健康と栄養	情報メディア学科、フードビジネス学科1年生の必修科目として開講している。本講義における授業評価アンケートの理解度、満足度の結果は、平均で3.84, 3.74であった。また、自由記述では、配付したノートのブランクを埋めることでノートを完成させるため、「復習しやすかった」、「配付ノートに沿った授業内容で分かりやすかった」、「話が聞き取りやすかった」といった意見が多かった。4年間、健康な学生生活を送るために、受講生自身の健康管理、健康の維持・増進、病気の予防ができるように、日々の具体的な健康管理のあり方や方法について解説している。今後もタイムリーな健康に関する話題などを用意しながら、より健康管理に興味と関心を持ってもらえるような授業づくりに心がけたい。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	本年度の講義では、授業中にできる限り教員と学生の会話（ダイアログ形）を取り入れた。一方的に教員の話をする講義から、課題に対する学生の意見や疑問を授業中に発言してもらおうものである。またその意見に対する他の学生の意見を交え、問題を共有する形でディスカッションができるようになった。そのことにより、多くの学生が一つの課題に対して、より興味関心を示すようになり、授業が活気づいたように思える。こうした取り組みを、今後さらに発展させていきたいと考えている。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>半期15週の講義については、各単元の理解度を確認するために、ミニレポートや小テストを導入したため、それぞれのステージにおける理解度や習熟度が確認できた。また、授業において会話型（ダイアログ形式）を実践することで、課題、問題を共有することができ、受講生の興味・関心度がアップしたと感じている。授業評価アンケートにおいても、「発言する機会があってよかった」、「みんなでディスカッションすることが面白い」、「眠さがなくなった」などといった感想もみられた。令和7年度の授業においても、このような授業方法を積極的に取り入れて、理解できていない学生をつくらないように心がけたい。また、一方的な講義ではなく、双方向に情報のやり取りがある、活気のある授業づくりを目指したいと考えている。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：栗林芳彦

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

大学での4年間は成人になるための準備期間であり、大学は幸福で充実した人生を送るに必要な教養と対人スキルを身につける場である。さらに、生涯に涉って自己を啓発し学び続ける習慣を身につける場でもある。学生たちには知的好奇心を高く保ち、社会や様々な学問領域に関心を持ち、一生モノの宝物を見つけてほしい。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：地域の課題	稲沢市の抱える課題について学生が5人一組のチームに分かれて、その解決策をプレゼンする。グループで討議をしプレゼンを完成させるプロセスを経て問題解決力を養う。また、課題は3回にわたって出題され、その都度チームを組み換え、一度同じチームになった人とは決して一緒にならないようにしている。そうすることによって1から人間関係を築く作業を3回繰り返すことになる。
2.教育活動や教育業績 科目名②：Web解析	Webを利用した様々なビジネスにおいて、必要な知識を身につけるべく、基礎から専門的な知識を講義する。
3.教育活動や教育業績 科目名③：CM制作	テレビに限らず、動画広告を作成する上での基礎知識やアプローチについて示唆を与える。
4.教育活動や教育業績 科目名④：日本語力	大学生として、さらには社会人として必要な日本語の力を修得する。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：地域の課題	全体的に高い評価であった。本学はサークル活動などもあまり盛んでなく、学部や学年を超えた人間関係の構築が難しい状況である。この科目は3学科共通で配当年次が1年生なので、まさに受講生は学科も学年もばらばらであるが、そのような学生がチームを組んで課題に取り組むところに意義があると考えている。問題点はコミュニケーションが苦手な学生が孤立する傾向があるので、そのあたりをどうするかを考えていく必要がある。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：Web解析	理解度は3.64、満足度も3.72で、昨年に比べて大幅に評価が向上した。学生のコメントにも「レジュメの内容を繰り返し読み、web関連に興味があるので、将来使えそうな知識はピックアップしながら講義に取り組んでいた。」「普段見かける広告やサイトについて、web上でのマーケティングという点から見て理解を深められた」などというコメントがあった。授業のやり方は他の入門科目と同様で、レジュメと復習用のシートを毎回配布しこのシートに書き込んでいくことで知識の定着とともに試験への準備が図れるようにしている。賞味期限の短い知識を修得する科目は、なるべくエネルギーを必要としないやり方がよいと思う。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：CM制作	私が最初の5コマを実施し、残り10コマは外部講師にお願いしている。授業の理解度が3.58満足度が3.50で、まずまずの評価であった。外部講師は実際にcmの制作を指導しているが、学生の自己表現の場としても機能していると思う。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	日本語力は3学科をオムニバスで受け持つ。健康栄養、フードビジネスについては、イタリアの食物を話題に文章をまとめる、短い文章を読み、理解するとやったことを実践させることができた。情報メディアでは、5パラグラフエッセイを書かせたが、学生の能力向上に手ごたえを感じた。半年間、15回の講義で日本語力が飛躍的に向上することは期待できないので、これからどうやったら日本語の力を伸ばしていけるのか、その方向性を実感してもらうことが大事である。また、読書量が圧倒的に少ないので、読書習慣を付けることが必要だが、何を読んでもよいかわからないのが実情である。そのために読書案内も行っていく必要があると考えている。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	特になし。
-------------------------	-------

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>「地域の課題」は、学科、学年を超えた交流の機会を学生たちが楽しんでくれており、こちらの目論見が実現できて満足している。また、「日本語力」においても、5パラグラフエッセイを書かせる課題を楽しんでいる学生がいて、励みになった。令和8年度も他の科目では味わえないチャレンジングな機会を提供したい。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：助教

氏名：黒瀬 聡

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザ向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

基礎教育センターの教員として、大学1年次のすべての学生に対して、大学の講義を受けてその内容を理解し、自らの興味関心のために勉強する態度を定着させることに努めている。

目指すのは、大学での必要知識の習得ではなく、知識習得のための手法であるため、使用する教材の内容それ自体は特に限定されない。しかし、近年の学生の傾向として、興味を示す対象が非常に限定的かつ閉鎖的なため、その時代の流行りや時流に合わせた内容にする必要がある。また、このような学生の学習態度の向上は、画一的に測定することは難しく、むしろ測定をしようと試みることによって教育効果を阻害することもあるため、運用・評価方法に気をつける必要がある。現在の取り組みとしては、いわゆる学習する上で悪い態度というものは、身体的精神的な不調であり、健康診断のようなチェック体制でその不調を察し、通常の健康な状態に近づけるという試みが適切なアプローチに近いのではないかと考えている。健全な学習態度は、知識習得にとって重要な要素であり、今後の大学教育の根幹を形成しようと考えられるため、基礎教育センターの取り組みとして今後も継続していく次第である。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：日本語Ⅰ・Ⅱ	今年度の講義は、複数の担当教員で授業を分担した。それぞれのテーマは違うが、大学生における基礎的な能力向上を目的とした内容を実施した。その中で、学生が興味関心を示しやすい教材を用いて、講義中にサポート教員が巡回しながら、学生の授業態度を観察し、時にアドバイス・サポートすることで学習態度の変容に努めた。また、コロナ罹患による欠欠にも対応できるようにWebclassに全講義動画をアップロードし、いつでも授業内容を復習できるようにしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：数的処理Ⅰ・Ⅱ	コロナ禍における取り組みから継続して、講義内容を動画で撮影し、編集してWebClassにアップロードしている。 教員の作業負担が増えるが、コメントにもあるように学生からは非常に好評のため、今後も継続していくつもりである。また、今年度の講義は例年と比べ、数理モデルに関する講義時間を多く確保した。その他にも、取り組んだ問題を再度解いたり、復習に多くの時間をあてることを試みた。さらに、サポート教員を増やすことで頼んでいる学生を早期に発見しアドバイスすることができた。これにより広範に多くのトピックを扱うことはできなかったが、基礎的な内容に関してしっかりした知識を得ることができたのではないかと考える。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：日本語力Ⅰ・Ⅱ	どの科目も理解度は3.0～3.5程度ではあるため、授業内容がある程度理解してもらえたものと思われる。ただ、情報メディアの日本語力の授業は、健康栄養と比べて、理解度が低くなる傾向があり、これは、教室全体の人数に対する基礎教育センターのサポート教員が少ないことが原因の一つであると考えられる。したがって、サポート教員が少ない場合でも理解度を深めるような施策が情報メディアの授業に対しては重要であると思われる。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：数的処理Ⅰ・Ⅱ	どの科目も理解度は3.0～3.5程度ではあるため、授業内容がある程度理解してもらえたものと思われる。しかし、定期試験の成績が悪く、再試験該当者がこの数年で一番多かったため、本人の美感和実際の理解度の乖離が大きいに思われる。この原因として考えられるのが、近年の生成AIの利用である。授業中の課題に対して、生成AIを利用して解答する学生が増加している。生成AIを使うこと自体は問題ないが、内容を理解せず機械的に使用してしまうと、最終的なペーパーテストで解答できないという自体になる。授業内容の性質上、生成AIやネットの検索を禁止することはできないため、今後、授業内でAIの適切な使い方を教えるなど、さらに工夫が必要であると思われる。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：	
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	特になし
-------------------------	------

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>日本語力の授業においては、複数の担当教員によって、授業中に学生をサポートする体制をとっているが、サポート教員にとっても初めての講義では、満足いくサポートをすることができない。今後、授業内容をテキストとしてより具体化し、サポート教員もあらかじめ学習内容を把握するような形をとることが理想である。数的処理においては、生成AIを用いて、授業中の課題や期末課題を解答することができるため、単純なAI使用で解答できない問題や、AIを使用しつても理解度を向上させる施策が必要である。具体的には、グループワークの側面を強化し、その場でコミュニケーションを取りながら解答させるような問題を作成中である。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：後藤 千穂

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を推進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

モデルコアカリキュラムでも示されている「栄養・食を通して、人々の健康と幸福に貢献する」管理栄養士であり、さらに社会から信頼され、自らもやりがいを感じる管理栄養士の養成を目指している。これを目指すため、統合科目としては、卒業演習ⅠおよびⅡ、実践の場としての臨床実習ⅠおよびⅢを担当している。特に卒業演習ではEBN（Evidence based nutrition; 根拠に基づいた栄養学）の考え方と実践力を身につけることを目指している。そのために自ら問題を発見し、その解決法を見いだし、実践した上でその効果を確認するためのスキルや方法を身につけ、さらに、その過程および結果について自らの考えを持ち、ディスカッションおよびプレゼンテーション力を身につけることを目指している。これは「4.主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。」につながる。また、臨床実習では個別指導を通じ、管理栄養士としての職業倫理や実習先での社会人としての基本的な行動等を含め、施設ごとの課題への取り組みを通じて、自ら考え学び、主体的に行動し、実践につながることを目指している。これは「3.病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。」に該当する。その基本になる科目として、調理学実験を通じて調理の過程における食品の様々な変化と、それを実践につながることを目指している。これは「1.「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。」にあてはまる。また栄養学、公衆栄養学、公衆栄養学実習ではEBNの基本的な考え方から情報収集方法、実践への応用を身につけることを目指しており、これは「2.「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。」に該当する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：栄養疫学	食生活（栄養）を通して健康の維持増進、疾病の一次予防をするためには、人を対象として食習慣を含む生活習慣と健康・疾病の因果関係を科学的に明らかにする必要がある。そこで、食生活（栄養）と健康・疾病の関連をとらえる方法としての栄養疫学の原理と方法について修得することを目標としている。また、管理栄養士として栄養疫学データを適切に用いて健康・栄養活動の効果測定にいかすことができる知識と考え方を身につける。そのために、栄養疫学の原理と方法を理解し、食事調査と栄養摂取量の特性を学び、EBN (evidence based nutrition) の考え方を修得することを目的としている。これにより、食に関わる情報が氾濫している現代において、情報を収集し、科学的に吟味した上で取捨選択できるようになるよう、講義をすすめている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：公衆栄養学	わが国や諸外国の健康・栄養問題に関する動向とそれらに対応した主要な栄養政策について理解することにより、集団や地域における人々の健康・栄養状態や社会・生活環境の特徴に基づいた公衆栄養活動につながる。さらに社会における管理栄養士の使命や役割および活動の理解することを目的としている。そのために、わが国および諸外国の健康・栄養の現状と問題点を説明でき、公衆栄養活動のマネジメントの理論と方法を理解し、わが国の栄養行政について説明できることを目標としている。また、実社会と関連のある科目であることから、日常生活においても社会の動向に関心をもち、新聞、テレビ、インターネット等の近年の健康・栄養に関する情報に関心をもてるよう、講義をすすめている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：公衆栄養学実習	地域や職などのモデル集団を想定して、集団の栄養・健康問題を発見し、それに関連する要因を収集・分析し、さらに問題解決のために、公衆栄養活動プログラムの立案、実施、評価・判定の方法等について実習している。また、社会における管理栄養士の使命や役割および活動分野を理解し、実践につなげることができるように、公衆栄養活動のマネジメントの理論と方法を活用し、コミュニケーション能力や総合的マネジメント能力を習得し、さらにプレゼンテーションスキルを身につけるよう、実習をすすめている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：調理学実験	調理の過程における食品の様々な変化を、物理的、化学的方法を用いて解析し、調理学の理論の根拠を明らかにすることを目的としている。また、食事管理や栄養教育への応用の基礎となる、調味や調理による食品の変化と味覚の関連などについて実験を通して理解し、調理を科学的に実践する力を修得する。この実験を通して各食品の性質を理解し、調理時に適切な取り扱い方法や方法を身につける。また、食品の特性をいかした調理により、個人々の健康状態や嗜好に応じた食事を提案、提供できることにつながる。日常的に目にする調理上の変化についても観察し、その理由を考え、考察できるようにすることを目的としてレポート作成を通じて実験をすすめている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：栄養疫学	栄養疫学（管理栄養士必修、2クラス合同、有効回答数51名、回収率77.3%）において、授業評価12項目の平均値±標準偏差は、最高3.75±0.44、最低3.39±0.75であり、全12項目中、10項目が3.5を超える評価であった。特に高評価であったのは「9.課題の量」であった。栄養疫学は、実際に自ら調査等を実施したことのない学生においては、内容を実感および理解しにくい科目であることから、配布資料を工夫している。また説明方法の工夫や練習問題を用いて理解度を確認した。理解度については、3.49であり、概ね良い評価と考えている。自由記述には、説明がわかりやすい等のコメントがみられた。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：公衆栄養学	公衆栄養学（管理栄養士必修、2クラス合同、受講生62名、有効回答数43名、回収率69.4%）である。授業評価12項目の平均値は、最高3.67、最低3.51であり、全12項目中12項目で3.5を超える評価であった。高評価であったのは「2.課題への取り組み」「7.板書やモニター提示と内容の適切さ」であった。全項目の平均はそれぞれ3.61であった。理解度に関しては3.53であった。自由記述には「メモする場所や時間の確保」「線を引くところの指示」等であった。授業評価の回答時間を設けていたが、欠席者もみられたため、回収率が70%をわずかに下回った。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：公衆栄養学実習	公衆栄養学実習（管理栄養士必修、2クラス、有効回答数47名、回収率76.9%および77.1%）において、授業評価13項目の平均値±標準偏差は、最高3.85、最低3.33であった。平均3.5を超える高評価であったのは、1クラスは13項目中全項目、もう1クラスは12項目であった。「12.授業内容の理解」においては、2クラスでそれぞれ3.65、3.67であった。公衆栄養学実習は、集団を対象とした評価、計画、実施のプロセスが重要な科目であるが、学生においては、なかなか内容を実感および理解しにくい科目であることに加え、授業期間中に臨地実習により欠席する学生が多数いるため、グループワーク等の実施については班内の連携をとりやすいよう考慮して実習をすすめた。また、実際のデータをもとにグループ発表を行うようにしている。この結果、自由記述欄においても「発表を積極的に行えた」という肯定的な記述がみられた。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：調理学実験	調理学実験（必修、2クラス、受講生58名、有効回答数51名、回収率87.9%）において、授業評価13項目の平均値は最高3.86、最低3.43であり、1クラスは全13項目、他クラスでは12項目目で3.5を超える高評価であった。本実験では、毎回レポート課題を出し、次回の実験時に提出としており、学生としてはある程度の課題量であるが、それが復習および理解を促すことにつながり、達成感となって学習効果につながったと考えており、理解度は3.61、3.79であった。また、本実験では毎時の冒頭で「なぜ、この実験を行うのか」「実験を通して何が得られ、どう役立つのか」について具体例を用いて説明し、また、レポート作成時の考察のポイント等も明示したため、どこにポイントをおいて考察するか等が理解し易く、レポートの負担感が減っていることも考えられる。自由記述欄にも「講義がわかりやすく、レポートが書きやすい」等の記載があった。また、実験科目では積極的に取り組むことが重要であり、こちらも両クラスにおいて評価平均3.70、3.82であり、自由回答欄に「積極的に実験を行った」「考察を頑張った」の記述があり、教育効果につながっていると考える。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	担当する必修科目（栄養疫学、公衆栄養学、公衆栄養学実習、調理学実験）で学生による授業評価アンケートを実施し、評価結果をまとめ、次年度へ向けた授業準備に役立てている。学会活動として、日本栄養改善学会東海支部会支部長に就任し、支部会の運営している。またEBN（根拠に基づく栄養学）につながる取り組みとして、愛知県栄養士の生涯教育委員長にも就任し、日本栄養改善学会との共催セミナーを企画開催し、自身もアドバイザーとして参加した。ここでは、管理栄養士の実践の場から研究発表につながる取り組みをしている。これは研修の場を学会員および栄養士会員に提供するとともに、自らも学びを得た。また、担当科目の特性上、多方面から情報を得る必要があることから、年間60講演以上の研修会に参加している。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>卒業演習は、指導したゼミ学生を筆頭発表者とし、学会発表（第14回日本栄養改善学会東海支部会学術総会で発表）を口頭にて行った。発表タイトルは「産官学連携による「自然に健康に導く食環境づくり」の取り組み方法の検討（第3報）」である。また産官学連携事業（マックスバリュ東海株式会社、清須保健所、名古屋文理大学）として愛知県の「健康チャレンジ」の取り組みのうち、食環境整備（無関心層にも届く仕掛けづくり）としてマックスバリュ東海にてゼミ学生考案のナッジ理論を用いた野菜摂取量向上に向けた取組を行い、新聞社から取材を受けるなど好評であった。また健康関心層への働きかけとしては、対面による食育活動として稲沢市の依頼により「いきいきいなざわ健康フェスタ」で地域住民に対して野菜摂取量向上にむけた啓発活動を行った。これらのゼミ活動において、学生は自らが考案した販促物が実際に店頭で展示され、販売実績につながる様子から、かなり積極的に取り組み、やりがいと達成感をえられていた。また実際の地域住民を対象とした食育活動では、伝えられる楽しさとやりがいを感じていた。さらに卒業演習の活動は冊子にまとめ、報告書とすることにより、自らの活動をまとめる力が身についたと考えられる。</p> <p>担当科目としては、公衆栄養学は2年生後期2クラス、栄養疫学は3年生前期2クラス、公衆栄養学実習は3年生後期2クラス、調理学実験は2年生前期2クラスを担当した。臨地実習は臨地実習Ⅲの公衆栄養（保健所、保健センター）をメイン教員として担当し、その他、福祉施設での実習の事前指導及び巡回指導を行った。公衆栄養学はテキスト「管理栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム準拠 第10巻 公衆栄養学 2025年版 公衆栄養活動の実践のための理論と展開」を日本医歯薬出版より出版した。また栄養疫学のテキストとして「栄養疫学 一食と健康のデータサイエンス」を建帛社から出版した。</p> <p>各科目の授業内容については、昨年に続き今年度の授業評価においても、授業の最初の復習と、モニター提示や練習問題が有効であったことが示されたので、今後もこれらは継続して向上を目指す。また、練習問題の内容や説明方法も検討を加え、理解度の向上に努めたいと考えている。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：小橋 一秀

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

自身の知見を広げる喜びに牽引された探究心を軸として学問と実践を通して他人との関わりの中で学生が適当によく生られるように遊びを持って寄り添う教育を実践する。

情報の力を活かし技術と創造力で社会を豊かにする人材を育てる。

学生に情報システムとコンテンツを駆使して未来を創る力を身につけさせ社会や文化に貢献する情熱を育む。

知識と技術に共感性や感性などの人間力を融合させ次世代を担うクリエイターを育成する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：データベース	データベースを設計する際、「このデータが誰にどう使われ、どんな影響を与えるか」を意識させる。例えば、受講生自身の関心が高いテーマを元に設計を始め、具体的な機能要件や使いやすさを考慮させることで、開発者と利用者の双方の視点に立った技術選定やサービス提供という社会への責任感に基づいた演習を行う。XAMPP、PHP、SQL、CakePHPによるWebサービスを実装する。受講生の探究の方向性としてデザイン、システム設計、企画の3方面を示し、努力目標を与えて評価する。オンライン学習サービスのPaizaとSQLZOOを導入してMySQLの自習を進められるようにしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：ゲームプログラミング	ゲームのコードを書く技術を教えるだけでなく、「プレイヤーに楽しさや感動を与える」「より深くゲームに向き合うアイデアを実現する」ことを目指させる。技術的なアルゴリズムに責任感や創造性を要求する。 Unity、C＃、Snap!を扱う。☑ ミニゲームとして完成品を課題として要求することでゲーム制作の全体像を俯瞰する。CGモデリング、ライティング、サウンドなど関連技術を受講生独自の工夫として組み入れる余地を設け評価している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：メディアアート	作品の視覚的な完成度に拘らず、「観る人にどんな感情を伝えたいか」「社会にどんなメッセージを届けたいか」を重視して、感性や共感が技術に融合した作品を制作する。 Max9、Arduino、micro:bitを主軸に3年後期までの情報メディア学科の学びを活かした多彩な技術を扱う。講義担当者やSAと積極的に共同作業を推奨しており、個別対応で特化して技術を伝達し供与している、☑
4.教育活動や教育業績 科目名④：専門演習・卒業演習	学内外の展示会やイベントと時節に応じた自主企画での作品やアトラクション制作により、スケジュール管理やチームでの協業と来場者からのフィードバック、エンターテインメント性やクオリティの追及などを意識した実践を行っている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：データベース	(R6)ChatGPTなどAIのコード支援によりデータベースの設計とコーディングのトラブルの自己解決率が上がった反面、テーマ設定すらAIに任せている様子の受講生も現れており、手軽に済ませるだけで学習のレベルが落ちた受講生もいる。Vibe Coding時代の演習内容にシフトする必要がある。 (R7)より一層LLMのコーディングとシステム実装性能は向上しており、期末制作のクオリティは従来よりも大幅に向上している、反面LLMをまったく使いこなせていない層もあり、成果物のクオリティだけの成績評価が難しくなっている。AWSなどクラウドサービスを睨んだ実践演習にも取り組めていないので要対応である。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：ゲームプログラミング	(R6)他の授業に比べ特別に難しい内容ではないが、Unityのメニューの英語が苦手だったり自学自習で遅れを取り戻す気のない受講生が脱落していく。受講生にしっかりと学習目標を認識させ授業時間外のサポート体制を充実させて脱落率を下げたい。☒ (R7)LLMのコーディング性能の向上により、一部の受講生に留まるが自身のアイデアをかなり自由に実装できている。反面、LLMの出力するシニアクラスのコードを受講生が理解できているかは怪しいところがある。コードの解説と理解を課題に含めて受講生のスキルアップにつなげたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：メディアアート	(R6)Max9は修得が困難なソフトとして有名であるが受講者から見た原因の多くは情報が英語で提供されているためであり、本来はローコード系の非エンジニア向け開発環境である。その面白さに気が付いてハマらない限り修得コストに見合ったリターンが少ないことが課題である。現在の課題を受講生にアピールする課題に改修していくことが必要。 (R7)Max9にハマらせるための課題制作の土台となるバッチャーを幾つか試作して提供した。さらに充実させていきたい。一方でP5.jsなどメディアアート系のコーディング環境でLLMの高い実装力で作品を作成できた受講生も増えた。TouchDesignerによる作品も登場しているがLLMがノード型に弱いので苦戦している。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	TouchDesignerとOSCの連携やPythonスクリプトノードをLLMで作成した。 BlenderやUnityのプラグラインをLLMで作成して導入し、授業で手順を示した。 Maxでyoutube.jsやgoogle teachable machineを活用するバッチャーのメンテナンスと改良を行った。 (継続)VR体験会を高校で実践した。集団でのVR体験会の運用についてノウハウを蓄積できた。 コーディングエージェントCodex、AntigravityによるAndroidアプリ開発やWebサービス開発を幾つか行った。成果物を授業で活用する予定。 3DGSや360全天球撮影によるVRコンテンツの開発と展示を行った。 関数型プログラミングのより深い理解のため圏論を学んだ。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>2025年度は例年通りのイベント（稲沢こどもフェスティバルのメディア体験会、大学祭のゼミ展示、隔年開催のOMMFは無し）に加え愛・地球博2025 朝日遺跡ミュージアムの弥生月間に大学チームとして参加し学生と共に教育研究内容を社会に還元した。高校のVR体験会（暁高校、木曽川高校）の要望に継続して対応した。</p> <p>学内のデジタルコンテンツコンペを運営し15作品の応募を得た。応募作品をインタラクティブコンテンツにまとめてWebで公開した。</p> <p>授業資料や大学・ゼミでの活動の様子を動画28本、ショート動画25本を作成してYoutubeで公開した。TikTokに動画を25本投稿した。</p> <p>Xへの投稿は約1万件（RTと自身のポスト合わせて）、うち教育・研究に関するものの割合は推定で9割、そのうち自身のポストは1割と推測し千件弱と思われる。年間インプレッションは512.4K。</p> <p>2026年度はコーディングエージェントのオーケストレーション作業やMCPIによるアプリ操作、授業や事務仕事へのAI活用に取り組みたい。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：助教

氏名：小林あづみ

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：日本語科	基礎教育科目のうち、各学科で必修の科目である。フードビジネス学科の1年生のクラスを担当しているため、フードビジネスを通じて社会に貢献するために必要な思考力（論理性）と課題発見力をまず養うような講義を実施する。そして、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する表現力を養う課題に講義内でとりこんでいく。講義を受講し課題にクラスメートと取り組むため、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけることになる。
2.教育活動や教育業績 科目名②：現代日本史	基礎教育科目のうち、全学部、全学年が選択可能な講義科目である。科目名からは、歴史学にカテゴライズされる印象があるが、歴史学に必要な歴史史料が未公開であるケースが多いことや、本学には歴史学を専攻する学科を有する文学部が存在しないため、歴史学としてよりも、現代の日本における様々な問題の起源と経緯を理解することを第一の目標とする。受講生はフードビジネス学科と情報メディア学科の学生がほとんどであるため、以下のような取り組みをする。1. 給食や食をとりまく環境の安全性などに焦点を当て、専門領域の知識と実践力を支える学力を養う。2. 社会的課題をメディアのように扱ってきたかを理解することで、自らもメディアを通じて課題解決への取り組みを伝える能力を養う。
3.教育活動や教育業績 科目名③：芸術	基礎教育科目のうち、全学部、全学年が選択可能な科目である。本学には四年制大学の情報メディア学科において、映像や音楽による芸術表現を学ぶ科目があるため、本講義では、それらの科目ではあまり扱うことのない日本の古典作品を主題にし、実際に筆を執ることや現代のアニメやマンガといった作品のベースになっている古典作品の理解を中心とした内容になっている。また、作家が生きた時代の問題を理解することで、芸術作品が社会のなかでどのような意義を持つのかを俯瞰し、今後の制作をすすめる上での基礎能力を養うことになる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：日本語力</p>	<p>アンケート結果に関しては、他所で公開されているためそちらを参照して下さい。本年度の当該科目は、前年度に引き続きフードビジネスに関する動画を視聴してメモをとることの重要性を理解するところから出発した。（動画であれば、2クラスとも内容は同じになるため）効果としては、勉強になった、ためになった等の好意的評価があり、否定的な内容はなかった。また、昨年度より複数の教員で講義を担当しているため、本年度は基本的には前年度を踏襲する内容ですすめた。本年度の新しい内容は、渡邊雅子氏（名古屋大学教授）による論理性に関するトピックや、アレクサンドラ構文のトピックであるが、講義に対する不満などはなく、まずまずの出来であったと判断している。学科の特性からか、食に関する内容を扱ったことへの評価が高く、教員との関係も良好であったため、理解度が低い場合でも教員にそれが伝わりやすく指導が行き届きやすかった。なお、今後の検討課題とした、Learn Wiz One の利用については、特に支障がないため今年度も利用することにした。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：現代日本史</p>	<p>アンケート結果に関しては、他所で公開されているためそちらを参照して下さい。当該科目について、本年度も講義初回にとったアンケート結果に従い、①今まで扱ってきた難民に関する内容を扱わず、SDGsに関する内容に特化した。また、情報メディア学科の受講生の専門性を考慮し、②写真などの芸術作品を通して歴史を考える内容を増やした。また、健康栄養学科の受講生に対して③給食の歴史についても目配りをした。以上の2点について、自由記述欄からは、①に関しては特にコメントはなく、②および③に関しては肯定的に捉える意見があった。（否定的なものはなかった） 理解度に関しては、昨年度に記述した問題は解消している。なお、検討課題の、Learn Wiz Oneの利用については、上記科目名①と同様の結論になった。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：芸術</p>	<p>以下は四年制大学で実施した「芸術」に関する内容である。当該科目は、基本的には前年度同様のスタイルで実施し、同様の評価が得られている。講義冒頭で生成AIの能力について触れ、望む内容を出力するためには、自分自身が手を動かして描いたり撮影したりする技術や審美眼を養う必要があることを伝え、①自分の手で描く②芸術作品を多く鑑賞する機会を増やし、引き出しを増やすことを講義目標にすることを明らかにした。その内容に理解を示した学生のみが受講したため、比較的评价は高かった。自由記述欄からは、本学に比較的近い美術館で作品を鑑賞する機会を増やしたことも、高評価につながっているように見える。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>昨年度に引き続き、「芸術」以外の全ての科目で、毎時間ごとに受講生からの疑問や意見を募り、その内容を次回の講義に反映した。また、受講生同士の交流を促進するために、Learn wiz one を利用し講義参加への意欲を高めた。また、芸術作品を所蔵する寺院で採取された茶などを実際に味わうことで、古典の現代への活かし方を考えるきっかけづくりをした。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>担当科目はすべて基礎教育科目であり、専門科目のように国家試験の合格率などによって成果を客観的に測ることができない。そのため成果といっても学生からの授業評価等でしか把握できないのが現状である。（例えばノートをとる習慣が、担当科目の受講により身に付いたかは、今後他の科目の受講態度で評価するしかない） 今後は昨年度に引き続き生成AIの利用について、適切な利用や活用法について、情報を収集し、理解を深め、効果的な活用をこころがけたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：近藤 徹弥

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

食と健康に関する幅広く高度な専門知識を有する管理栄養士が、その役割を十分に果たすためには、既存の知識を適切に活用するだけでなく、常に最新の知見を取り入れ、それを実践に結びつける力が求められます。したがって、管理栄養士養成教育において重要なのは、単なる知識の伝達にとどまらず、学生の意欲や能力を引き出し、大学で培った知識や思考を基盤として、卒業後に応用・実践できる力を育成することです。あわせて、社会に貢献できる人材の育成も不可欠です。

以上の考えに基づき、以下の3点を教育理念とします。

(1) 主体的に探究し、学び続ける力を育む

熱意をもって丁寧な講義および研究指導を行い、学問の面白さや達成感を伝えることで、学生が自ら学び続ける姿勢を身につけることを目指します。

(2) 応用・実践力を重視した教育の推進

調理・加工や保存に伴う成分・物性の変化について、具体的な事例を通して考察させる指導を行います。教科書だけでは得られない現場の状況を想像し理解する力を養うことで、卒業後に柔軟に対応できる実践力の育成を目指します。

(3) 人間関係を構築する力の育成

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：食品学I・II	食品学は、管理栄養士にとって基礎的かつ重要な学問の一つである。対象とする食品は多岐にわたり、素材や成分の理解から加工による変化に至るまで、幅広い内容を含む。用語の単なる暗記に陥ることを防ぐため、プレゼンテーション資料には写真や図を活用し、重要なポイントを具体的なイメージとして理解できるよう工夫している。また、知識同士を相互に関連付けて理解できるよう配慮している。さらに、学生の理解を深めるため、各回の冒頭で前回内容の簡単な復習を行い、演習問題を取り入れている。加えて、単元ごとに小テストを実施し、学習内容の定着を図っている。これらの取り組みにより、一定の教育効果が得られていると考えている。加えて、国家試験対策にとどまらず、管理栄養士として実社会で活用できる知識の習得を目指すとともに、食品にまつわるエピソードを適宜紹介し、食品学への興味・関心の喚起にも努めている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：加工食品学	本科目は、食品学I・IIにおいて食品成分や食品素材の特性を学んだ後に、調理加工、微生物利用食品、機能性表示など、食品加工分野について理解を深めることを目的としている。授業では、食品学I・IIで習得した知識を適宜復習しながら、加工に伴う成分変化や貯蔵、機能性に関する知識を体系的に学べるよう配慮している。また、学生の理解を深めるため、各回の冒頭で前回内容の簡単な復習を行うとともに、演習問題を取り入れている。さらに、単元ごとに小テストを実施し、学習内容の定着を図っている。加えて、食品の特性を生かした加工・調理法や食品に関するエピソードを適宜紹介し、学習への関心を高める工夫を行っている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：食品学実験I・II	全員が主体的に実験に取り組めるよう、3~4人の小グループを編成している。あらかじめ実験手順書を配布し、実験のフローチャートを作成・提出させることで、実験を円滑かつ安全に進められるよう工夫している。実験に不慣れた学生の理解を深めるため、テキストや配布資料を用い、実験の目的・方法、測定原理、注意などを丁寧に解説・指導している。また、劇物を使用する場合もあることから、安全指導を徹底している。さらに、食品学の講義と連携し、理解の深化に努めている。実験レポートの作成に際しては、書き方や各実験の要点について解説・指導を行い、提出されたすべてのレポートに対して改善に向けた助言を行っている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	卒業演習では、新たな発酵食品の開発に関する研究をテーマとしている。研究の過程で、醸造用微生物の働きや発酵食品の機能性・有用性について指導するとともに、食品衛生、食中毒、食品分析、食品包装に関する知識を深めるための勉強会も実施している。また、発酵食品に留まらず、さまざまな食品の試作・開発を通じて、楽しみながら食品の加工特性を理解できるよう工夫している。チームワークの大切さを身につけられるよう、実験の役割分担や結果のとりまとめ、考察について、教員がサポートしつつも、ゼミ生が主体となって議論を重ねながら進めている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：食品学I・II	授業の進め方や内容については、「スライドや配布資料が分かりやすい」「説明が丁寧である」「小テストが役に立った」など、肯定的な意見が多く寄せられた。これらの結果から、学生の能力やニーズに応じた適切な授業を概ね実施できたと考えている。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：加工食品学	「授業が分かりやすかった」「小テストがあることで定期的に復習できてよかった」などの意見が寄せられ、プレゼンテーション資料の工夫や定期的な小テストの実施が評価されたものと考えられる。これらの結果から、学生の能力やニーズに応じた適切な授業を概ね実施できたと判断している。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食品学実験・II	食品学との連携を意識した資料を事前に配布するとともに、実験の待ち時間や終了時に丁寧な説明を行ったこと、さらにレポートの書き方についてきめ細かく指導したことが評価されたものと考えられる。以上の結果から、学生の能力やニーズに応じた適切な授業を概ね実施できたと判断している。今後も、学生が楽しみながら座学で得た知識をより深く理解できるよう、引き続き工夫を重ねていきたい。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	講義内容の理解を深めるため、適宜小テストを実施した。また、授業資料をWebclassに掲載し、学生の事後学習および欠席者の学習機会の確保を図った。成績不良者に対しては、追加レポートを課すとともに、マンツーマンで指導を行い、理解の深化を支援した。実験においては、各回ごとにレポート作成のポイントや書き方について、配布資料を用いて解説した。さらに、授業後の個別相談にも対応し、丁寧な指導に努めた。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>座学</p> <p>(令和7年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業開始時に前回授業の簡単な復や演習問題を行うことで、授業内容の定着を図ることができた。 教科書に載っていない情報や知識も積極的に講義した。授業に対する興味を高め、理解度も深めることができた。 講義内容の自主学習に役立てるため、Webclassに講義資料や確認問題の解説、小テストの解説をアップした。多くの学生が閲覧しており、授業内容の復習に有益であったと考えている。 小テストを複数回実施するとともに、小テストの点数が悪い場合はレポート提出を義務付けた。授業内容の理解を深めるのに役立ったとの意見を幾つかもっている。 <p>(令和8年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年度の授業アンケートやテストの結果をもとに、学生の苦手な箇所の把握を行い授業に反映させる。 講義内容の理解を深めることができるように、授業毎の確認問題の充実を図る。 <p>実験：</p> <p>(令和7年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和6年度の結果を踏まえ、実験内容の見直しや充実を図った。これにより、学生の実験への興味をより高めることができた。 実験の待ち時間や終了時に、PowerPointを用いて関連分野の解説を行った。解説と実験の相乗効果により、学生の理解をより深めることができた。 レポートの書き方に悩む学生が多かったため、各実験ごとに、レポートのポイントや書き方を配布資料を用いて解説した。授業時間外に相談に来た学生にも丁寧に説明した。レポートの書き方の習熟に役立った。 <p>(令和8年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生の理解度を随時チェックしながら、適切な対応(追加資料配布等)をとる。 座学では味わえない感動が得られるように実験内容を工夫したい。

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：柴山一幸

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成するためには日本には叶わない。何事も円の中心にいてその円を外から見るとは容易ではない。半径10kmの中で生きて人間に正しい品性を聞いてみても、半径10kmの中で起こることでしか物事を判断できない。そこから離れて円を見れば、その周囲の車輪を見れば、どのような形でもどのような周期で、どのような色で周っているか容易に見当がつく。その車輪が破れ果て、朽ち果てて、減りゆく姿を見ながら解決策を探ることが必要だが、円の中心で今までのものを守っているだけではその車輪と一緒に朽ち果てていくだけだ。残念ながら日本人の90%はそんな人たちだろう。つまりほとんど無理な仕事だが、それを学生に気づかせてやろうというのが私の仕事でありポリシーだ。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：MIDI制作演習Ⅰ	先ほどの教育理念との科目との関連性はまったくない。音符も分からない学生に音楽の基本を教え、最終的にはおまかな譜面読みが出来る能力と、打ち込み(サウンドプログラミング)の基礎をガレージバンドというアプリケーションを通して指導する講義だ。課題曲に私のオリジナル楽曲を使用しているので、作曲家としての私の音楽活動と教育活動が融合している科目かもしれない。
2.教育活動や教育業績 科目名②：MIDI制作演習Ⅱ	この講義も教育理念との関連性はない。作曲は和音、メロディ、リズムそれらを組み合わせて新しい音楽を作る。その基本を教えている。基本を教えればすぐさま反応する学生もいれば、なかなか本領発揮できない学生もいる。これらは学生の資質にも影響される。クリエイティブの中心にはセンスがある。これらを簡単にセンスで片づけてはいけないが、センスのある学生はこの科目を受けなくても素晴らしい音楽制作ができるだろう。この講義はむしろその反対にいる学生たちのためにあるものだと思う。
3.教育活動や教育業績 科目名③：サウンドクリエーション	良く作曲された音楽も、編曲(アレンジ)や、ミックスダウンによってその終末は形を変えていく。その整えを行うのがこの科目の目的だ。ということでMIDI制作演習Ⅱのようなそれぞれの学生の資質に依るものより、より客観的な判断や見識が必要な科目である。作曲が不得意でもミックスダウンが得意だという学生は本領発揮できるだろう。私の音楽制作活動を振り返ってもこの科目の比重は大きい。
4.教育活動や教育業績 科目名④：基礎演習、専門演習、卒業論文	本来であればこの科目で私の教育理念が発揮されるべきである。ただそう簡単にもっていない。様々な理由があるが学生との距離に問題があるのだろう。今の時代容易に近づくことは時に厳禁で学生の本意を探るにも一定の距離を保たなければいけない。これが問題だ。それぞれの役割のによって様々な意見がある。もう少しだけ近づいて彼たちの本音を探ってみたいものだ。お互いの口臭に気をつけながら。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①:	教育理念とは関係ない、音楽の基礎を教えるだけのものだから、私与えた課題をなるべく理解してもらってそれをコンピュータに落とし込めばいい科目だ。もともと音楽教育をどのくらい受けてきたかの差異がそのまま講義に反映される場合もあれば、そうでない場合もある。学生からの評価はおおむね評判で、何も音楽の知識がなかった者が15回の講義のあと、譜面も読めてサウンドプログラミングもできるようになるわけだからこんなに面白い講義はないと思う。ただそこに興味のある学生に限っての話だ。元々音楽に興味がない学生が受けても最終的にその達成感を得るのは難しいかもしれない。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②:	この科目は出来る学生と不得意な学生との差がもっとも出る科目かもしれない。どちらにも対応するような題材を与えているが、一方で簡単すぎてクリエイティブではないという意見があれば、一方で難しすぎてつまらないという意見もある。名古屋文理大学情報メディア学部が素晴らしい面があるとすれば、これは逆の側面だ。様々なものに少しづつ興味がある者と、一つか二つのものに特に興味がある者、この2タイプの学生によって評価ははっきり分かれるからだ。簡単に言うと音大や音楽専門学校への進学を目指していた学生と、情報の専門家になりたい学生、この2タイプを同時に募集しているわけだからこのようなことが起きることは容易に想像がつく。基本的に私は情報メディア学部のこのような素晴らしい面の方に賛成だが、ただ私みたいな偏った人間には時に難しい時もある。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③:	一人のボカロ好きな学生からコテンパンに叩かれた。先生の好みが出過ぎな科目だと。確かにそうかもしれない。ボカロが好きすぎる学生はこの講義を取るのを控えたほうが良いかもしれない。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④:	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	私は研究者であり表現者でもある。同時にこの二つのことをしていかなければならない。簡単に見えて意外に困難な作業だ。この二つを達成するための頭の中身は実は逆だったりする。考えをまとめ上げて結果を報告しなければいけないことが研究者には必要だし、時にすべてを忘れ去って、時にそれを意図的に新しい1ページから取り組まなければいけない姿勢が表現者にとっては必ず必要だからだ。その折り合いをその都度つけながら教育と真摯に向き合っているつもりだ。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>2025年7月北欧でアニメ、マンガ、ゲームにおいて一番大きなイベント「NärCon Sommar 2025」にパフォーマーとして出演、スウェーデン・リンシェーピングで開催される。大喝采を受ける。11月イギリスで一番大規模な日本イベント「Hyper Japan」にパフォーマーとして出演、イギリスマンチェスターで開催される。このイベントでは文理学生の作成した動画も演奏中、スクリーンで流され、そちら含め大きな評判を呼んだ。ブルースプリングスティーンやブライアン・アダムスのホールツアーでオープニングアクトとしてブックイングされるほどの実力の持ち主、イギリスリバプールのアーティストAli nHornと国際的なコラボレーションプロジェクト「Any Joy?」を結成、2025年中にシングルを2枚Spotify、Apple Musicなどのストリーミングサービスで発表。イギリス国営放送局BBC Music Introductionにおいて「Any Joy?」が取り上げられバンドのプロフィールと楽曲が紹介される。2026年7月、1st Album「Sweet Nothing」をレコードアナログ盤として発表予定。日本は東京、大阪、名古屋、京都、長野、新潟でツアー、その後ロンドン、リバプールなどでUKツアーを行う。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： 情報メディア学科

職位： 教授

氏名： 周 欣欣

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識と技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識と技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザ向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

誠実な研究態度と正しい学習方法を身に付けさせ、将来社会に貢献できる人材を育てます。

一人一人の学生を大切に、学力の高い学生だけでなく、そうでない学生も成長できるよう努力します。

自身の利益と学生の利益が衝突する場合は、学生の利益を優先します。

初心者立場に立ち、学生に寄り添い、役立つ授業を提供するよう努めます。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①: コンピュータグラフィックス基礎	令和7年度前期授業では、2年生の「CG基礎」3コマ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、卒業演習Ⅰ、大学院概論と健康情報学演習Ⅰ、計8コマを担当しました。 CG基礎の授業では、2年生に対して実習を通じて3DCGの原理を紹介し、SketchUPとBlenderの基礎機能を用いたCG作成方法を教えました。 Blenderはオープンソースの3DCGソフトウェアであり、学科の教育予算を大幅に削減できました。初心者にも学びやすく、教育効果が高かったです。 教材を作成し、予習復習ができるようにWebClassにアップロードしました。
2.教育活動や教育業績 科目名②:	令和7年度後期授業では、2年生の「CG演習」3コマ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、卒業演習Ⅱの計6コマを担当しました。後期の「CG演習」では、Blenderを使用してCGの作成方法（応用編）を紹介しました。学生は前期に続き、Blenderを使って3Dモデリング、レンダリング、ライティング、アニメーションを学びました。市販教科書を利用し、WebClassで毎回の要点などを配布しました。
3.教育活動や教育業績 科目名③:基礎演習	基礎演習Ⅰでは、シンプルで分かりやすいプログラミング言語Processingを用いて、メディアアートを制作しながらプログラミングの基本を学生に指導しました。 基礎演習Ⅱでは、幅広い用途に活用できるプログラミング言語Pythonの使い方（画像処理、機械学習など様々なライブラリ）を学生に指導しました。 ゼミの学生からは、ゼミでの学習が役に立ったという評価をいただきました。
4.教育活動や教育業績 科目名④:専門演習と卒業研究	専門演習と卒業演習では、以下の内容を指導しました。 ・Unityの使い方やC#の基本 ・Unityを用いた脳トレアプリ開発、 ・Unityを用いたバーチャル美術館の制作 ・AI分析を活用した食事管理支援アプリケーションの開発

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名①: コンピュータグラフィックス基礎</p>	<p>前期のCG基礎の学生アンケートの結果、授業理解度、目標達成度、満足度（平均値）は、それぞれ 木2：3.78(95点)、金1：3.81(95点)、金2：3.80(95点) 木2：3.74(94点)、金1：3.75(94点)、金2：3.80(95点) 木2：3.78(95点)、金1：3.81(95点)、金2：3.90(98点)</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名②: コンピュータグラフィックス演習</p>	<p>後期のCG演習の授業評価の集計結果では、三つのクラスにおける理解度の平均値は3.59(90点)、目標達成度の平均値は3.63(91点)、満足度の平均値は3.72(93点)でした。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名③:基礎演習と健康情報学演習I</p>	<p>演習につき、授業評価アンケートを取りませんでした。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名④:専門演習と卒業研究</p>	<p>演習につき、授業評価アンケートを取りませんでした。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業アンケート、アクティブラーニング、学会発表を行いました。</p>
--------------------------------	---------------------------------------

○令和7年度の成果・教育業績、令和7年度の目標

<p>令和7年度の成果・教育業績として、指導した13名の卒業研究の学生が無事に卒業し、大学院の学生にも適切な指導を行い、授業内容を確立しました。今現在学会発表2件、研究論文1篇、学会誌作品二つを投稿できました。</p> <p>令和8年度の目標は、指導している大学院生と現在の専門演習の学生が良い成績で卒業できることです。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：関 豪

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養や食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

立学の精神を念頭に置き、特に健康と運動の観点から学生へアプローチし、充実した学生生活を4年間過ごせるようサポートする。
学科のディプロマ・ポリシーにもある人間力を高めることを目指すため、学生らが主体的に課題に取り組み、解決に導くことができるような教育を心がけている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：スポーツ科学	生涯健康な生活を営むために、体力の維持・増進を目標とした運動の実践および身体運動のメカニズムを理解できるようにする。 アクティブラーニングとして、講義に対する質問、感想、要望等をB6程度の用紙に記載してもらい、講義終了時に毎回提出させている。質問、感想、要望に対して、次回の講義にてフィードバックしている。また、パワーポイントおよび資料の提示に加え、映像を視聴させるなど工夫を凝らしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：スポーツⅠ・Ⅱ	生涯健康な生活を営むために、スポーツ（運動）を活用することが多々見受けられる。 運動実践は各自の体力および基礎能力を把握して取り組む必要があるため、体力の維持・増進および熱中症予防など身体への理解を深めさせる。 また、種目のパフォーマンスの向上のほか、グループワークを通じて仲間づくりおよび協調性を身に付けさせる。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：スポーツ科学</p>	<p>スポーツ科学：理解度 3.72、満足度 3.8 (2コマ平均) 学生らの理解度、満足度は昨年と比べほぼ同じ評価であった。 パワーポイントのスライドの文字、配布資料については様々な指摘があり、次年度に向けさらなる改善を心がける。 受講者数は昨年度とほぼ同等、2コマとも静かな環境を維持することができた。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：スポーツⅠ・Ⅱ</p>	<p>スポーツⅠ：理解度 3.87、満足度 3.884 (4コマ平均) スポーツⅡ：理解度 3.875、満足度 3.87 (4コマ平均) 前後期とも学生らの理解度、満足度も非常に高く、昨年と比べほぼ同じ評価であった。 熱中症等の事故を防ぐため、特に休息および水分補給に配慮した。学生からは空調など施設面の要望も多く、事故を未然に防ぐためにも設置は必要である。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>過去の授業評価アンケートの意見を反映し、令和5年度よりパワーポイントで提示した内容を記述式資料として配布（一部WebClassにもアップ）している。 概ね学生からの評判はいいが、印刷の品質、記述スペースを大きくして欲しいなどの指摘があるため今後さらなる資料改善に努める。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>スポーツⅠ・Ⅱの授業評価は、昨年度とほぼ変わらず非常に高い結果を得ることができた。引き続き事故等がないように努めるが、学生からの意見にもあるよう空調等の設置は必要である。他大学には概ね設置されつつあり、事故を未然に防ぎ、学生らの満足度をさらに高めるためにも検討いただきたい。 スポーツ科学においても昨年度とほぼ変わらない結果であり一定の評価は得られている。令和5年度より資料の配布およびWebclassの活用など新たな取り組みを行ったが、より良いものへと改善に努める。 また、学生へ提示する新たな資料の収集に努める。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：准教授

氏名：高橋 圭

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私がこれまで学んできたことや体験したこと、今学んでいることなどを通して、学ぶ楽しさや他分野・他職種との連携の重要性・多角的な視点、学生の将来の可能性の幅を広げることを軸にして教育に取り組むたいと考えている。本学学生には勉強する経験や習慣がない子が一定数いるが、学ぶことで視野が広がる経験をしたり分らなかつたことが分かるようになる楽しさを知ること、主体的に課題解決に向かったり、学問を通して技術や知識を磨くことにつながると考えているためそのように教育をしようと考えている。

担当する応用栄養学は色々な科目とも関連し、健康の維持・増進や疾病の予防について学ぶため、他科目との関連付けを行いながら実施している。同時に臨地実習や卒業後の社会での実践的な能力を身に付けさせるため、学んでいる知識の活用方法や例などもなるべく入れるようにしている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：ライフステージ栄養学Ⅰ	栄養管理の流れ、食事調査方法、身体計測や血液検査内容、体重管理、1日の栄養量の基準についての内容について1年生後期に講義をしている。これらの内容は2年生以降の病態や臨床・応用系科目の基礎になる部分であるため、関連付けたり例を出しながら説明するようにしている。特に体重管理の部分では、体格指数（BMI）や標準体重などの計算方法を説明するが、計算をしなくてもおおよそのBMIがイメージできるようワークを少し行ったり、体重の種類（標準体重、目標体重、現体重など）の使い分けなど実践をイメージしたことも取り入れるようにしている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：ライフステージ栄養学実習	調乳や離乳食の作成、対象者に合わせた栄養アセスメントと献立作成・調理実習などの演習を行っている。座学で学んだことを体験してもらうことも行っているが、3年前期科目であり臨地実習に行く前であるため、今まで学んできたことの振り返りなども取り入れながら、それらを活用できるような演習（献立の立て方のポイントやアセスメントのコツ、生活習慣病などと栄養の関係などのワーク）を行うよう努めている。栄養アセスメントおよび栄養計画の内容については、なるべく色々な視点を持つるようにアドバイスしながら演習を行っている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：臨地実習指導	3年生前期科目で臨地実習とは、言葉使い・メールの書き方、服装、実習ノートやお礼状の書き方などについての講義、臨地実習ⅠとⅡそれぞれのポイントについての演習、現場の管理栄養士の先生方からの各施設での栄養士の役割についての講演などを実施している。オムニバス形式ではあるが、学生が社会人・文理大学の学生・実習生としての責任や品性について自覚できるように努めている。また、各現場でのしごとについてイメージできるように取り組んでいる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：臨地実習	実習前の自主課題は、学生1人1人に実習での目的意識をもたす為に実習前に行わせている。自主課題は学生自身が病院で主体的に学びたい内容を考え、それに対して目的、方法、事前学習を作成する。できる限りその内容を選んだ理由や学びたい理由を聞き、その内容に合わせて質問内容をブラッシュアップするようにしている。1つでも多くのことを学べるように方法の内容や周辺領域についての説明や他に見てきた方が良い内容についても学生に話をしている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：ライフステージ栄養学Ⅰ	ライフステージⅠは検査数値や栄養素の摂取すべき基準値についての内容であるため、1年生にとっては難しめの内容にはなっている。それでも理解度は85%、満足度は97%の学生が4段階中「3」以上をつけているので、一定の評価は得られているかと考える。自由記述でも「聞き取りやすい」「スライドの大事な所がまとめられてわかりやすい」「図などの説明がわかりやすい」などのコメントがあった。しかし、成績評価を国家試験を踏まえて定期試験の1回勝負にしており、再試験者の数が多くなっている。理解だけでなく暗記する部分も国家試験には必要であるため、きちんと定期試験に向けて内容を覚えられるようにサポートしたい。また、さらに理解度を上げることやアウトプットの方法を考えたい。webclassに挙げている資料を印刷してほしいとの意見もあるが、予習のためにも現時点では行わない予定である。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：ライフステージ栄養学Ⅱ	ライフステージ栄養学Ⅱについて、理解度が5段階中「4」と「3」で100%であった。定期試験でも点数がとれており、必要な部分は理解と暗記もできており、ある程度信頼できる数値だと考えられる。満足度も4段階中「4」と「3」で96.5%であった。スライドの示し方などは特に例年と変わらずに実施したつもりであったが、良い意見が多かった。「説明が丁寧でわかりやすい」「他科目とのつながりがある部分のわかりやすさで理解できた」という意見もあったので、継続して学生が理解しやすいように努めていきたい。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：ライフステージ栄養学Ⅲ	ライフステージ栄養学Ⅲについては両クラス合わせて、理解度および満足度が4段階中「3」以上の学生が93%であった。自由記述で「代謝経路の図がわかりやすかった」「知識の定着につながった」「ホワイトボードに図などで説明していたのでわかりやすかった」との意見があった。今後も、国家試験にむけての知識だけでなく、臨地実習でも生かされるように授業を行ってきたい。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：ライフステージ栄養学実習	ライフステージ栄養学実習について、特に昨年度と内容ややり方に変化はつけていないが、理解度と満足度は2名を除き4段階中「4」または「3」のみであった。助手の先生のサポートや学生が実習内の意義や目的についてきちんと理解してくれたからであったと思う。授業内容に関しても、臨地実習が差し迫っているため、献立作成や栄養管理について今までに習っているはずの基礎的な内容も入れ、なるべく色々な知識を整理・統合できるようにしているが、ワンパターンの内容にならないようしているため継続して行いたい。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケートが実施されているため、その内容を見ながら改善できるような内容は取り入れられるようにした。 ・臨地実習指導はオムニバス形式で複数の先生で担当しているが、他の先生の担当回も参加し、学生へ伝えている内容を踏まえながら自分の担当回でもその屋いようを組み込みながら行うようにした。 ・外部のオンラインセミナーなどに参加し知識を増やし、自身の授業にも取り入れたり、自分の担当科目との関連性を説明した。 ・学内で実施されているFD・SDにも参加した。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度の単独科目はライフステージ栄養学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、ライフステージ栄養学実習をそれぞれ2クラス、卒業演習Ⅰ・Ⅱを担当し、オムニバス形式の科目は臨地実習指導、教職実践演習(栄養教諭)、健康栄養学特論Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、総合演習Ⅰ・Ⅱを担当し、その他学外での実習科目として臨地実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、栄養教育実習(教職)も担当した。</p> <p>臨地実習では14施設34人、教育実習では1人に対して、実習先で1つでも多くのことを学べるように、生活指導なども含めた事前・事後の指導を行った。</p> <p>令和8年度も担当科目について学生の理解度が上がるよう努めたい。また、座学では学生が自主的に学べるように、臨地実習の指導では実習直前の課題の駆け込みをせず余裕をもって取り組むように仕向けられるよう努めたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：

フードビジネス学科

職位：

助教

氏名：

竹内 陽介

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

本学では主に社会学、社会調査士資格科目を担当している。これらの科目は食と情報に重点を置く本学において必修ではないものの、学生が生きる現代社会の成り立ちや諸課題を実証的に把握し、行動する上で重要な知識および技法を教授する科目である。

社会学は人々の意識や行為、集合行為に着目して、社会の様々な領域を分析する学問であり、社会調査とは社会学の実証的研究法である。これらの授業が学生に教授する知識は、ディプロマ・ポリシーにおける「社会への関心」の涵養、あるいは社会の「課題発見力」と強く関連する。例えば国内の食糧自給の要である農家が抱える諸問題の検討や、コロナ禍で露見した飲食店経営のある種の脆弱性など、食に関わる領域においてもフィールドワークや統計調査を駆使して現状を分析し、課題を発見することができる。社会学や社会調査法はそうした資質の基礎を養うものである。

社会学は「正しいこと」や「こうすべきである」ということを言うための学問ではない。それらは倫理観や価値観の問題である。社会学はなぜそのような事実が構成されているのかを、実証的に探求して、そのプロセスや帰結を説明する学問である。そうした態度の涵養に寄与する教育を本学において実践している。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：社会学	本講義では過去と現在の比較の一つのテーマにしている。主に家族、働き方、地域社会という、社会を分析する基本的な視座を軸に据えて、なぜそのような変化が起きたのかを、受講生に投げかけ、考えさせたり簡単な意見発表をさせたりしながら講義を進めている。例えば昨社会問題化している「若年層の出生率の低下」は、若いカUPLEや家族の何が変化したことにより生じているのか。受講生はまず自分で考える形で「仮説」を構築し、教員は後にそれをデータを示しながら解説していく。さらにその解説は絶対的な答えではなく、現実には変化していること、学生の示す見解こそが社会の一部を構成していることを述べる。以上が社会に対する「なぜ？」を涵養するための実践の一部である。
2.教育活動や教育業績 科目名②：社会調査入門	本講義は社会調査士資格の取得に必要な受講科目<A科目>である。1年生前期から受講することが予定されている本講義では、社会調査の各種方法について、具体例を参照しながら学ぶ。例えば、アンケートデータを示しながら、それを学生に読み解いてもらい、なぜそのような結果になるのか推測してもらったり、自分であればどのように質問するのかを考えたりする。あるいは友人を相手にインタビューしてもらい、メモを元にその内容を報告してもらったりである。こうした実践を通して、人々から情報を入手し、分析する社会調査法を扱う感覚を養っている。こうした能力はまた顧客ヒアリング等を含め、マーケティングリサーチに通ずるものであり、本学部の理念に沿うものである。
3.教育活動や教育業績 科目名③：社会調査方法	本講義は社会調査士資格の取得に必要な受講科目の2科目<B科目>にあたる。内容は主に量的調査の方法に関するものであり、アンケートを理解する上で重要な概念の説明から始まり、適宜テーマや問い、仮説を立てる演習を差し挟みながら、個別に関心のあるテーマのアンケート作成に着手する。学期末にはそれぞれの受講生が作成したアンケートを提出し、教員がそれに対してフィードバックを行う。アンケートは特定の地域や社会集団の一般的傾向や偏りを理解する上で役立つ社会調査の手法であり、自身が立てた問い/仮説を検証するために用いる。そして結果を受けて別の仕事や施策に活かすものである。実際にアンケートを配布・回収・入力・分析するところまでは完結できないが、自ら問いを立てて検証する手続きを理解し、それを反映したアンケート作成をすることは課題解決の思考学習となる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：フィールドスタディー	本講義はフードビジネス学科における<フードビジネスマイスター>取得の必須科目となっている。実際にいくつかのリサーチ方法を体験しながら学習する演習科目であり、主には資料収集とドキュメント分析、およびインタビューを実施している。社会調査士科目は基本的には座学から出発して、断片的に演習課題をこなしながらその方法を理解する形で構成されているが、本講義はまず興味のあるテーマについてインターネットや図書館を使用して調べ、データを集めること、あるいは自身の関心を言語化しながら取材の際の質問を考えたり、実際にインタビューした後の記録を文字化して分析したりという実践に重きを置いている。こうした学習を通じてリサーチを立案すること、および自身の主観的な印象ではなくエビデンスに基づいて検討する能力を身につけている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：社会学</p>	<p>授業アンケートにて学生から評価をされているポイントは例年通りであるが、主にコメント返信や授業ない課題に関わる部分がより強調されていたと思われる。 本講義では毎回のコメントシートで感想および質問を提出するように求めており、次回講義で回答するようにしている。また授業中には学生に講義内容と関連する課題を課しており、その場で回答を評価したり、アンケート集計を行ってコメントをするなどしている。こうした双方向性の確保をする工夫が評価されているポイントであり、次年度以降も継続していく予定である。他方で受講者数の人数が多い座学形式の講義では課題回答時以外に手を動かす機会が少ないため、集中力が散漫になりがちでもある。この点を踏まえ、手を動かして考えられる資料の作成および配布を検討している。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：社会調査入門</p>	<p>アンケートでは昨年よりも全体的にポジティブな評価がされている。特に授業理解度の数値が3.41から3.55と改善されており、その他も全体的に数値が上がっている。評価が相対的に低いのは改善された授業理解を除けば自主学習に関する部分だが、これは本講義が基本的な予習・復習、分からない単語のリサーチ以外の課題を求めているためである。この点に関しては、1年前期の選択・専門科目としては妥当であろう。なお、本講義は昨年からの授業内容を大きく変更した。より分かりやすくするため、具体例と実践課題を増やしたのである。受講者は毎年変わるため単純比較はできないが、改善の結果は数値に反映されていると考えられる。次年度は引き続き具体的かつ実践的な内容を講義に盛り込んでいく。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：社会調査方法</p>	<p>受講人数が少なくアンケートの数量的な分析は困難だが、概ね良く評価されていると言える。昨年と同様、アンケート作成をゴールとして、主に量的調査について学習する科目だが、評価されているポイントは個別の進捗に応じたアドバイスを行う点である。テーマ設定、問いと仮説の構築から、質問文と選択肢の作成を行うが、その都度1人1人と対話しながら作成を進めている。少人数の授業ゆえに可能な取り組みである。また半期かけて学んできた内容を、最終的にアンケート作成の過程で振り返る授業構成となっており、その点も本授業の理解度評価を上げている要因と考えられる。次年度もこうした授業構成を継続していく。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：フィールドスタディー</p>	<p>今年度は前半に店舗観察と分析報告会、後半はアンケート作成と計量分析および報告会を実施した。アンケートでは全体的に高く評価されたが、特に1の「授業に積極的に出席し学ぶことができた」が3.88と最も高くなっている点が特徴的であった。社会調査士科目と違い、座学をせずにまづリサーチを実践してみる科目であり、必ずしも受けやすい授業ではないと思うが、受講学生の受講意欲は高かった。これは学生と教員、あるいは学生同士が話し合いながら分析や報告づくりを進められるような授業構成にしていたからだと考えられる。コミュニケーションの機会が豊富な実践学習であった点が評価のポイントであると考えて、次年度以降も継続していく。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>講義ではコメントシートの提出を求め、学生のリアクションや疑問を確認する媒体としている。社会学の授業では感想や質問を授業毎に取り上げて解説する形で授業が始まるため、学生は他の学生の考えを知り、疑問を解消するとともに、前回講義を一部復習しつつ講義に望むことができる。また講義内ではWeb Classの様々な機能を活用している。アンケート機能を用いて教室全体の意見を可視化することや、チャット機能や掲示板機能で意見を出し合い、それをもとに議論を実施したり、フィードバックをしたりしている。またこうした学生の反応を見ながら講義内容の調整・見直しを実施している。演習系の科目は学生と対話しながら進めているため、十分なフィードバックの機会が確保されている。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度は昨年度から引き続き社会学および社会調査士資格科目を担当した。今年度は授業時間中に学生が自ら考える機会を増やし、教員からフィードバックする形で学習が進められるように工夫を行うことを目標としていた。主に社会調査士資格科目とフィールドスタディーで上記を実践したが、この成果は学生のポジティブな受講態度や授業評価に現れていたと考える。ただしこうした工夫は（ここでは評価をしていないゼミにおいて最も顕著だが）学生と対話可能な規模だからこそ十分に可能なものとなっていたのであり、授業者が多い全学教育の場では難しい。Web Classを用いた回答や意見の収集といった工夫を実施しているが、各学生が目目されている時間が少ないことに伴う限界が存在している。 次年度は基本的に上記した今年度の取り組みを継続していくが、受講者の多い座学講義において学生が手を動かして学べる機会を増やすことを予定している。これまでは課題回答とコメントシート作成以外は、何をメモしたり書いたりするかは受講生に任せていたが、板書をする・書いて学ぶ部分を増やす形で授業を実施していくということである。それから次年度は社会調査士資格科目のうち、質的調査法と社会調査実習が新たに開講される予定である。いずれも専門的かつ実践的な科目という位置づけであるため、受講者の能動的な学習を引き出すことのできる授業構成が求められている。とりわけ資格取得に際して必須となる調査実習報告書の作成は学生にかかる負担が大きく、学生の意欲と成果が密接に関連するものである。課題内容の明確化、適切なフィードバックを心がけ、受講生が楽しく学べるよう努める。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：准教授

氏名：竹尾 淳

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

社会で信頼される人物を育成できるよう、下記に注力した全人教育を実施する：
・コミュニケーションを通じた信頼関係の構築
・周りへの影響に配慮できるよう、社会人としての倫理観の育成
・課題発見・解決・社会還元の一連の流れを遂行できる能力育成
・実社会の課題に関心を持てるよう、身近で最近の話題・事例の提示
・課題解決の幅を広げるための知識獲得の習慣化
・手を動かすことを重視し、粘り強く試行錯誤を繰り返す忍耐力の育成

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①： プログラム演習Ⅰ	プログラミングの基礎としてC言語を扱い、コーディングの基礎を習得しやすいようにポイントを絞って説明するよう心掛けた。演習時間を長くとり、解説はポイントのみを示すことにより、自身で考えられるようにした。演習中はSAと教室を回り、受講生に声を掛けつつ質問しやすい雰囲気となるよう心掛けた。自分事として楽しんで履修できるよう、冬期休暇にはゲームに関する課題を提示し、最終回ではビンゴゲームを実施した。
2.教育活動や教育業績 科目名②： コンピュータネットワークⅠ・Ⅱ	Iではコンピュータとコンピュータネットワークの動作原理を扱っている。現在ではコンピュータおよびコンピュータネットワークの動作はブラックボックス化しているため、その動作原理に興味を持ってもらえるよう歴史的事項を紹介しつつ、解説をした。論理演算などは、実際に手を動かして計算を行ったり、論理構成図を作成したりと、実感が持てるよう工夫した。IIではインフラエンジニアで必要とされるUNIX（Linux）の使い方とネットワーク運用を扱っている。自宅でも学習できるよう、iPadでLinuxホストを操作する形態とした。企業勤務経験を活かし、現場での実情や、必要となるスキルの獲得を行った。
3.教育活動や教育業績 科目名③： 基礎演習	ゼミ形式のPBL演習科目として運用した。興味分野の調査、実施計画の構築、結果の発表の一連の流れを解説し、実際に活動を行った。文献調査発表を毎週行うことにより文章力、表現力の継続的な育成を行った。各自の成果を発表し、ゼミ内でディスカッションを促した。話し合える雰囲気や大切にし、自由なディスカッションができるよう心掛けている。
4.教育活動や教育業績 科目名④： 情報メディア特別演習	「健康情報プロジェクト」を引き継ぎ、運用している。連携病院の専門職スタッフと一緒に体操動画を作成したり、病院のイベントに参加したりしている。この活動とおし、外部の方々とのコミュニケーションを学び、協働する能力が身に付くよう指導している。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①: プログラム演習Ⅰ</p>	<p>今年度の評価では、演習の時間を長くとしたこと、考える時間と解説の時間が設けられていたことが良い点としてあげられた。持ち帰りの課題が少ないことも好評であった。SAの手厚いサポートに助けられた受講生も多かった。基本事項の説明は何度も繰り返したが、定着のために有効であった。授業のスピードについてはちょうどよいという意見ともっと遅くしてほしいという両方の意見があったため、演習の進捗を確認しつつ、柔軟に対応していきたい。また、演習が進んでいない学生には、さらに積極的に声掛けをするなど、苦手なままで終わらない体制を構築したい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②: コンピュータネットワークⅠ</p>	<p>座学中心の科目であったが、話し方や聞き取りやすさ、授業の進み方は比較的良好な評価であった。また、レスポンスカード（毎授業終了後提出のミニレポート）に寄せられた質問に対し、次の講義で回答する形式は好評であった。一方、理解や目標達成に難を感じる受講生が目立ち、改善の余地がある。授業評価アンケートで難易度が高い指摘があったため、今後は平易化しつつ丁寧な説明を心掛ける。課題の負担感もあるため、小さな課題を毎回出題するスタイルに切り替えていく。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③: コンピュータネットワークⅡ</p>	<p>本科目においても、レスポンスカードの記入が復習を兼ね、質問しやすい雰囲気であった点が好評であった。一方、難易度が高く、一部の受講生には受講する意義すら分からない状態であった。授業展開が早く感じる学生もいるため、内容の平易化、少量化を試みたい。また、座学が中心であるが、演習が多い科目のため、演習の際にはプロジェクトやモニタで小さい文字が見づらい指摘があった。資料提示に工夫したい。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④:</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業毎の理解度アンケート、質問受付の実施 ・授業アンケートの実施 ・情報メディア学科FDワーキンググループ打合せ ・他大学のFD大会（3回）、Niiの大学シンポジウムに参加・聴講し、AIを用いた教育等の情報収集
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>本学に着任後、すべての科目を初めて担当した。各科目の成果・教育業績と来年度の目標は次のとおりである。</p> <p>【プログラム演習Ⅰ】 演習と解説をバランスよく行い、質問しやすい雰囲気を作成することができた。得意な学生には、さらに学習を進められるよう、オンライン副教材（paiza）の導入も行った。来年度は各受講者の進捗に気を配り、苦手な受講生には重点的なサポートをしつつ、得意な受講生には副教材でさらに学習を進められるよう運用する。</p> <p>【コンピュータネットワークⅠ】 受講者の質問にフィードバックするなど、興味を持ってもらえるよう工夫した。来年度は、演習項目を増やすとともに、内容の削減、平易化を目指す。</p> <p>【コンピュータネットワークⅡ】 インフラエンジニア想定し、Linuxサーバの基本的な扱いができるよう運用した。来年度は演習が円滑に進められるような工夫を来なう。また、情報システムコース以外の受講生にも興味を持ってもらえるよう、分野の幅広い実例を交えて解説したい。</p> <p>【基礎演習Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ】 ゼミ形式の構築に注力し、受講者どうしが高めあえる環境を構築した。可能な限り学生に問題発見から手掛けてもらい、自分事として解決を目指すよう指導する。</p> <p>【情報メディア特別演習】 連携先の機関と協働し、体操動画（ゆび体操 中級編）の完成、イベントでのお披露目を行うことができた。来年度は学生主体で活動できる環境を構築し、複数の案件をこなせるよう指導する。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：田近一郎

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

担当科目に共通する教育理念は、学生に①近年特に重要度を増した数理・データサイエンス・AI分野の知識体系・技術体系を身に付けていただき、②それらを新しいITシステムの社会実装に役立てていただくことである。具体的には、

①モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、社会インフラのための情報システムの制作・運用に当たり必要不可欠となっているデータサイエンス・AI技術を活用したプログラムの開発ができる情報活用・分析能力、創作能力等のスキルを持ったシステムエンジニアになっていただく、

②また、IT・情報システムの企画提案ができるために不可欠な①に関わる広範囲の知識体系をもとにした分析能力、課題解決能力等のスキルを備えた情報ストラテジストになっていただく、ことである。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：統計学	講義とデータを用いた計算実習 ・対面授業で、すべての講義資料とレポートを電子化しWebClassに配置した。 ・また学生が単独でも理解できることを目指し、内容のコアの部分を丁寧に解説し、それ以外の内容を精選した資料とした。 ・またレポートは計算の習熟や統計学の重要概念を把握するために、式やキーワードで計算過程の空欄を補充してもらった内容とした。
2.教育活動や教育業績 科目名②：アルゴリズムとデータ構造	講義とプログラム制作アプリ（「モバイルC」「piaza.iO」）を用いたプログラミング演習 ・対面授業で、すべての講義資料とレポートを電子化しWebClassに配置した。 ・学生が単独でも理解できることを目指し、内容のコアの部分を丁寧に解説し、それ以外の内容を精選した資料とした。またレポートはアルゴリズムの実装スキルの習熟のためのもの、アルゴリズムについての概念を把握するためにキーワードやプログラム文でプログラム中の空欄を補充するものを主とした。・iPadアプリ「モバイルC」「piaza.iO」を用いたプログラミング言語「Python」によるプログラミング演習。
3.教育活動や教育業績 科目名③：データサイエンス	講義とクラウドプログラミング開発環境（「Google Colab」）を用いたプログラミング演習および計算実習 ・対面授業で、すべての講義資料とレポートを電子化しWebClassに配置した。 ・学生の興味を引く題材を用いた解説、多変量解析で必須の考え方である散布図/単回帰直線グラフの作図など記入式プリントによる解説 ・Google Colab上での散布図の作成と相関係数の導出、単回帰分析、重回帰分析、ロジスティック回帰分析、因子分析などのPC演習 ・ベクトル・行列の掛け算や内積など統計の数学理論について詳しく解説し、計算実習をおこなった。
4.教育活動や教育業績 科目名④：知識情報学	講義とクラウドプログラミング開発環境（「Google Colab」）を用いたプログラミング実習 ・対面授業で、すべての講義資料とレポートを電子化しWebClassに配置した。 ・学生の興味を引く知的情報処理に関する記入式プリントによる解説に加え、Google Colab上でのマーケットバスケット解析、決定木解析、googleページランクなどのプログラミング演習。 ・進展の著しい自然言語処理についてword2vecによる文章の意味抽出のPC演習、BERT・GPTによるSNSデータの感情分析のPC演習。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：統計学	プリント・板書・モニタ提示の適切さが3.41~3.78 (R6: 3.49~3.69, R5: 3.47~3.82)、授業の進み方、課題の量の適切さが3.55~3.78 (R6: 3.61~3.65, R5: 3.53~3.76)、授業の理解度は3.41~3.56 (R6: 3.34~3.54, R5: 3.24~3.43)、積極的出席・履修目標の達成・満足度は3.52~3.78 (R6: 3.49~3.65, R5: 3.51~3.59)であった。各数値は理解度も含め概ね昨年度と同等であった。アルゴリズムとデータ構造同様に昨年度に引き続き内容に関する枝葉の部分を簡略化してプリントの体裁(余白が少くないこと)を改善しており、理解度の維持/少しの増加につながったと思われる。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：アルゴリズムとデータ構造	プリント・板書・モニタ提示の適切さが3.40~3.62 (R6: 3.49~3.73, R5: 3.22~3.79)、授業の進み方、課題の量の適切さは3.40~3.71 (R6: 3.40~3.64, R5: 3.39~3.63)、授業の理解度は3.33~3.52 (R6: 3.18~3.31, R5: 3.39~3.42)、積極的出席・履修目標の達成・満足度は3.27~3.62 (R6: 3.27~3.73, R5: 3.32~3.47)であり、理解度以外の各数値は概ね昨年度と同等であった。理解度について昨年度に引き続き内容に関する枝葉の部分を簡略化してプリントの体裁(余白が少くないこと)を改善し図を改善・増やしたことでその数値は昨年度より0.1高い結果となった。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：データサイエンス	プリント・板書モニタ提示の適切さが3.43~3.73 (昨年度3.58~3.74、一昨年度3.51~3.71)、授業の進み方、課題の量は3.33~3.73 (昨年度3.50~3.77、一昨年度3.59~3.66)であった。その結果、授業の理解度は3.24~3.40 (昨年度3.00~3.43、一昨年度3.18~3.29)、授業の(積極的出席・履修目標の達成・満足度)はそれぞれ3.14~3.47、3.33~3.53、3.38~3.73 (昨年度3.42~3.71、3.42~3.63、3.50~3.69、一昨年度3.35~3.51、3.18~3.54、3.29~3.49)であった。理解度は昨年度と同じか上昇した。履修目標の達成、満足度は昨年度に比べて同程度であった。授業理解度にGoogle Colab導入の効果が一定程度表れていると思われる。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：知識情報学	プリント・板書モニタ提示の適切さが3.61~3.91 (昨年度3.57~3.86、一昨年度3.30~3.60)、授業の進み方、課題の量は3.52~3.91 (昨年度3.65~3.86、一昨年度3.40~3.58)であった。その結果、授業の理解度は3.32~3.82 (昨年度3.48~3.50、一昨年度3.40~3.44)、授業の(積極的出席・履修目標の達成・満足度)はそれぞれ3.73~3.74、3.48~3.91、3.55~3.73 (昨年度3.39~3.64、3.57~3.64、3.52~3.71、一昨年度3.30~3.42、3.20~3.36、3.20~3.53)であり、理解度は昨年度に比べ平均値でやや上昇、履修目標の達成、満足度は昨年度同じかやや上昇した。授業理解度にはGoogle Colab導入と内容の精選の効果が表れていると思われる。

○授業改善のために行ったFDの取り組み(授業アンケート、オープンクラス、FD講習(学外含む)、学会活動、その他)

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価アンケート(統計学、アルゴリズムとデータ構造、知識情報学、データサイエンス)を実施した。 オンライン授業ツール「Teams」利用のための講習会に参加した。 学内の8月開催のFDフォーラム、3月開催のFDフォーラムに参加した。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度の成果：当該教員の専門分野であるデータサイエンス・特にAI分野は発展のスピードが速く知識の陳腐化も進みやすいためそれらの分野の知識を継続的にアップデートしている。そして、それらの知識をもとにしたデータサイエンス・AI関連授業(専門演習・卒業演習含む)における理論の説明方法やプログラミング演習の方法もまた継続して改善している。学生は、2年次・3年次に履修したアルゴリズムとデータ構造・データサイエンス・知識情報学の各科目で学修した知識を直接用いて「プロ野球の勝利に影響を与える要因の分析」「新聞記事画像の自動要約プログラムの作成」「ラーメン店に関するSNSデータの特徴分析」「戦略シミュレーションゲームの改良」「リアルタイム人流認識」等の優れた卒業研究をおこなっており、データサイエンス・AI技術を活用したプログラムの開発ができるためのスキルを身につけている。令和8年度の目標は以下の通りである。</p> <p>○統計学 数年前から高校数学Iのデータサイエンスを学んだ学生が入学しているが、同じことの繰り返しである等の意見は見受けられず、自由記述「初めて聞くようなことが多かったので楽しく取り組めた」「内容をなぜその考え方なのかという点から取り扱っていた点が良かった」等の自由記述から学生は「新鮮な内容の」授業科目として「統計学」を認識しているようだ。引き続き、高校の復習としての機能を保ちつつ、多変量解析を扱う2年次授業科目「データサイエンス」の基礎を固める汎用性の高い、実用性も兼ね備えたコンテンツを精選し、授業内容の向上をはかりたい。</p> <p>○アルゴリズムとデータ構造 「どのように処理されるのか仕組みを分かりやすく図に表していたのでとても分かりやすかった・7件」等の自由記述がある一方で「プリントをもう少し見やすくしてほしい」等の建設的意見があった。来年度は授業内容の精選だけでなくプリント資料のまとめ方・表記方法やプレゼンの改善等の方策をとり満足度向上に努めたい。また、コード生成AIによるアルゴリズムのh自然言語処理による記述からプログラムを生成させるためのプロンプト技法も含めたAI活用技術の修得を授業に組み込みたい。</p> <p>○知識情報学 文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」認定に沿って、引き続き機械学習/データマイニング/情報検索/自然言語処理/ディープラーニングに関連したGoogle ColabによるPC演習の拡充を進めたい。実際「実習のプログラムを見て実装方法についても学びを得た」等の意見に見られるようにプログラミング言語を使った実装を始める学生が見受けられるので学生自ら考える余地の大きいPythonプログラミング課題を増やすなど、より実践的な演習にする。この科目もプログラム生成のプロンプト技法も含めたAI活用技術を授業に組み込みたい。</p> <p>○データサイエンス 文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(応用基礎レベル)」認定に沿って、引き続き散布図/単回帰分析/重回帰分析/因子分析/対応分析/ロジスティック回帰分析に関連したGoogle ColabによるPC演習の拡充を進めたい。「映像制作をしているのであまり関係ないと思っていたが、どのテーマが人気なのか、その原因は何なのかを自分なりに分析できるようになるのは強みになる」と思いその考えを念頭において取り組んだ」との意見が見られるので強い問題意識を持っていた内容に拡充したい。特に大学院の授業内容に橋渡しできるように数理統計/機械学習の数学理論に関する内容(ベクトル・行列の掛け算や内積、固有値など)を増やし、Colab演習でもそのプログラムの背後にある数学理論を解説し理解度向上につなげる。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 教授

氏名： 田中 明子

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要とされる思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

世界に約7000あるといわれる言語の中からなぜ自分が母語について学び、第二言語として英語という言語を学んでいるのかを学生自身が考えるきっかけとなる講義・演習を行うことは、大学における英語教育の重要な役割の1つである。その役割を果たすための工夫の1つとして考えられるのは、講義・演習の中に学生が英語史や英語学の研究成果に触れることのできる機会を作り、それによって母語への気づきを促すことである。このような体験を通して学生が専門以外の科目の学びにも責任感を持って取り組む姿勢を身につけることができれば、大学での専門分野の学びもより豊かなものになると考えられる。同時に、大学における英語の講義は、学生が英語を使って自分の考えを明確に伝える力を身につけるための場としても重要な役割を担っている。その役割を果たすための工夫の1つとして考えられるのは、講義の中に学生がコミュニケーションの効果や意図を理解し適切に表現する能力を身につけるための実践的な活動を用意することである。このような活動を通して学生がグローバルな問題に関心を持つことができれば、それらの問題を解決したり他者と協働するためのコミュニケーション力を育むことができると考えられる。このような理念に基づき、英語の講義は継続的な英文作成に焦点を当て、フードビジネス学科の演習は商品名に観察される音象徴に焦点を当てる。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：プラクティカル・イングリッシュI、II、III、IV	英語の歴史、母語獲得と第二言語習得の違い、翻訳ツールの仕組みなどに関する講義を行う。基礎的な英語力を強化するための解説と実践指導を行い、すべての教材をWebClassに掲載し、講義の資料をWebClassで公開する。毎回提出される英文に対して個別の添削を行う。毎回提出される会話文に対して個別の練習を行う。
2.教育活動や教育業績 科目名②：フードビジネス・イングリッシュI、II	英語がフランス語から受けた影響やイギリスの食文化について、英語史の視点から講義を行う。専門的な英語力を強化するための解説と実践指導を行い、すべての教材をWebClassに掲載し、講義資料をWebClassで公開する。毎回提出される英文のレシビや企画書に対して個別の添削を行う。英語によるメニュー提案のプレゼンテーションの指導を行う。
3.教育活動や教育業績 科目名③：基礎演習I、II	音象徴について講義を行う。商品名調査の手法と、音声分析の手法を解説する。学生が自ら輪読会や討論会を運営できるよう事前打ち合わせを行う。アンケート調査および分析を指導する。共同の研究発表会と個別の終了報告論文執筆に向けた指導をする。福沢市図書館および名古屋市図書館での絵本の会の企画を指導する。
4.教育活動や教育業績 科目名④：フードビジネス学入門	予習課題として行なったWebClassアンケートをもとに、ヒトの言語の機能、英語の歴史、翻訳ツールの仕組みについて講義を行い、フードビジネス・イングリッシュを学ぶことの意義や心構えを解説する。知識の定着のための授業課題としてWebClassに教材を掲載する。復習課題としてレポートを課し、WebClassの機能を活用して、フィードバックを行う。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：プラクティカル・イングリッシュI、II、III、IV</p>	<p>前期、後期の通年で担当した4クラスは、後期科目の理解度の平均値が、履修者数が5人以下の選択科目の3.50と3.60、必修2クラスは3.68と3.76であった。必修の2クラス間に若干の差が認められたものの、学生たちが学習内容を理解できたと感じている様子がわかる。ただし、標準偏差からは、必修の2クラスのうちの1クラスで達成感にややばらつきがあることがうかがえ、受講態度や学習状況の多様性を反映している可能性がある。自由記述には授業内容や運営方法に対する肯定的な意見が寄せられた一方で、学生自身の取り組みに関しては「もっと努力すべきだった」「課題提出が遅れたことがあった」など、内省的な記述が目立った。理解が得られていることと併せ、学習過程を振り返る姿勢が形成されていると考えられる。全体として、授業の目標と成果は概ね達成されていると評価できるため、今後は学生自身に学習の達成感を持ってもらえるよう、フィードバック等を工夫したい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：フードビジネス・イングリッシュI、II</p>	<p>前期、後期の通年で担当した1クラスは、後期科目の理解度の平均値が3.80と高く、受講者全員が、熱心に努力を重ね、学習内容を理解できたと感じている様子がうかがえる。また全員が、シラバスに沿った授業がおこなわれ、板書等に役に立ち、授業の進み方が適切で、履修の目標が達成できたと回答した（平均値4.00）ことから、担当者の意図を丁寧にとらえ、さらに、学生自身が工夫を重ねて授業に取り組んでいたことがうかがえる。自由記述からは、フードビジネスの現場で使う英語が学べたことを肯定的に捉える意見があった一方で、学生自身の取り組みに関しては「すべての課題に取り組めなかった点を反省」するなど、内省的な記述があった。理解が得られ、十分に努力をした上で、自身の学習を振り返る姿勢が形成されていると考えられる。全体として、授業の目標と成果は概ね達成されていると評価できるため、今後は、学生自身の達成感を持ってもらえるよう、個別指導のタイミングを工夫したい。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：基礎演習I、II</p>	<p>授業評価アンケートなし。個人研究のための個別指導や、図書館での絵本の会のための個別朗読指導などの際に、ゼミ活動や研究の中で困っていることなどを聞き取った。授業時間外に熱心に質問に来る学生も多かったが、授業内・外の時間に、学生どうしが教え合う姿が見られたことは、学生が自発的にゼミ活動に取り組んだことの表れだと考えられる。共同研究をする際に、自分の作業が早く終わった学生が、積極的に他の学生の作業を手伝ったり、個人研究の中間発表の際に、他のゼミ生の研究設計に対して建設的な提案をしている様子から、姿勢も形成されていることがうかがえる。学生にとって、ゼミの中で行う個人研究と共同研究、学生たちが運営する絵本の会が、1つにつながる実感を得られるよう演習を構成することが今後の課題である。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：フードビジネス学入門</p>	<p>授業評価アンケートなし。オムニバス形式の授業の1回分を担当。予習課題と復習課題を課すことによって、講義の日の前後1週間ずつをWebClassを通した学生とコミュニケーションに充てた。復習課題とレポート課題への取り組みからは、興味を持って講義に臨む学生の姿がうかがえたが、WebClassのアンケートからは予習課題に取り組んでいなかったり、その日限りの取り組みとなる学生がいたことも明らかになった。今後も、15回の授業全体の中での担当回的位置付けを明確に伝え、担当授業回の中でレポート課題の指導ができるよう、講義の構成を修正することが今後の課題である。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>アンケート：毎回の個別英文添削と個別英会話練習の時間を利用して、学生から講義に対する希望や、講義に困難に感じる点を聞き取った。WebClassのアンケート機能を利用して、学生から演習に対する希望や、演習中に困難に感じる点を聞き取った。 FD講習（学外）：一般社団法人「ことばの教育」主催・共催の講演会、京都大学・南谷奉良氏主催「文系のための生成AI研究会」の講演会等に参加した。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度の教育方法の実践例：WebClassの機能を利用した教材の作成と掲載、音声付き授業資料のWebClass掲載、WebClassとiPadを活用した発音クリニックの実施。個別の英文添削、個別の英会話練習。英文レシビ発表会の実施。基礎演習終了報告論文のピアレポートの実施。稲沢市中央図書館、名古屋市中川図書館、山田図書館、北図書館での「英語で楽しむ絵本の会」「英語のおはなし会」実施、その事前準備指導。TOEIC IP 対策の実施。 令和8年度の目標：WebClassの機能を利用した予習復習教材の改良と、取り組みを促すための工夫の追加。WebClassの機能を利用した授業内教材の改良。WebClassに掲載する教材の一部について、対話型ツール等の活用検討。個別の英作文および英会話指導に対するWebClass上でのフィードバックの実践。英文メニュー発表会とピアレポートの実施。商品名と日本語音声に関する研究指導と、基礎演習終了報告論文のピアレポートの実施。絵本の会のための朗読、発声・発音指導の実施。TOEIC IP対策の実施。新たに担当するフードビジネス・イングリッシュIIIの教材改良と最終発表会の開催、そのピアレポートの実施。新たに開講されるAI基礎の教材改良と最終成果物上映会の開催、そのピアレポートの実施。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 助教

氏名： 谷口 泉

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

フードビジネスに必要な基礎知識を体系的に理解するとともに、実務に結び付く技能や実践力を段階的に身につけられるような教育を心がけています。知識を身につけるだけでなく、その背景にある根拠を踏まえて考え、実際に活用できる力を養うことを大切にしています。また、食の価値は味覚だけでなく、見た目などの視覚的な要素にも大きく影響されると考えています。料理は食べる前から評価が始まるため、色彩や配置、器、言葉といった表現を理解し、意図を持って伝える力の育成にも努めています。フードコーディネートの学びを通して、おいしさを整理して説明し、適切に表現できる力を育てることを目指しています。講義では、課題を把握・整理し、根拠に基づいて考える力や、相手に応じた伝え方を検討する力を養います。実習では、協働して取り組む姿勢とともに、自ら考え行動する力が身につくよう心がけています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①： フードコーディネート実習	本実習では、フードコーディネーターに求められるフードスタイリング技術について、基礎から応用までを段階的に習得することを目的とする。フードスタイリングの基本技術を体系的に学ぶことで、視覚的情報を通じて料理の魅力を適切に伝える力を養う。また、菓子、パン、麺、郷土料理、各国料理などのテーマごとに取り組むことで、それぞれの料理が持つ特徴を整理し、ジャンルに応じた表現方法を理解する。さらに、多様な題材を扱うことにより、状況に応じて適切な表現を選択できる実践的な対応力の習得を目指す。
2.教育活動や教育業績 科目名②： フードコーディネート論	本講義では、フードコーディネーター資格の取得に必要なとされる四分野（文化、科学、デザイン・アート、経済・経営）の基礎知識を体系的に学ぶ。各分野の内容を関連付けながら理解することで、食を多角的に捉える視点を養う。また、食品産業全般の構造や役割を踏まえ、商品開発や企画立案の考え方についても学修する。理論的知識の習得にとどまらず、実務を想定した事例を通して、実践に活かすことのできる判断力および応用力の育成を目指す。
3.教育活動や教育業績 科目名③： 応用フードコーディネート論	本講義では、「フードコーディネート論」で修得した基礎知識を発展させ、実践的な企画力の育成を目指す。内容は、①食生活のサポート、②食の表現と演出、③フードプロモーションの三領域に分け、それぞれの視点から課題を整理する。各テーマに基づき提案書の作成に取り組み、目的や対象を明確にした企画を考える力を養う。また、情報の整理や根拠の提示、表現方法の工夫を通して、実務を意識した提案力の育成を目指す。
4.教育活動や教育業績 科目名④： 栄養学	本講義では、フードビジネスに関わる基礎知識としての栄養学を学ぶ。食生活を楽しみながら健康を維持するための栄養と健康の関係について理解を深める。また、基礎的知識に加えて、最新の栄養情報を適切に読み取り、健康や食に関する情報の信頼性や有効性を判断する力を養う。消費者の視点を踏まえ、食品選択や情報提供に活かせる判断力を身に付けることを目指す。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①: フードコーディネート実習</p>	<p>実習前の説明や盛り付けに関する具体的な助言については一定の評価が得られており、理解度や学習意欲の向上につながっていると考えられる。一方で、「食品ロスへの配慮」や「スタイリング時間の確保」に関する意見も見られたことから、今後はレシピや盛り付け例の資料のWebClassへの事前掲載や、スタイリングシートの活用、食材の分量調整などの工夫を検討していく。今後もこれらの取組を通して、より良い授業となるよう改善に努める。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②: フードコーディネート論</p>	<p>講義資料のWebClassへの掲載や課題内容については、概ね肯定的な意見が見られた。また、「様々な種類の課題があり面白かった」「レポートでデザインを考えるのがよかった」など、課題に関する評価も見られた。来年度は、課題実施前に制作例を提示し、多様な表現方法を紹介することで、学生が取り組みやすい授業となるよう工夫する。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③: 応用フードコーディネート論</p>	<p>課題が難しいとの意見も見られた。この点を踏まえ、来年度は課題内容の見直しを行うとともに、事前の説明や例示を工夫し、取り組みやすい課題設定となるよう改善を図る。また、学生とのコミュニケーションを重視し、理解度に応じた指導に努める。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④: 栄養学</p>	<p>講義資料のWebClassへの掲載や穴埋めプリント、練習問題については、概ね肯定的な意見が見られた。これらの教材により理解が深まり、復習にも活用しやすいとの声があった。特に、復習には練習問題が使いやすいとの意見が見られた。今後も教材の工夫を継続し、理解しやすい授業づくりに努める。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業評価アンケートの実施、授業内容に関する研修会の参加など。</p>
--------------------------------	---------------------------------------

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>授業評価アンケートにおける理解度および満足度は、いずれの科目でも大学平均を上回る結果であった。このことから、授業内容や進め方について一定の評価が得られていると考えられる。一方で、現状にとどまらず継続的な改善が必要であると認識している。今後は、学生とのコミュニケーションを重視し、授業中の反応や意見を踏まえて課題設定や説明方法を見直す。また、資料や具体例を工夫し、学修内容が実際の場面と結びついて理解できるよう努める。さらに、レポートへのフィードバックを通して学生の理解状況を把握し、適切な支援を行うことで、学習意欲の向上と知識の定着を図る。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： **フードビジネス学科**

職位： **准教授**

氏名： **堤 浩一**

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】
フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。
1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

学びに対して誠実であること。誠実であることが【立学の精神】の「世界から信頼され」、「自由と責任を重んじ」、「特に品性を高め」ることにつながっていると信じている。
また知識だけでなく、知恵、すなわち知識を生かした"考え方"のほうを重視するように心がけている。こういった、知識の"使い方"を多く知ること、知識をより深い理解に基づいて身につけることにつながり、これがすなわち【立学の精神】の「学問を通して知識技術を磨く」ことであると考えているため。と同時に、「正しい歴史観と人生観を培う」ことにもつながると信じているため。また、現場で知識が使われているということは、そこにあった問題が解決された結果であるので、知識の使われ方の事例を多く知るとはすなわち問題解決の事例を多く知ることと同義である。したがってこのような教育をおこなうことで【ディプロマ・ポリシー】の「実践力を身につけ」「課題発見力を有し」「問題解決力を身につける」ことにもつながると考えている。
そして、学生自身が自己完結する形で知識技術を磨くだけでなく、プレゼンテーションの場を設けて他者からの質問にさらされる機会を与えることで、自分自身を"修正する"機会も提供する。これにより自己の主張を客観視できるようになり、より「正しい歴史観と人生観を培う」こと（【立学の精神】）、および「問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけ」、「社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけ（【ディプロマ・ポリシー】）」ることにつながると考えている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①: 食品学I、食品学II、食品衛生学	座学科目である。教科書レベルの知識をできるだけ噛み砕いて解説することを心がけている。勉強を苦手とする学生が、対策が必要なレベルの教受講していると想定されるのでそのフォローアップにも配慮している。具体的には以下のような取り組みをおこなっている。 ・実際の事例や最新のニュースと結び付けて教えることで、授業で習う知識が現実の知恵として生かされている、すなわち知識だけでなくその"使い方"まで繋げて教えることで理解しやすくなるように配慮している。上記のとおり「実践力」「課題発見力」「問題解決力」（【ディプロマ・ポリシー】）にもつながると考えている。 ・空欄を穴埋めする形式のプリントを配付している。穴埋めすればノートとして完成するようにしており、ノートというものの一つの見本となることを目指している。このプリントを参考に、他の授業でもノートが取りやすくなるようになればとも考えている。 ・可能な限り、他の科目と関連する話題については、その旨を紹介するようにしている。フードビジネス学科の多くの科目で学ぶ知識はお互いにつながりがあることを示すことによって「フードビジネスの基本を体系的に理解」（【ディプロマ・ポリシー】）することにつながると考えている。そのために、自分が担当していない科目の教科書やシラバスも余裕のある時にチェックしている。 ・毎授業で感想を書いてもらうことで、少しでも授業内容を覚えて帰ることができるようにしている。また質問も書いてもらい、次の授業時にそれに対して答えることで、各学生自身の個別の知識に基づいて、その"使い方"につながるようにしている。上記のとおり「実践力」「課題発見力」「問題解決力」（【ディプロマ・ポリシー】）にもつながると考えている。 ・学生が知識を実際に"使う"機会を与えることにより「知識技術を磨く」（【立学の精神】）ための実践ができるように、WebClassにいつでも繰り返し挑戦できる練習問題を設置している。本学科がフードスペシャリスト養成認定校であることに鑑み、フードスペシャリスト資格試験の過去問の第1回から最新の回までの、食品学、食品衛生学に関連する問題をすべて網羅しているものである。「定期試験対策にもなる」という呼びかけもおこなっているが、学生の利用率は低い。業績は特に無い。
2.教育活動や教育業績 科目名②: 食品学実験	実験実習科目である。毎授業、実験内容の解説を書いたプリントを配付し、学生には測定結果と考察を記入してもらう。そのプリントを回収、採点し、返信や解説を入れて、次週に返却するというスタイルをとっている。また文字情報だけでは通じにくい面が多い授業であるので、実験を実演している様子を見せる動画教材を用意し、WebClass経由でYoutubeで限定公開している。授業1週間程度前には公開し、学生が予習できるようにしている。 レポート採点評価の際は、得られたデータに基づいて考察できているかを重視している。どのような考察をすべきかは、ある程度は授業中に解説している。正しくない考察に対しては、なぜ正しくないかの解説のコメントを入れたうえで各学生に返却することで個別対応している。このように"考察する"という行為を通して知識を正しく運用する体験をしてもらうことにより、座学系科目では実施できない方法で知識を生かした"考え方"が身につく、すなわち「学問を通して知識技術を磨く」（【立学の精神】）ことにつながると考えている。また、授業時間中に"体験"してもらいたいため、考察を書く手が止まっている学生にはできるだけ積極的に声をかけ、どこまで理解できているかを会話から伺い知ったうえで可能な限り程よい助言を与え、筆が進むようになっている。 インターネット検索の利用も認めているが、測定データとの整合性が取れない考察については、たとえ（本来あるべく通りの実験データが得られていれば）正解と言えるものだったとしても注意を与えるようにしている。実験データに対して誠実に向き合うことを追求することで、「世界から信頼され」「自由と責任を重んじ」「特に品性を高め」（【立学の精神】）ることができるようになって考えているためである。またこうしたことで学生に"厳しすぎる""わけが分からない"という印象を抱かせないように、可能な限りすべての事項に対して理由を付けて学生に説明するようにしている。学生が理不尽に感じる部分が無いように心がけ、誠実さの追求とリズナブルであることが両立するようにしている。業績は特に無い。

<p>3.教育活動や教育業績</p> <p>科目名⑤:</p> <p>フードサイエンス基礎</p>	<p>高校までに理科系科目を十分に履修してこなかった学生が一定数いることを想定されるので、そういった学生が食品学や栄養学などフード系の理系科目の理解がしやすくなるように、化学・生物学の基礎的な事項について解説する。1年生前期に開講している。高校までに理科系科目を十分に履修してなくても馴染めるよう、座学授業の中に、一般的な講義室でも実施できる小規模な実験や、簡単な演習問題を織り込み、実際に手を動かしてもらうことに重点を置いている。また実験・演習中に教員が学生卓の間に巡回し、学生の理解度・進捗度に応じて個別指導をおこなうことや、学生同士の相談も可とする中で、知識が定着しやすくなるように配慮している。基本的な理念は上記同様、「知識技術を磨く」(【立学の精神】)・「フードビジネスの基本を体系的に理解」(【ディプロマ・ポリシー】)を実現しやすくなるように設置した科目である。</p> <p>学生に「無意味な理科教育をされている」という印象を持たせないための配慮として、各事項が、食品学等のどのような項目と関連しているかの情報も常に付随させている。業績は特に無い。</p>
<p>4.教育活動や教育業績</p> <p>科目名④:</p> <p>専門演習Ⅰ・Ⅱ</p>	<p>食品学・食品衛生学に関連した実験をおこなう。実験自体は食品学実験でもおこなっているが、演習系科目は受講人数が少ないことを利用して、設備やコストの関係で実習系科目ではおこなえない、やや高度な実験を中心におこなっている。加えて、実験レポート執筆のための個別指導をおこなう時間も設けやすくなっている。</p> <p>材料として身近な食品を利用しつつ、実験をおこない、実験レポートをゼロから書く訓練を積む。実験の中で関連する食品学・食品衛生学の知識を復習するとともに、復習したその知識を実際に“使う”機会を提供するという点は食品学実験と同じであるため、食品学実験と同様に「学問を通して知識技術を磨く」と同時に、「世界から信頼され」「自由と責任を重んじ」「特に品性を高め」ることができると考えている(【立学の精神】)。また、できるだけ分析してみたい(=課題解決してみたい)実験材料を学生に持ち寄ってもらう機会を提供することにより、「課題発見力」「解決力」を身につけてもらうきっかけとなると考えている(【ディプロマ・ポリシー】)。</p> <p>実験レポートは“問題提起し、それを検証するための方法を示し、得られた結果をもとに、提起した問題をどこまで解決できたかを考察する”文書であるため、これをゼロから組み立てる経験を積むことは、研究論文を書く際の練習ともなる。したがって、卒業演習・卒業研究の下地ともなると考えている。また、断片的な知識を組み立てて論理的な文に仕上げることは、知識を「体系的に」する体験にもなると考えている(【ディプロマ・ポリシー】)。業績は特に無い。</p>
<p>5.教育活動や教育業績</p> <p>科目名⑥:</p> <p>卒業演習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究</p>	<p>論文を読んで内容をまとめてプレゼンテーションしたり、テーマによっては関連する実験をおこなって最終的に発表としてまとめる。論文は実験レポート同様“問題提起し、それを検証するための方法を示し、得られた結果をもとに、提起した問題をどこまで解決できたかを考察する”文書であるため、それを読み込んでまとめるという作業は、課題を見つけ・解決した事例を詳細に学ぶ行為に他ならず、「課題発見力」「解決力」を身につけてもらうきっかけとなると考えている(【ディプロマ・ポリシー】)。またHPLCを用いた実験、危険な試薬を使用する実験など、多くの学生向けにおこなわれる実習授業ではおこなえない内容を安全かつ誠実に実施できるように、学生に対し可能な限り付きっきりで指導した。さらにフードビジネス学科としては「フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し」「他者と協働する能力を身につけ」「修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている」学生の育成を目的としているため(【ディプロマ・ポリシー】)、それらを総合的に実践できる稲友祭の模擬店を利用した研究活動をおこなうことでっていくのが良いと考えていたが、今年度、そういった活動を希望する学生が現れたので実現することができた。簡易的な官能評価実験をおこないデータを取得、プレゼンテーションとしてまとめて「卒業研究」にて発表することができた。なお業績としては特に無い。</p>

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名①:</p> <p>食品学Ⅰ、食品学Ⅱ、食品衛生学</p>	<p>3科目5コマの授業評価の理解度平均は3.45±0.11、満足度は3.62±0.06である。毎期出される全学の授業評価アンケートの点数分布と比較してきた経験から、学内の他の科目と比べて平均的な水準であると思われる。理科系科目になじみのない学生が多いことを考えれば、悪くはない成績であると考えて良さそうではある。</p> <p>授業評価の自由記述に「質問に答えてくれるのが良かった」「プリント、スライドが分かりやすい」「説明が分かりやすい」とあることから、上記の取り組みは学生の理解度向上に有効であることが示唆される。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名②:</p> <p>食品学実験</p>	<p>授業評価の理解度は3.50、満足度は3.44である。毎期出される全学の授業評価アンケートの点数分布と比較してきた経験から、学内の他の科目と比べて平均的な水準であると思われる。理科系科目になじみのない学生が多いことを考えれば、悪くはない成績であると考えて良さそうではある。</p> <p>授業評価アンケートの自由記述に「実験の解説が分かりやすく進めやすかった」「考察で困っている時、先生がヒントを説明してくれたので考察を書くことができた」「口頭説明だけでなくプリントも詳しく分かりやすい」などの声があったので、上記教育理念やそれに基づく取り組みの少なくとも一部は実現できていると考えられる。また「事前に着ている動画を見て、安全に実験を進めることができた」などの声もあり、予習用動画教材を作っておく意味があることも伺えた。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名③:</p> <p>フードサイエンス基礎</p>	<p>2コマの授業評価の理解度はそれぞれ3.39と3.40、満足度は3.70と3.50である。毎期出される全学の授業評価アンケートの点数分布と比較してきた経験から、学内の他の科目と比べて平均的な水準であると思われる。理科系科目になじみのない学生が多いことを考えれば、悪くはない成績であると考えて良さそうではある。</p> <p>授業評価の自由記述に「質問に答えてくれるのが良かった」「わかりやすかった」「理科科目を高校で取っていなかった人にもわかりやすかった」など、学生の理科系科目に対する理解向上に資するという本授業設置した目的が達成されている様子が伺えた。また「(提出したプリントに)毎回解説や知識を載せて返却されるのが、授業のモチベーション維持になった」など、個別指導をおこなった効果も見られた。上記教育理念やそれに基づく取り組みの少なくとも一部は実現できていると考えられる。</p> <p>また「実験が楽しかった」といった声もあり、簡易な実験を授業中におこなうことに対する需要もありそうであった。</p> <p>「分からない点は周りの人に聞いたりして、協力して取り組んだ」など、実験・演習を「相談可」の状態でおこなった試みも評価されているようだ。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察</p> <p>科目名④: 専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒業演習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究</p>	<p>授業評価アンケートが取られていないので、省察の根拠にできる客観的資料が無い。学生の反応を書くにしても根拠は主観しかない。ただの主観や妄想を省察として書く意味は無い。ゆえにここに書けることは何も無い。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み(授業アンケート、オープンクラス、FD講習(学外含む)、学会活動、その他)

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業評価アンケートをとり、その結果に基づいて「総括と意見」を作成、提出した。その他には、私の関与する範囲内において、FDすなわち「組織的な取組」としては特に何もおこなわれなかったため、「授業改善のために行ったFDの取り組み」としても特に何もしなかった。「個人として」の取組を粛々と進めたのみであった。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>平年通りであり、教育に関する成果・業績と呼べるものは特に無い。【立学の精神】や【ディプロマ・ポリシー】に基づく教育理念の実現のためには、成果・業績を上げることよりも学生にとってより良い成長をもたらす授業をおこなうことが重要であると考えているので、成果・業績を上げる必要も無いと考えている。次年度も授業評価アンケート等学生の反応が見えるものを参考に、これまでの授業内容を維持・拡張できるようブラッシュアップに努める予定である。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 教授

氏名： 中村麻理

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

フードビジネス学科のディプロマポリシーを教育理念としている。具体的には下記の通り。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：フードスペシャリスト論	フードスペシャリストとは、流通から消費にいたる過程で、食品の品質判定、食品の情報調査とその提供、食品知識の普及教育、販売促進とサービス、料理店におけるコーディネート、消費者のクレーム処理など、食べ物について総合的に良品を選定し、コーディネートする専門職である。ここでは、フードスペシャリストの意義とその概要について講義する。卒業後のフードビジネスの現場において役立つ基本的な知識を習得するとともに、最終的にはフードスペシャリスト資格の取得に必要な基礎力を身につける。
2.教育活動や教育業績 科目名②：食文化論	古くから食はさまざまな地域に根ざし、人々の生活の中心としての食文化を生み出してきた。世界の食文化は、それぞれの時代背景の中で進化し、異なる自然環境の中で受け継がれてきた。ここでは、日本と西洋の食文化を学ぶことを通じて、食の世界のおもしろさ、奥深さを感じていただきたい。授業の後半では、演習的な課題も取り入れることとした。日本料理とフランス料理を中心に、それぞれの歴史と献立について、フードコーディネーターにとって必要とされる知識を身につけることができる。
3.教育活動や教育業績 科目名③：フードブランニング	フードビジネスの第一線の担い手としてのフードスペシャリストには、さまざまな専門知識が必要とされる。ここでは、食情報の探索と食企画、食空間のコーディネート、メニューブランニング、フードマネジメント、食環境とフードシステム等に関する基本的な知識について講義する。卒業後のフードビジネスの現場において役立つブランニングのための基礎知識を身につけることができる。最終的にはフードスペシャリスト資格の取得につなげる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：食社会学	本講義では、現代日本の食生活を社会的に考察する。キーワードは食育である。最終的には、フードビジネスの現場における食企画の立案につなげる。フードビジネスの現場では、食育に関する網羅的な知識を持つ人材が必要とされている。この要望に応え、本講義では食育に関する基礎知識を身につける。これらの知識習得を通じて、社会人に必要な基礎能力の訓練も行う。最終的には食育に関する提案のできる人材の育成につなげる。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：フードスペシャリスト論	フードスペシャリスト論は、フードスペシャリスト資格取得の導入科目である。資格試験対応であるため、理解度が課題であるが、「11. 授業の内容が理解できた」は3.76で、昨年の3.68よりやや上昇した。「12. この授業に満足している」は3.80、去年は3.73であった。自由記述では、「わかりやすい」「楽しい」というコメントが複数見られた。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：食文化論	食文化論の「11. 授業の内容が理解できた」の昨年の平均値は3.82であった。昨年は3.71であったので、やや上昇している。「12. この授業に満足している」の平均値は3.79、昨年は3.84であった。自由記述では、「よかった」というコメントが複数見られた。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：フードプランニング	「フードプランニング」については、「12. この授業に満足している」が3.84で、昨年の3.74を上回った。「11. 授業の内容は理解できた」は3.67で、前年とほぼ同じであった。最終回で回答を呼びかけたが、回収率が65%であったので、さらなる工夫が必要である。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：食社会学	「食社会学」では、「12. この授業に満足している」が3.82で、昨年の3.76を上回った。「11. 授業の内容は理解できた」も3.68と、去年の3.64より良い結果となった。自由記述では「わかりやすい」という記述が多く見られた。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	授業評価アンケートの結果を精読し、次年度につなげている。
-------------------------	------------------------------

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<ul style="list-style-type: none"> ・食文化論では、複数回的小テストを実施し、自宅での学習習慣を学生に身に付けてもらうように工夫した。ノートのチェックなども行い、学習意欲の向上を図った。 ・フードスペシャリスト論でも、小テストを実施し、3年で受験する資格認定試験の合格率アップに備えた。ノートのチェックなども行い、学習意欲の向上を図った。 ・フードプランニングは資格試験対応授業なので、練習問題を宿題としている。 ・食社会学では、視聴覚教材や演習課題を取り入れ、実践的な授業内容になるようにしている。さらに小テストを複数回行い、理解度の向上に努めている。
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：成田 裕一

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルアプリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

管理栄養士として必要な知識の礎となる基礎栄養学分野の知識を、身につける。講義と実験の内容を連携させ、講義で学んだ内容を実験で、実験で身につけた知識を次年度の講義でさらに発展させる形で確実に知識を積み上げていく。これらにより、応用系の科目の履修に必須な「使える知識」を身につける。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：栄養学I	栄養学の基礎的知識を修得し、人々の健康の維持増進や、生活習慣病の予防などについて理解できるようになる。 栄養の基礎概念と、三大栄養素について化学的な特徴と働きを理解し、実際の生活やその後の学修に応用できるようになる。
2.教育活動や教育業績 科目名②：栄養学II	人々の健康の維持増進や、生活習慣病などの予防のための栄養学の基礎的知識を修得する。 五大栄養素のうちのビタミン、ミネラルについて、および水や食物繊維についても化学的な特徴と働きを理解し、実際の生活やその後の学修に応用できるようになる。
3.教育活動や教育業績 科目名③：栄養生化学	食べ物に含まれる栄養素について、体に取り込まれた後どのように代謝されていき、エネルギーや体の構成成分になるのか、またそれが食後と空腹時でどのように変化するかを理解し、実際の生活やその後の学修に応用できるようになる。
4.教育活動や教育業績 科目名④：基礎栄養学実験	基本的な実験技術を習得するとともに、各臓器の機能や病気との関係、脂質代謝の詳細について理解できるようになる。 また、実験レポート作成の基本を身につけるとともに、生命の尊厳についても考えられるようになる。 これらはいずれも、人々の健康の維持増進、生活習慣病などの予防のため、科学的かつ実践的な能力を豊かに発揮できる管理栄養士には欠かせない知識と技術である。
5.教育活動や教育業績 科目名⑤：栄養生化学実験	基本的な実験技術を習得するとともに、各臓器の機能や病気との関係、たんぱく質の機能について理解できるようになる。 また、レポート作成の基本を身につけるとともに、生命の尊厳についても考えられるようになる。 これらはいずれも、人々の健康の維持増進、生活習慣病などの予防のため、科学的かつ実践的な能力を豊かに発揮できる管理栄養士には欠かせない知識と技術である。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：栄養学I	理解度、満足度ともに、これまでと同様の高い評価を維持することができた。授業内で3回ずつの小テストを実施している。自由記述において、定期的な復習をする良い機会となると肯定的な意見が多かったため、今後も継続していきたい。 また、授業動画をwebclassにアップすることを継続して行っている。アンケートでの自由記述でも、復習などに役立ったとの声が複数あったため、有用であると考えている。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：栄養学II	理解度、満足度ともに、これまでと同様の高い評価を維持することができた。授業内で3回ずつの小テストを実施している。自由記述において、定期的な復習をする良い機会となると肯定的な意見が多かったため、今後も継続していきたい。 また、授業動画をwebclassにアップすることを継続して行っている。アンケートでの自由記述でも、復習などに役立ったとの声が多いため、有用であると考えている。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：栄養生化学	理解度、満足度ともに、これまでと同様の高い評価を維持することができた。授業内で3回ずつの小テストを実施している。また、授業内容の理解を助ける目的で、各回の予習として「1,2年生で学修したはずの知識」について復習してもらう機会を設けている。さらに、授業スライドや配布プリント、練習問題を基礎、応用、発展の3段階に細かくレベル分けし、学生自身がどこに注力するかを判断して学修できる体制を構築している。自由記述において、これらはいずれも学修の役に立っていると肯定的な意見が多かったため、今後も継続していきたい。 また、授業動画をwebclassにアップすることを継続して行っている。アンケートでの自由記述でも、復習などに役立ったとの声が多いため、有用であると考えている。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：基礎栄養学実験	理解度、満足度ともに、これまでと同様の高い評価を維持することができた。「一年生で学習した内容の復習である」点を強調して、内容の解説を行うことを継続している。理解度も高い水準を維持することができ、また最終のまとめレポートや授業内テストをみても理解を深めることができていると考えられる。自由記述においてもその点を理解したコメントが複数見られたため、継続していきたい。
5.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名⑤：栄養生化学実験	理解度、満足度ともに、これまでと同様の高い評価を維持することができた。「一年生で学習した内容の復習である」点を強調して、内容の解説を行うことを継続している。理解度も高い水準を維持することができ、最終のまとめレポートや授業内テストをみても理解を深めることができていると考えられる。さらに、自由記述においてもその点を理解したコメントが複数見られたため、継続していきたい。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンプラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	各回の授業時に学生からのコメントを自由に記入できる体制の整備、および期末の授業評価アンケート
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

授業動画の作成及びwebclassへの公開と、小テストの実施、復習の機会を設けるなどの対応は、手間がかかる作業ではあるものの、学生に対してのメリットが大きいため、今後も継続していきたいと考えている。	
---	--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職：准教授

氏名：朴永孝

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を推進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルアプリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

情報メディア分野における教育では、知識や技術の習得にとどまらず、実践を通して理解を深め、学生が自ら課題を発見し、他者に伝わる形で表現できる力の育成を重視している。

本学の理念である「自由と責任」を踏まえ、知識が人を自由にするという考えのもと、教育においては単なる知識の伝達にとどまらず、それを多面的に捉え、自ら判断し、主体的に行動する力の基盤として位置づけている。

また、「何を知っているか」という宣言的な知識だけでなく、「どのように考え、どのように作るか」という手続的な知識に重点を置き、知識を実践の中で運用し、自らの表現や問題解決へと転換できる力の育成を目指している。

そのため、授業ではリサーチ、発想、試作、改善に至るプロセスを可視化し、思考の流れを理解しながら学べる環境づくりを行っている。また、前提知識の差に配慮し、段階的な課題設計や補助資料、個別対応を通じて理解支援を行っている。さらに、実社会と接続した課題設定や協働的な学習を通じて主体性を引き出すとともに、成果の言語化と発信を重視し、表現力とコミュニケーション能力（ヴィジュアル・コミュニケーション）の向上を目指している。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：基礎・専門演習	「新しい時空間におけるグラフィック表現領域」をテーマとする本ゼミでは、メディア環境の変化に伴って拡張されるグラフィック表現の可能性を探究し、時間性やインタラクションを含んだ新たな表現の創出を目的としている。 ゼミ活動は、映像やインタラクティブメディアを中心とした実践的な制作を軸とし、リサーチ、企画、試作、実装、発表に至るプロセスを重視している。特に、リアルタイム表現や反応型コンテンツなど、従来の静的グラフィックを拡張する表現領域に取り組んでいる。 また、作品制作にとどまらず、ポートフォリオ制作や外部公募への出品、企業連携プロジェクトへの参加を通じて、学生が自らの表現を社会に接続し、発信する機会を積極的に設けている。 これにより、表現力だけでなく、企画力、技術理解、コミュニケーション能力を統合した実践的なデザイン能力の育成を目指している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：メディアデザイン演習Ⅰ	この科目では、UX（ユーザー体験）およびUI（ユーザーインターフェース）に関する基礎的視点を踏まえ、メディアデザインのプロセスを体験的に学ぶことを目的とする。特に、「意味がどのように伝達されるか」「どのような視覚的判断が行動を導くか」といった問いを通じて、デザイン思考の基礎を養成する。 授業では、観察・記録・分析といったビジュアルシンキングの手法を活用し、アイデアを視覚的に展開する演習を行う。学生は、社会的あるいは日常的なテーマに対して自ら問いを設定し、アイデアスケッチから構成・制作・発表に至る一連のプロセスを経験する。その過程において、ユーザーや他者の視点を踏まえながら構造や表現を選択する力を育成する。 また、制作において単一の正解を前提とせず、フィードバックや対話を通じて意味を再構成するプロセスを重視する。今年度は、講義内容の補足および資料構成の改善を行い、学生の理解を促進する授業設計へと調整した。これにより、表現の意図を言語化し、他者に伝える力と同時に、それを読み解く力の基礎的な習得を目指している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：映像制作演習Ⅱ	この科目では、リアルタイム映像制作を通じて、時間性や変化を含んだ視覚表現の可能性を探究することを目的とする。ノードベースのビジュアルプログラミング環境であるTouchDesignerを用い、Proceduralな思考を手がかりに、映像が生成され続ける構造そのものを表現として捉える視点を養う。 授業前半では、基本的なノード構造やインターフェースの操作に加え、時間の流れや変化、レイヤーやフィルターによる視覚効果など、動的な映像表現の基礎を学ぶ。中盤以降は、自らのアイデアをどのように「振る舞い」や「現象」として立ち上げるかを重視し、リアルタイムに生成される映像の構成と変容を体験的に探究する。 また、映像の演出や構成にとどまらず、観る者との関係性や知覚の変化、意味の生成過程といった側面にも着目し、「演算」と「感覚」が交差する表現について考察を行う。 今年度は、制作プロセスの段階的提示および補助教材の整備を行い、初學者に対する理解支援を強化した。最終的には、各自のテーマにもとづき、TouchDesignerによるオリジナル映像作品の制作・発表を行う。

<p>4.教育活動や教育業績 科目名④：デジタルファブリケーション</p>	<p>この科目では、デジタル技術を活用した立体造形を通じて、形態・構造・素材に対する理解を深め、既習の設計スキルを具体的なかたちへと転換・拡張するための思考と実践力の育成を目的とする。</p> <p>授業では、これまでに習得した2次元および3次元の設計スキルを基盤とし、それらを立体造形へと展開するプロセスを扱う。設計データを実際の出力へと接続し、制作と改良を反復することで、CADからCAMへと至る一連の流れを体験的に習得する。</p> <p>その過程において、素材の特性や構造、精度に対する理解を深めながら、形態と機能の関係を探究する。また、紙・アクリル・樹脂など多様な素材を扱うことで、質感や加工性、構造の強度といったマテリアルの特性が造形に与える影響を体験的に学ぶ。</p> <p>単なる制作技術の習得にとどまらず、「なぜその形であるのか」「どの素材が適しているのか」といった問いを通じて、構造と素材に基づく造形的思考を養うことを重視している。</p>
---	--

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：基礎・専門演習</p>	<p>ゼミ活動を通じて、学生の多くが美術・造形分野の基礎的な素養を十分に有していない一方で、適切な指導によりその能力を大きく伸ばす可能性があることが確認された。</p> <p>特に、視覚表現における基礎的な概念や、意味がどのように構成され伝達されるかといった視覚言語の理解において、段階的な指導の必要性が明らかとなった。これを踏まえ、今後は視覚言語の基礎概念から応用・拡張に至るまでを体系的に扱い、実践的な制作と並行して学習できる指導方法の導入を検討している。</p> <p>単なる技術習得にとどまらず、表現の構造や意味生成のプロセスを理解し、自らの表現として展開できる力の育成を目指す。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：メディアデザイン演習Ⅰ</p>	<p>授業評価アンケートの結果からは、授業の進行や課題への取り組みやすさにおいて安定した評価が得られた一方で、内容の理解に関しては一定の個人差が見られた。</p> <p>特に、デザインの方法論を重視した授業構成に対し、学生がソフトウェア操作に意識を向ける傾向があり、学習目標との間に認識のずれが見られた。</p> <p>今年度は、講義資料の改善や説明内容の補足を行い、理解しやすい構成への調整を行った。</p> <p>今後は、具体例の提示や段階的な説明を強化し、方法論への理解をより深めることで、学習内容の定着を図る。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：映像制作演習Ⅱ</p>	<p>授業評価アンケートの結果からは、授業内容の新規性や実践性に対して高い評価が得られており、特にハンズオン形式の教材を導入したことにより、理解度の向上が見られた。</p> <p>本科目では、プログラムの思考やリアルタイム処理といった抽象度の高い内容を扱うため、従来は前提知識の差による理解のばらつきが課題であった。</p> <p>これに対し、今年度は制作プロセスを段階的に体験できるハンズオン教材を整備し、実際に手を動かしながら理解を深める学習環境を構築した。その結果、学習内容の定着および主体的な取り組みにおいて改善が確認された。</p> <p>一方で、理解度の個人差は依然として見られるため、今後は課題設計のさらなる段階化およびフィードバック機会の拡充により、理解支援の強化を図る。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：デジタルファブリケーション</p>	<p>授業評価アンケートの結果からは、自由度の高い課題設定により、自身のデザインを物理的なプロダクトとして実際に制作する経験ができた点に対して高い評価が得られた。</p> <p>特に、アイデアを具体的な形へと展開するプロセスを体験的に習得できたことが、学習効果として確認された。</p> <p>一方で、機材の制約に起因する制作時間の確保や進行管理の難しさが課題として指摘された。これにより、制作の進捗や学習環境に一定のばらつきが生じていることが明らかとなった。</p> <p>今年度は、進行管理の強化や補助的な指導を通じて制作の安定化を図ったが、今後は課題の段階的設計および制作スケジュールの明確化を行い、より計画的な制作プロセスの定着と学習環境の改善を目指す。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンプラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業改善のためのFD活動として、授業評価アンケートの結果をもとに、各科目における課題の把握および授業設計の見直しを継続的に行った。特に、実習系科目においては、課題量や進行速度、理解度のばらつきに関する指摘を踏まえ、課題の段階的設計や制作プロセスの可視化、補助教材の整備などの改善を実施した。</p> <p>また、ハンズオン形式の教材を導入し、学生が実際に手を動かしながら理解を深める学習環境の構築を行った。これにより、学習内容の定着および主体的な学習態度の向上が確認された。</p> <p>さらに、実社会との接続を意識した授業改善として、企業連携プロジェクトや外部公募への出品指導を取り入れ、学生が制作成果を社会に向けて発信する機会を拡充した。</p> <p>加えて、カリキュラム改編に関する学科FD委員会での議論や、他大学・企業との連携を通じた情報共有を行い、教育内容および指導方法の改善に反映させた。</p> <p>これらの取り組みを通じて、実践的な制作教育の質の向上と、学生の主体的な学習を促進する授業運営の改善を図った。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度は、プロジェクト型授業やデジタルファブリケーションを中心とした教育を通じて、学生が制作した成果を社会に発信する機会を拡充した。その結果、3年生の中野亜香が「ニッポンものづくりデザインアワード2025」において企業賞を受賞するなど、具体的な成果につながった。</p> <p>これまでプロダクトデザイン教育が十分でなかった学科において、デジタルファブリケーションおよびデザインプロダクトの教育を導入することで、学生が外部アワードに挑戦し、実際に成果を得るに至ったことは大きな成果であり、教育的にも意義深いものであると考えている。</p> <p>今後は、これらの取り組みを基盤として、ポートフォリオ教育の強化および外部発信機会のさらなる拡充を図り、学生がより高い水準で社会と接続できる教育環境の整備を進める。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康情報学研究科
情報メディア学科

職位：教授

氏名：長谷川聡

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

自由と責任を重んじ、学問の価値を理解して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、信頼される人間を育成するために、学生とともに考え、学び、情報システムコースおよび他コースの情報メディア学科の学生に必要な知識と技術を身につけさせ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力をともに磨き、社会で実践的な活動ができる人材を目指すよう、教員と学生、学生どうし、学生個人の学びを支援する。他学科や学外との交流も含めて学びの場とし、生涯にわたって学ぶ姿勢を身につけさせる。大学院の授業では大学院健康情報学研究科のポリシーに従って修士論文相当の研究力を身につけるための学びの場を提供する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：プログラム演習I	情報システムコースおよび他コースの情報メディア学科の学生に必要なプログラミングに関する知識と技術を身につけさせるため、情報実習室にてC言語によるプログラミングの実習を実施。昨年度から2年前より高度な内容を含む教科書に改訂し、デジタル教科書か神の教科書かどちらかを選んで利用可能としている。今年度は、開学した修士課程の学生1名をTAとして配して個別指導を行うほか、対面およびLMS上で理解度の確認テストやプログラミング結果（提出課題のソースプログラム）の共有を行ってフィードバックに利用した。
2.教育活動や教育業績 科目名②：卒業演習・専門演習・基礎演習・健康情報学演習	少人数でコロキウム（研究テーマについての・調査・研究・開発の途中経過などを報告してディスカッションを行う）を実施して、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力をともに磨き、社会で実践的な活動ができる人材を目指すよう、教員と学生、学生どうし、そして、学生個人の学びを支援した。学年を超えた交流も促した。大学院の授業「健康情報学演習」は新規科目で、3人の指導生をむかえてリアルタイムオンラインで修士課程の研究指導を実施した。
3.教育活動や教育業績 科目名③：情報メディア特別演習	「AI教育プロジェクト」を指導し、学年を超えた学生どうしの学び合いと研究により、小学生向けのプログラミング教材を開発し、毎年「小学生プログラミング教室」を開催している。今年度は「愛知万博20周年記念行事「地球を愛する学園祭」」、「美和高校文化祭「みわ高祭」」、「あいち朝日遺跡ミュージアム「収穫祭」、同「弥生月間」」などに出席。情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力をともに磨き、社会で実践的な活動ができる人材を目指すよう、教員と学生、学生どうし、学生個人の学びを支援した。他学科や学外との交流も含めて学びの場とし、生涯にわたって学ぶ姿勢を身につけさせることにつながる活動である。「健康情報プロジェクト」も複数の教員で担当し、稲沢市民病院との共同プロジェクトを進めた。
4.教育活動や教育業績 科目名④：プログラミングと応用	開学した大学院の新規科目。修士課程1年生むけ。Pythonの演習と同時に、健康情報学に関するアプリの企画・開発方法や、因果推論の論講も同時に実施した。悲愁科目で、受講生は7人。うち2名はプログラミング経験がなく、Paiza社のe-LearningとVibe Codingを併用してデータサイエンスにも利用できる力をつけた。
5.教育活動や教育業績 科目名⑤：健康情報学	大学院新規科目。健康情報学に関するオンデマンド型のオンライン授業で、オムニバスで3コマを担当した。授業評価の回答数が10人と少ないのはオンライン上での回答呼びかけに応じた学生の割合が少なかったためである。概ね高評価であった。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：プログラム演習I</p>	<p>今年度の評価は、自由記述では「解説がわかりやすかった」「サポート体制が手厚かった」「難しかったがどんどんできるようになった」「デジタルの教科書でもいいのがかさばらずよかった」など、おおむね好評評価であったが、ポイント評価は下記に示すようにすべての項目で昨年を下回り、平均ポイントが3.5以上なのは「5.教員の話し方は、はっきりとして聞き取りやすかった」「6.教科書やプリントは授業の理解に役立つ」のみで、特に「11.授業の内容は理解できた」は2.97とかなり低かった。 昨年までと比べて1年次での「情報システムコース」の希望者の割合が下がったことや授業前半の欠席者が目立ったことも要因の1つとも考えられるが、内容の高度化は来年も維持したい。授業方法をいっそう工夫して授業内容の理解を図る必要がある。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：情報メディア論</p>	<p>iPadを活用してeポートフォリオやビクトグラムの作品を作ったり映像などの作品制作も行い、毎回オンラインで確認テストも実施した。昨年までに比べると、同時期の必修科目「情報リテラシー」が数理・データサイエンス・AI教育カリキュラムの今年度からの新しいモデルカリキュラムに準拠して内容を変更・高度化したので、その整合性や生成AIの効果的利用および高校「情報」の新課程を意識した内容を少し盛り込んでいる。今回の評価は、授業に積極的に出席：3.65、モニター提示の仕方や内容が適切：3.61など例年に比べてポイントがやや高く、自由記述も「わかりやすい」「ためになった」「面白い」等概ね好評であった。「内容が難しい」「資料をWebClassで共有してほしい」など要望も多く記されたので改善する方法を検討したい。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④： (2コマ開講、内容は同じ)</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケート実施 ・情報メディア学科FDワーキンググループうち合わせ（不定期継続開催） ・高校への出前授業を行い、高校教育からの接続に関して実践し、高校教諭らと情報交換を行った。
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度授業担当科目：（前期）大学院のプログラミングと応用、健康情報学、健康情報学演習I、学部の情報メディア論1コマ、基礎演習I、専門演習I、卒業演習I、情報メディア特別演習I（AI教育プロジェクト、健康情報プロジェクト）。情報メディア論ではiPadを活用しSAとのディスカッションや実演を取り入れた授業を行った。授業評価は昨年より低い評価もあるが、おおむね好評な評価であった。自由記述の内容も参考に改善する。（後期）大学院の健康情報学演習II、学部のプログラム演習I、基礎演習II、専門演習II、卒業演習II、情報メディア特別演習II（AI教育プロジェクト、健康情報プロジェクト）。iPadを活用した教育、アクティブラーニングの促進に取り組んでいる。卒業研究を指導し、それぞれの研究テーマを完成させて報告会にて報告。2名が奨励賞受賞した。大学院健康情報学研究科が設置され、7人の学生をむかえて授業実施した。うち3人は修士論文の指導生である。 令和8年度は、高校のDXハイスクール、高校新課程の高大接続教育等を踏まえて、新しい情報教育を構築・実践する。探究型の高校教育からの接続を継続していく。生成AIの効果的利用を試していく。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：准教授

氏名：濱口 輝士

【立学の精神】
本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】
健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。
1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】
情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。
これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。
専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。
1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザ向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心に、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心に、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

健康栄養学科及び情報メディア学科の学生が教員免許状を取得するために必要な知識及び実践的技術を修得できるよう、1年次の講義科目から4年次の実習科目までの一貫した指導を行う。
教職志望の学生に対しては、教員採用試験受験に向けて、筆記試験・面接試験等の支援を行う。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：教育原理	グループワークやディスカッションを通じて、教育に関する理論・歴史等に関する知識の定着を図っている。 また、LMSとipadを活用して、授業中での課題実施と評価、ならびに学生の学習状況の確認を行っている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：教師論	場面指導の課題を取り入れることで、教師としての実践的な技術の習得を図っている。 また、LMSとipadを活用して、授業中での課題実施と評価、ならびに学生の学習状況の確認を行っている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：生徒・進路指導論	生徒指導・進路指導に関するケーススタディとディスカッションを行うことで、現代の教育課題に対応できる知識・技術の定着を図っている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：教育課程論	本学の学生の特性を踏まえつつ、将来の教育実習を見据えて、1年次から模擬授業を行うことで、教員に必要な授業技術・指導技術の習得を図っている。 模擬授業では教員による評価だけでなく、学生同士の論評やディスカッションを行うことで、受講生全体の能力向上を目指す。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：教育原理	授業評価における理解度の項目の結果は良好であり、授業の内容・方法は適切であったと考えられる。その他の項目についても、概ね良好な回答を得られていた。授業に取り入れたグループワークや学生による作業課題についても、アンケートにおける自由記述では肯定的な評価が寄せられていた。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：教師論	授業評価における理解度の項目の結果は良好であり、授業の内容・方法は適切であったと考えられる。その他の項目についても、概ね良好な回答を得られていた。授業に取り入れたグループワークや場面指導についても、アンケートにおける自由記述では肯定的な評価が寄せられていた。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：生徒進路指導論	授業の理解度をはじめ、全ての項目で高い評価を受けており、授業の内容・方法は適切であったと考えられる。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：教育課程論（情報）	授業の理解度をはじめ、学生の授業評価は良好である。学習指導案の添削や早期の模擬授業の体験は、学生からの評価も高く、教育上有効であったと考えられる。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・授業評価アンケートに基づく指導方法の改善 ・学校における調査・研究
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>講義科目の理解度はいずれも3以上の結果が得られており、授業の内容・方法は適切であったと考えられる。その他の項目についても、概ね良好な回答を得られていた。講義においては、グループワークや学生による作業課題、指導の実践・体験を多く取り入れており、アンケートにおける自由記述では肯定的な評価が寄せられていた。基本的には授業の状況に特段の問題はないと考えられるため、次年度以降も同様の評価が得られるよう取り組みを継続していく。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：平林 義章

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなどを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

医療系従事者の基礎的な学問の一つである、人体の構造と機能について初心者にもわかりやすい講義をすることを心がけている。管理栄養士にとって解剖生理学は、栄養に関する専門知識を深め、患者やクライアントに対して適切な栄養サポートを提供するために重要な知識の基盤になると考える。このことから、以下の点に留意して、解剖生理学教育に臨むよう努力している。

- 1) 解剖生理学の基本理解：管理栄養士には生体の基本的な構造とそれによってもたらされる生理学的プロセスを理解することが求められる。呼吸・循環・消化・代謝・神経などに関する構造と機能を把握し、栄養との関連性を理解するのに解剖生理学は重要である。
- 2) 栄養関連科目と解剖生理学の統合：解剖生理学の知識を栄養関連科目と統合し、栄養素の消化・吸収や成長・発育におけるエネルギー代謝のプロセスが栄養素とどの様に関連しているかを理解することが必要である。
- 3) 臨床的アプローチ：解剖生理学の知識は臨床的な事象を理解するために必須な知識である。患者の健康状態や栄養ニーズに基づいた栄養プランや疾患管理に役立つ内容が講義・実験（実習）に含まれている。また、将来的に医師・看護師・薬剤師などと協力してチーム医療を行う時、解剖生理学の知識が他の医療専門家と連携するための重要なコミュニケーションツールとして活用することとなることを学生が理解することが大切だと考える。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：解剖生理学Ⅰ	解剖生理学Ⅰでは、主に人体の構造（解剖学的項目）を中心に講義している。自己学習ができるように、WebClassに各臓器を説明した動画（mp4ファイル）とPDFファイルをあげてある。動画は1本2から5分程度で12の学習項目、計113本を資料として掲載した。また日頃の勉学の手助けとなるよう、学習項目ごとの小テスト（11項目200問）も作成し予習・復習に役立てるようにした。本年度は、WebClassの小テスト・骨のレポート・ペーパー試験で成績を判定した。ペーパー試験の範囲については、管理栄養士国家試験ガイドラインと同じ項目にした。
2.教育活動や教育業績 科目名②：解剖生理学Ⅱ	解剖生理学Ⅱでは、主に人体の機能（生理学的項目）を中心に講義している。解剖生理学Ⅰと同様に、自己学習ができるように、各器官の機能を説明した（mp4ファイル）およびPDFファイルをWebClassにあげてある。動画は、1本2から5分程度にまとめ19の学習項目、計141本の動画をWebClassに資料として掲載した。また日頃の勉学の手助けとなるよう、学習項目ごとの小テスト（19項目260問）も作成し予習・復習に役立てるようにした。本年度は、WebClassの小テスト・ペーパー試験で成績を判定した。ペーパー試験の範囲については、管理栄養士国家試験ガイドラインと同じ項目にした。
3.教育活動や教育業績 科目名③：解剖生理学実験Ⅰ	解剖生理学実験Ⅰは、人体の組織観察を主体とした実習内容となっている。今年度は組織標本の観察と検索を主体とするために、毎回のレポートの提出および添削は行わなかった。10器官系のべ50枚の組織標本を第1回目から第14回目の実験時間内に観察してもらい、第15回目の実験の時、観察した50枚の組織標本からランダム選んだ3枚の組織の検索を行ってもらい、レポートを作成して提出する形式を取った。
4.教育活動や教育業績 科目名④：解剖生理学実験Ⅱ	解剖生理学実験Ⅱでは、学生自身の生理学的データを測定して考察する内容となっている。ラットの解剖（臓器の観察・重量長さの測定およびヒトの臓器との比較等）循環器系（心電図・心音・血圧・脈拍）、呼吸器（肺機能検査）、消化器系（唾液のアミラーゼ活性測定）、内分泌器（75G糖負荷試験）、体指数、体温、感覚器（皮膚感覚・深部感覚・味覚）、血液学等の実験を行っている。実験2回ないし3回を1クールとして、1回目に講義、2、3回目を実験という形をとっている。学生自身が測定するため、1回目の講義では実験の安全性を確保するために操作手順や注意事項を細かく説明している。また、レポート提出に当たっては、実験の目的が明確になるような設問を設け、実験結果を考察しやすいようにノートを改変した。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：解剖生理学Ⅰ</p>	<p>PowerPointを中心に、WebClasseでの資料も用いて講義を行った。学生の満足度は、昨年(2.39)よりやや上昇して3.23で、理解度は昨年が2.79であったものが、2.85でやや上昇した。課題の量については、3.51で、昨年の3.12よりも上昇した。板書の書き方は3.13(昨年：2.79)、教員の話し方については3.2(昨年：3.0)とやや上昇した。自由記述では、「用語がむずかしい」「人体の構造について知る事ができたが情報量が多い」などの意見が多かった。受講者数に対してデータ数が少ないのは、授業の途中から退出する学生が多いことを反映していると考ええる。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：解剖生理学Ⅱ</p>	<p>この授業では、PowerPointを用いて作った動画をWebClasseに添付し授業の資料とした。学生の満足度は、昨年(3.46)より低下して3.26で、理解度も昨年が3.40であったものが、3.17と低下した。しかし、満足度や理解度の標準偏差も値が大きく、評価にばらつきがあった。課題の量については、3.45(昨年は3.64)で評価が下がった。自由記述では、「PowerPointと板書の両方を使っていて分かりやすい」「小テストがあるので理解が深まった」など好意的な意見が多かったが、逆に「板書の字が小さい」「授業内容が難しい」などの意見もあった。欠席回数については、昨年度平均1人あたり1.8回であったものが今年度は平均1.3回と少なくなっているが、有効データ数が少ないのは、学内RANで教室以外から出席をとり、授業には出席しない学生が例年に比べて多いためと考ええる。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：解剖生理学実験Ⅰ</p>	<p>昨年度は組織の検索のみを行う実験であったが、今年度は、例年のやり方(組織検索と組織の機能を問う課題)とした。学生の満足度は3.25(昨年は3.31)、理解度は3.10(昨年は3.25)で例年よりも低下した。満足度・理解度が下がった反面、「説明が丁寧でわかりやすかった」「事前に予習で進められる部分がレポートの中にあるのが良い」「班で協力してレポート作成すれば早く終われることがモチベーションにもつながった」など実験の進め方については好評価であった。学生の実験への取り組みに関しては積極性の評価が3.57(昨年は3.62)、レポートの量については3.26(昨年3.40)とやや下がった。レポートを見ると、設問に対して、教科書、ネットや提示した資料の全文を丸写ししているものが多く、設問に合った内容を簡潔にまとめて書くということができていないように感じた。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：解剖生理学実験Ⅱ</p>	<p>学生の満足度は3.34(昨年は3.31)、理解度は3.30(昨年は3.27)でわずかに上昇した。学生の評価としては、「実験内容を説明する日と実際に実験を行う日が分かれていたため、実験内容について理解する時間があって良かった」「説明が丁寧だった」「質問をしたら理解できるまで説明してくれた」などの肯定的な意見があった反面、「レポートの課題が多く、時間内に提出するのが難しかった」「黒板の字が見にくい」などの意見もあった。学生の積極性に関しては評価が3.62(昨年3.54)で昨年よりもややよい評価だった。提出レポートを見ると、昨年同様、学生間で理解の程度のばらつきが大きく、ただ単に教科書やWebで調べた内容を写すだけで、こちらの要求している課題を理解して適切に回答する学生が少なかった。授業の説明時に課題の回答やヒントを与えているが聞いていない学生が多いと感じた。課題の量については3.25(昨年3.39)で評価が低くなった。実験当日にレポートを完成させて提出させる点に関し、肯定的な意見と、時間が足りないのでもう少し時間をかけてレポートを完成させたいという意見があった。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み(授業アンケート、オープニングクラス、FD講習(学外含む)、学会活動、その他)

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>【解剖生理学ⅠおよびⅡ】では、講義内容を2-5分程度の動画にしてWebClassで資料としたが、学生の利用率が悪い。そこで、動画と同じ内容(画面および説明)をPDFファイルに出力したものを添えた。試験内容については、「国試ガイドライン」に沿った内容とし、重要項目については国試に出題される内容であることを明確に伝えた。 【解剖生理学実験Ⅰ】今年度は、例年のやり方(組織検索と組織の機能を問う課題)とした。この方法では、観察した組織の構造と機能を同時に学ぶことができる利点があるが、学生にとって、構造と機能を同時に理解する点が難しかったと考える。解剖生理学ⅠとⅡの内容の理解度が低い点が課題となると考える。 【解剖生理学実験Ⅱ】実験の目的が明確になるような設問を設けており、説明の講義の折に設問の答えやヒントを伝えるようにした。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>【解剖生理学ⅠおよびⅡ】初めて接する基礎医学の科目ということで、どうしても専門用語が多く学生が理解できない項目が多すぎる。また、学生が授業に対して受け身で、授業中に携帯等を使用して積極的に学習しようとする意欲が見えない者が多い。また、WebClassに掲載している資料の利用率も悪い。毎年4年次に国試対策をする折、「解剖生理学をもっと勉強しておけばよかった」との声を聞く。1、2年次にこの授業の必要性や達成目標をもっと明確にする必要がある。資料の動画の音声に人工音声を使っているが、「音声がカタコトで聞きづらい」などの意見があったので改良したい。令和8年度は、教科書を「医学書院・系統看護学講座解剖生理学」から「メディックメディア・からだが見える/人体の構造と機能」に変更する予定であったが、平林が令和8年度で退職するため、変更後の評価をすることができないので教科書を変更することは中止した。 【解剖生理学実験Ⅰ】使用している組織標本が経年劣化してきたので、改善したい。今回、毎回のレポートをなくしたため、授業時間中に指示した実験の内容を行わない学生が多かった。また、第15回目の組織の検索についても、最初に「観察した組織標本50枚の中から3枚だけです」と説明しておいたのに、「学生毎に組織の種類が違うのはおかしい」など保護者より理解しがたいクレーム等があった。 【解剖生理学実験Ⅱ】レポートの課題を時間内に終えることのできない学生が増えてきている。課題を減らすことを考慮したい。 令和8年度の解剖生理学実験については、構造(実験Ⅰ)と機能(実験Ⅱ)と完全に分かれているため、両者をまとめて、器官ごとの内容とすることを松本助手と計画をたてていたが、平林が令和8年度で退職するため、変更後の評価をすることができないので大幅な変更はやめ、令和7年の内容を修正して行うこととした。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：准教授

氏名：日渡 美世

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

将来、病院、福祉施設、給食施設、食品業界、学校、官公庁などで、食に関わる業務に携わる上で、食の安心安全は避けて通れない課題である。食生活における安全を確保するための前提といえる法規を理解するとともに、食品製造、調理の現場で微生物制御に対する適切な判断ができるよう、基礎知識と実践力を身につけるための教育を行う。そのために、「食品衛生」を中心に食品を取り扱う上での基礎的な知識と、安全性を評価するための実験手法が身につくような教育を行う。さらに学生が将来、取得した専門知識や技術を使って、食品に関連した場面で問題解決ができるよう、自ら考え、自らの言葉で発信する力がつくように支援する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：食品衛生学	1年前期の科目であり、高校での理科の履修状況の差に対応するため、授業内で取り扱う化学や生物の知識は特に丁寧に説明している。また、食中毒や公害の事例や、商品の表示の例などを多く扱うことで、身近で実践的な教科として興味を持ってもらうように工夫している。授業範囲は国家試験レベルとし、その中で前提となる用語の理解と定着を図るように努めている。毎回復習課題をWebClass上にアップし、授業回の中で小テストを行うことで、学生の知識の定着を支援している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：食品衛生学実験	一人一人の理解しやすさを考慮し、テキスト、配布資料、パワーポイントなど、複数の手段を併用して説明することで、実験に取り掛かる前に確実に理解できるように指導している。特に事故防止については丁寧に説明を行っている。1年生でレポートに不慣れな学生もいるため、WebClassにレポート雛型をアップし、結果や考察をまとめる上での注意点を記載している。特に最初の数回は重点的に添削を行うことで、以降のレポート作成がスムーズに行えるよう支援している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：	
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：食品衛生学</p>	<p>授業評価アンケートでは、スライドや配布資料が分かりやすい点は好評だった。授業資料のWebClassへのアップ、小テストを複数回行うことが、学生の勉強の意識付けにつながっていた。アクティブラーニングへの取り組みを増やして欲しいとの要望があったため、覚える用語が多く説明内容が多い科目の性質にあった、新しい取り組みを工夫して次年度に取り入れたい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：食品衛生学実験</p>	<p>昨年度までの内容から、新たに実習を追加した。実習を前向きに行えたため全体的な授業評価は高かった。レポートに不慣れな学生に対応したテンプレートは好評だった。レポートを頑張ったという声が多かった。今後はレポートの形式や提出方法の改良、実験ノートの評価、テストなど、複数の課題による実践力の向上に努めたい。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>・食品衛生学分野は法規や社会情勢と連動して学習内容が変わることから、学会参加による情報収集、食の安全性や食品衛生に関するセミナーの受講を積極的に行い、法改正を含む最新の情報収集を行い授業に取り入れた。</p>
--------------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>(令和7年度の成果) 「食品衛生学」では小テストやWebClassを活用した復習問題への取り組みが理解度の向上につながった。 ・「食品衛生学実験」ではレポートの書き方の指導、レポート添削による効果が得られた。 「食品衛生学実験」では、「食品衛生学」で学んだ知識をより実際の現場で活かせる実践的な学びへと発展させることができた。 年度の目標 学」では、食品安全に関する事例検討や授業内での演習問題への取り組みといった、理解度向上や知識の定着に繋がる新しい取り組みを行う。 ・「食品衛生学実験」では、より効果的な学びに繋がるよう、実習内容や課題の方法についてさらに改良する。</p>	<p>(令和8 ・「食品衛生</p>
--	------------------------

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：本多一彦

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要不可欠な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

情報活用・分析能力、課題解決能力を磨くための学習環境を提供する。そのために講義を通しての知識の教授と、演習を通して自らの問題解決能力向上のための指導を行う。基礎的知識としては、情報の生成、伝達、変換、認識の理論を学ぶ。また、利用の観点では、情報を最も効果的に処理できる情報システムのソフトウェア開発の側面からのアプローチをおこなう。日進月歩の分野であるため、最新の技術に注目するのは当然であるが、時代の流行廃れに依存しない学力を身につけられるように配慮する。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：情報学概論	1年次前期の必修科目であり、情報の生成、伝達、変換、認識の理論を学ぶことを中心とする。ただし、これらの理論は数理的かつ抽象的な概念を含むため。初学者にとって学習困難な内容である。また学生各自が高等学校等で学習・理解した内容に差異があるため、基礎理論を具現化したコンピュータシステムを例に講義を進めている。その際、数理的知識の理解と活用については避けて通ることができない課題である。しかし多くの学生にとってその知識の有用性を認識できていない段階では、学習効果を上げることが困難である。そこで、詳細な説明は講義期間の後半で行うこととし、学生が利用しているコンピュータシステムへの認識、疑問を確立した後数理的知識の課題に取りかかるよう配慮している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：ソフトウェア基礎	2年次前期の情報システムコース必修の科目である。現カリキュラムでは、ソフトウェア開発にかかわる講義、具体的にはプログラミングの演習は1年次から行われている。本格的なプログラミングの演習は1年後期のC言語の演習からである。C言語は多くのモダンなプログラミング言語の基となった言語であり、様々なプログラミング言語が登場した現在においても、学習の意義があると考えている。しかしC言語は本格的なコンパイラ言語であるため、初学者にとってはテキスト通りにプログラムを記述し動作させるだけでも多大な努力を有する。さらに演習のみでは、プログラムの正常動作に気を取られて、プログラミングの基本的知識の習得が充分でないことが課題となる。本講義ではプログラミングの演習と併せて受講することで、情報システムの駆動に必要な知識を確実なものとする。
3.教育活動や教育業績 科目名③：モバイル情報論	モバイル情報機器の発達により、情報の生成、伝達、変換、認識がいつでも、どこでもできるようになった。本講義では、情報活用が時間や場所に縛られることなく実現できるように、モバイル情報機器のハードウェアとソフトウェアの両面からの理解を促す。さらに個人情報セキュリティの問題に考慮しつつ、通信ネットワークを介したコミュニケーションツールとしての活用について理解・実践し、学生の分析能力、課題解決能力の向上を行う。
4.教育活動や教育業績 科目名④：自然科学II	化学と生命科学の分野を中心に、自然科学の発展と考え方を学ぶ。化学を通して物質にたいする基礎的な知識と考え方を理解し、生命科学に至る最新の研究成果をトピック的に交えることにより、物質や生命の不思議な魅力を含む自然科学一般への興味と理解を図る。講義は情報・食品・健康を横断する内容とし、本学開設学部・学科の全てのディプロマポリシーに合致するよう配慮している。

5.教育活動や教育業績 科目名⑥：プログラミング入門（再履修コース）	本講義は1年次前期に行われる「プログラミング入門」における再履修を対象とした講義である。プログラミング教育の演習と理論にたいする教授方法については、「ソフトウェア基礎」において述べた通りである。しかし、実際にはプログラミングの技術の習得に遅く学生が多いことも事実である。理解を困難としている原因として、プログラミング技術を習得するための、継続的な取り組みが必要なが挙げられる。しかし学生によっては自らのペースで演習に取り組みにくいことに戸惑いを示している可能性がある。本講義はコロナ禍でのオンライン・オンデマンド講義の経験を生かして、いつでもどこでも学習と演習ができるようにオンデマンドの教材を配布している。学生には入学時にiPadを無償貸与しているが、本講義ではこのiPadを利用して演習が完結できるようになっている。本講義4つのテーマとそれに対する課題から構成されているが、それぞれのテーマに対してオンデマンド教材だけでは、疑問への対応が困難なこともある。そのため、対面講義との併用で講義を進める。
---------------------------------------	---

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：情報学概論	開講2クラスで差があるものの、過去3年で比較すると理解度の向上が見られた。今年度の2クラスでの差については、木曜日3限の講義でポイントが低く、特に項目5の「話し方」では0.3ポイント低かった。自由記述を見ても、木曜日3限で講義での内容の聞き取りにくさが指摘されていた。今年度、木曜日3限の講義でのポイント低下の要因として、Wi-Fiの繋がりが難さも影響した可能性がある。講義では、LMSであるWebClassを活用しているが、木曜日3限では接続の不調が多発した。図書情報センターに相談し、ネットワーク・トラフィックを監視してもらい、講義室に別途ルーターを持ち込んで対策を施した。しかし、十分な効果を上げることができなかった。次年度からは、利用する講義室を厳選したいと考えている。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：ソフトウェア基礎	ソフトウェア基礎は2クラスで行なっている。クラスにより理解度に0.25ポイントの差があった。経験上、ポイントの差が大きい場合、受講者人数が少ないクラスの方が高ポイントである傾向にあったが、今回は逆の結果となった。自由記述を調べてみたが、この原因についてはわかっていない。回答率と逆相関のようである。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：モバイル情報論	受講者推移を見ると、一昨年度に比べ減少しているものの、昨年度と同程度であった。なお3年間の推移を見ると、理解度と満足度の双方において向上していることがわかる。自由記述についてはモバイル機器の実機が見ることができ、また歴史が知れてよかったと肯定的な意見があった。一方で、「講義が聞き取りにくい」、「一方的に話しているのみ」という否定的な意見もあった。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：自然科学II	自然科学IIIは回答数が12件と少ないため、統計的なデータ解析は難しいが、今年度、昨年度の理解度と満足度のポイントの低下が回復傾向にある。自由記述も少ないが、講義中の実習（鏡像異性体を理解するためのペーパークラフトの作成）や、WebClass中に準備した資料について評価するコメントがあった。
5.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名⑤：プログラミング入門（再履修コース）	「令和6年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察」でコメントしたように、令和7年度の講義では、対面とオンデマンド方式の併用を試みた。前年度のコメントのように、全て対面方式に切り替えることも考慮したが、多様な学生の履修形式と学習方法を考慮して、両方式併用とした。ただし、対面方式では均等に講義（演習）の説明を行うのではなく、4テーマの各初回に課題の詳細を説明し、それ以降の回はオンデマンドでも演習作業が継続できるようにした。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	<p>プログラミング入門（再履修コース）では、対面とオンデマンド方式の併用の講義とした。オンデマンドのみの場合、毎回の進捗報告と課題の提出が、授業の評価対象となるが、締切りやレポートの修正・再提出の指導においては充分でないことがあった。対面を併用したことにより、学生の進捗状況を把握できるため、細かな指導が可能となった。今後、講義をオンデマンド単独で実施するか、対面方式と併用するかについては、履修状況から判断していく。</p> <p>モバイル情報論では、講義内容が日々新しく更新され、伝える内容が多くなる。そのためモバイル機器を講義中に回覧して「一方的に話しているのみ」にならないように心がけている。しかし、まだ充分でなかった。そのため、講義中にWebClassを用いて記述式の課題を解いてもらい、その授業時間中に課題を評価する方法を試みた。結果、講義中に紹介しなかった解答についても、学生から「私の課題解答はどうですか？コメントください」といったメールが届いており、返答で対応した。この教授法が効果的であることがわかった。</p>
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度は、モバイル情報論で講義中に記述式課題を提示し、その解答をその場で評価する教授法を採用することで一定の成果をあげた。令和8年度は同様な取り組みを他の講義科目でも取り入れていきたい。しかし一方で、学生からの解答を詳細に解析してコメントする場合は、即時性は失われるが次回講義での解説することが望ましい。両教授法の併用により、講義->問題（課題）提示->解答のフィードバックサイクルを着実なものにし、知識・理解力の向上に努めたい。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：松原 友子

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

情報メディア分野の基礎科目では、進化するコンピュータ技術や情報活用に関する知識・技能について、講義と演習を組み合わせた実践的な指導を行う。特に、基本情報技術者試験の対応科目を担当する中で、基礎理論の理解と応用力の定着を重視し、学生が体系的に知識を身に付けられるよう工夫している。これにより、卒業後も自ら学び続ける力の育成を目指す。

また、情報システムコースの専門科目では、プログラミングやシステム開発を段階的に指導し、論理的思考力と問題解決能力の育成に努めている。課題を通して、課題の本質を捉え、自ら解決策を考え実装する力を養うとともに、実社会で活用できる実践力の修得を目指す。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①: 情報システム入門 メディア情報技術	いずれの科目も基本情報技術者試験（FE）の対応科目として位置付けており、特に「メディア情報技術」はFE講義の認定科目として、試験範囲に準拠した体系的な知識の修得を目指した教育を行っている。講義は、基礎理論の解説（座学）と過去問題演習を組み合わせた構成とし、知識の理解と応用力の両立を図っている。難易度の高い問題に対して段階的なヒントを提示することで、思考過程を重視しながら解答に到達できるよう支援している。また、学生による解答発表の機会を設けることで、論理的に考え説明する力を養い、主体的に学習へ取り組む姿勢の育成を図っている。さらに「メディア情報技術」においては、JavaScript、Photoshop、Shade、Accessを用いた実習を取り入れ、理論と実践を関連付けて知識の定着を促進している。
2.教育活動や教育業績 科目名②: 基礎演習	Pythonを用いたゲームプログラミングの指導を行っている。授業は、Pythonの基礎知識の習得から始め、CUIベースのミニゲーム開発を経て、GUIを用いたアプリケーション開発へと段階的に発展させる構成とし、学習内容の系統性と理解を深めることを図っている。 指導においては、単なるサンプルコードの入力にとどまらず、穴埋め形式の演習課題を取り入れることで、アルゴリズムや処理の流れを意識しながら実装する力の育成を重視している。また、理解度や進度の高い学生に対しては、発展的な課題を別途提示し、個々の能力に応じた学習の充実を促している。
3.教育活動や教育業績 科目名③: 専門演習 卒業演習	XcodeおよびPythonistaを用いたiOSアプリ開発の指導を行っている。 専門演習では、基礎的なアプリ開発課題に段階的に取り組ませている。単なる見本コードの入力にとどまらず、穴埋め形式の課題を取り入れることで、処理の流れや構造を意識しながらプログラミング技法を習得できるよう工夫している。また、各回の授業において前回内容の小テストを実施し、基礎知識の定着を図っている。さらに、理解度の高い学生に対しては発展的な課題を提示し、個々の到達度に応じた学習を支援している。 卒業演習では、各自がオリジナルのiOSアプリ開発に取り組む。学生が自ら調べ、考えながら開発を進める姿勢を重視するとともに、個別の質問対応や提出レポートへのフィードバックを丁寧に行い、主体的な学びを支援している。
4.教育活動や教育業績 科目名④: 情報処理演習	教職必修科目であり、ExcelおよびExcel VBAの指導を行っている。 Excelでは、日本情報処理検定協会の問題を活用し、基本的な操作方法の説明後、各自で過去問題に取り組ませることで、実務的なスキルの定着を図っている。また、理解度の高い学生に対しては発展的な課題を提示し、個々の到達度に応じた学習を支援している。 Excel VBAでは、条件分岐や繰り返しといった基本的なプログラミング構造の理解を重視し、基礎的なプログラム作成に取り組ませている。加えて、PAD図をもとにコードを作成する演習を行い、処理の流れを整理しながら実装する力を養っている。 また、受講者をグループに分け、学生同士で教え合う活動を取り入れることで、理解の定着と主体的な学習姿勢の育成を図っている。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①： 情報システム入門</p>	<p>情報システム入門は、情報システムコースの必修科目として講義形式で2コマ実施した。受講者数の多いコマの方が相対的に高い評価であったが、自由記述から明確な要因は確認できなかった。授業では机回巡視を積極的に行い、質問しやすい雰囲気づくりに努めた。その結果、「質問しやすかった」との意見が多く見られ、一定の効果があったと考えられる。また、解答発表を取り入れたことで学習への意識向上が見られ、さらに発表前に教員が解答を確認することで、学生が安心して発表できる環境づくりにもつながった。一方、受講者数の少ないコマの方では理解度がやや低い結果となった。基本情報技術者試験の対策として過去問題を多く扱うため、難易度を高く感じている可能性がある。「講義と過去問の難易度差」に関する指摘もあり、ヒントや考え方を提示するなどの工夫を行っている。今後は、複数の解法の提示など指導方法の改善を図り、より理解しやすい授業の実施に努めたい。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②： メディア情報技術</p>	<p>メディア情報技術は、基本情報技術者試験の対策科目として、ヒューマンインタフェース、マルチメディア、データベース分野を扱った。授業は、前回小テストの解説、過去問題を取り入れた講義、実習、過去問題による小テストという構成とし、同一内容を講義・実習・問題演習と形式を変えて繰り返すことで、理解の定着を図った。受講者数はメディア情報技術①が13名、②が38名であり、2コマを実施したが、①の平均は②を下回る結果となった。自由記述では「授業の進行が遅い」との意見がある一方で、「進行が遅い」との指摘も見られ、進度設定については今後、学生の理解状況を踏まえた柔軟な対応が必要であると考えられる。その他、「板書の時間が十分に確保されている」「スライドが見やすい」「課題量が適切である」「発表前に解答を確認してもらえる点が良い」「個別対応が丁寧である」などの意見があり、全体として概ね良好な評価が得られた。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③： 情報処理演習</p>	<p>情報処理演習では、ExcelおよびExcel VBAを扱い、2コマ実施した。コマ間で結果に大きな差は見られなかった。自由記述では、「解説が丁寧で分かりやすい」「巡回しているためすぐに質問できる」といった意見が多く、授業運営やサポート体制について概ね好評であった。一方で、「自分で考えて取り組もうとした際にすぐに指摘が入り、十分に考える機会が得られない」との指摘も見られた。今後は、学生の理解状況や学習段階を踏まえ、適切なタイミングで支援を行うよう留意し、自主的な思考を促す指導とのバランスを図っていく必要がある。また、SAによる支援については評価が高く、学習支援体制として有効であったと考えられる。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>実習科目においては、学生の習得度の差に対応するため、基礎課題に加えて理解度の高い学生向けに難易度の高い発展課題を準備し、個々の到達度に応じた学習機会を提供している。これにより、基礎の定着を図るとともに、より高度な内容に挑戦できる環境づくりを意識している。</p> <p>情報処理演習では、テーブルごとにグループを設定し、学生同士で教え合う学習形態を取り入れている。互いに説明し合うことで理解を深めるとともに、主体的に学ぶ姿勢やコミュニケーション力の育成を図っている。</p> <p>情報システム入門においては、問題演習の時間に教員が積極的に教室内を巡回し、「質問があればすぐに対応する」という姿勢を明確に示すことで、学生が質問しやすい環境づくりに努めている。これにより、つまづきを早期に解消し、学習の停滞を防ぐことを意識している。</p> <p>また、情報システム入門およびメディア情報技術では、基本情報技術者試験の過去問題を活用した演習を行っているが、学生による解答発表の前に教員が内容を確認することで、学生が安心して発表に取り組みやすくなるよう配慮している。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>実習科目においては、学生の習得度に応じた指導を行うため、基礎課題に加えて難易度の高い発展課題を準備した。実際にこれらの課題に取り組む学生も見られ、学習意欲の高い学生に対する支援として有効であったと考えている。</p> <p>情報処理演習では、テーブルごとにグループを設定し、学生同士で教え合う学習形態を取り入れた。その結果、「分からない箇所を教え合う形式が良い」といった意見が見られ、概ね好評であった。同じ立場の学生同士の方が質問しやすい場合もあることから、今後も継続していく予定である。</p> <p>情報システム入門では、問題演習の時間に教員が教室内を巡回し、随時質問を受け付ける体制をとることで、学生が演習に集中できる環境づくりを行った。その結果、回を重ねるごとに質問する学生が増加し、「質問しやすかった」「実際に問題を解くことで理解が深まった」といった評価が得られた。また、授業冒頭に前回内容のスライドを提示し、欠席者には動画で補完するよう促すなど、学習機会の確保にも配慮した。</p> <p>基本情報技術者試験の過去問題については、年4回の更新に対応し、常に最新の問題を授業に反映していく。</p>	
---	--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 助教

氏名： 宮島 彩

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

フードビジネス業界で必要とされる食について、調理を通して理解してもらい、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につける。特に調理学においてはビジネス科目と関わりや地域との関連性にも触れ、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につける。また、調理学実習や食品官能評価の授業を通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につける。そして、フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につける。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：調理学	調理は、食品素材が食べ物となって喫食者に提供される最終過程である。フードスペシャリストとして調理についての確かな知識が求められており、主に「おいしさの設計」、「調理操作」、「食品素材の調理特性」、「調理と食品開発」について学ぶ。フードスペシャリストに必要な調理学の知識を習得できる。調理は理論だけでなく技術も重要であるため、調理系の実習科目や日常生活での調理において応用できるようになるように、同時期に開講している調理学実習と内容をなるべくリンクさせて行っている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：調理学実習	調理は、食品素材が食べ物となって喫食者に提供される最終過程である。フードスペシャリストとして調理についての確かな知識が求められており、主に「おいしさの設計」、「調理操作」、「食品素材の調理特性」、「調理と食品開発」について学ぶ。フードスペシャリストに必要な調理学の知識を習得できる。調理は理論だけでなく技術も重要であるため、調理系の実習科目や日常生活での調理において応用できるようになるように、同時期に開講している調理学実習と内容をなるべくリンクさせて行っている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：食品官能評価	フードスペシャリストには食品についての深い知識とそれらの品質について見抜く技能が必要である。食品の「化学的・物理的評価法」及び、嗜好に直接結びつく「食品官能評価法」について講義と実験、実習を通して学ぶ。商品開発に携わる場合、自ら食品の評価をするだけでなく、パネリストに評価をしてもらいデータを集計し結論を出すスキルが必要となるため、食品官能評価の基本的な知識を学んだ上で、実際に食品官能評価を計画・実施できるようにグループごとでテーマとなる食品を決め、食品官能評価を一から体験する。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：調理学	調理学の理解度は今年度も3.6以上となり、目標を達成した。授業内で定期的に小テストを実施しているため、授業の復習をおこなうきっかけとなっている。授業の最後に解いてもらうフードスペシャリストの練習問題を増やし、フードスペシャリストの出題傾向などについても説明した。調理学で学んだ内容を実際に調理学実習でおこない、体験することで知識が定着し、理解度が上昇したと考えられるため、今後も継続していく。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：調理学実習	調理学実習の理解度は2クラスの平均が3.7以上であった。調理学実習は、調理学と並行して授業を行っているため、内容がなるべくリンクするように献立を調整し、講義で勉強した内容を実践することで理解度が高くなっている。作業手順を学生目線で分かりやすく説明するように心がけており、学生の調理中も各調理台を見回り、質問への対応や作業の細かい指導等を行っている。この実習を通して学生同士のコミュニケーションが深まったり、調理の楽しさを実感し家でも調理をする機会が増えるきっかけとなったため次年度も学生の視点になって実習内容を検討していく。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食品官能評価	食品官能評価の理解度は3.4～3.5であった。授業資料を学生がいつでも確認できるようにWebClassに掲載することで、授業後の復習に役立てられている。学生が企画運営する食品官能評価実習では最終週に報告会を行うため、他の班の結果や考察から様々な商品について詳しく知ることができ、対象者（消費者）の特徴についても学ぶことが多くあるため、今後も継続していく。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	食品官能評価の授業において、グループワーク実施時に自分の役割や自分が努力したことを今年度も受講者全員に1人1人から聞き取りをおこなった。全員が自分の役割やグループのメンバーの役割、努力した事を把握することで、グループワークをスムーズにおこなうことができ、学生の課題への取り組みや満足度も向上した。グループワークを伴う他の科目でも実施を検討していく。
-------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>食品官能評価では、昨年度に引き続き学生の企画運営する食品官能評価実習の際に、1人1人の役割を明確にして、1人ずつ自分が頑張ったことや作業をする上で困っていること等の聞き取りをおこなった。1人ずつ対応することで自分がやるべきことをしっかりと把握し、グループワークをスムーズに進めることができた。次年度も安全に全ての実験実習と学生が企画運営する官能評価実習やグループワーク、プレゼン発表会が行えるように設備や授業スケジュールを整える。受講生から食品官能評価の授業の中でも定期試験までに小テストを実施してほしいとの意見があった。次年度は小テストの実施を検討し、今年度よりも更にスムーズに進み理解度が向上するように、授業全体の流れを再度検討していく。</p> <p>調理学と調理学実習においては、今年度は昨年度に引き続き、調理学においてフードスペシャリストの練習問題を解く時間を増やしたため、次年度も継続して行い、フードスペシャリストの合格率向上に貢献する。調理学の講義内容と調理学実習のポイントをリンクさせて説明することで、理解しやすくなり、今年度は調理学の理解度が向上した。今年度は昨年度に引き続き、調理学においてフードスペシャリストの練習問題を解く時間を増やしたため、次年度も継続して行い、フードスペシャリストの合格率向上に貢献していきたい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：助教

氏名：山田 直子

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を推進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私は、立学の精神である「自由と責任」を教育の根幹に据え、学生が主体的に学修へ取り組み、自らの判断に基づいて行動できる能力を育成することを重視している。管理栄養士を志す学生にとって、知識の獲得のみならず、得られた知識を適切に活用し、社会の多様な場面において責任ある行動を選択できる力は不可欠である。そのため、講義で得た知識を実習において具体的な体験として深め、さらにその実践経験を講義内容の理解へと還元するという循環的な学修過程を重視している。この学びを通して、科学的根拠に基づく思考力と実践的技術を統合的に育成することを教育の基本方針としている。

調理学は、食べ物と栄養に関する基礎的理解を形成する重要な科目であり、栄養学の専門領域を学ぶうえで基盤を構築する役割を担っている。調理操作に関する知識や技術の習得に加え、食文化や食に関わるマナーといった教養的側面を涵養する点においても意義深い科目である。基礎科目としての調理学が、応用栄養学、臨床栄養学、公衆栄養学、給食経営管理などの専門科目へと円滑に接続されるよう、講義では各回のテーマと要点を明確化し、学生が学修内容を自らの経験として実感できるよう教育設計を行っている。知識の羅列にとどまらず、学修内容が実践にどのように結びつくかを理解させることで、学びの主体性と深い理解を促進している。調理学実習においては、包丁の扱い方や基本的な切り方などの基礎技術から、基礎的メニュー、行事食など多様な調理操作に至るまで、段階的かつ体系的に学修できるよう指導している。食材にはそれぞれ固有の特性が存在し、その理解は栄養価の保持、安全性の確保、嗜好性の向上など、栄養学の実践において極めて重要である。実習を通じて食材の特性を体験的に理解し、調理操作の科学的根拠を踏まえた判断ができる能力を育成している。また、調理学実習は少量調理を基本とするが、この経験は高学年で実施される給食経営管理実習における大量調理へと発展する基盤となる。そのため、実習の段階から大量調理を見据えた視点を学生に意識づけることも重要な教育的課題であると考えている。

さらに、調理学実習はグループワークを中心に展開されるため、コミュニケーション能力、協働性、リーダーシップ、問題解決能力など、管理栄養士として求められる社会的スキルの育成にも寄与している。栄養の専門職は、病院、福祉施設、学校、行政、食品産業など多様な場で他職種と連携しながら業務を遂行する必要がある。そのため、知識や技術のみならず、他者と協働し、状況に応じて適切に役割を果たす能力を育むことは、専門職教育において不可欠である。

以上のように、私は調理学教育を通じて、学生が知識・技術・態度の三側面を統合的に身につけ、栄養の専門職として自立し、社会の多様な場において健康の維持・増進に貢献できる人材へと成長することを目指している。自由な発想と主体的な学びを尊重しつつ、責任ある行動を選択できる専門職としての姿勢を育成することこそが、私の教育理念の中心である。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

<p>1.教育活動や教育業績 科目名①：調理学</p>	<p>調理学の講義においては、大教室での一方的な知識伝達を避け、学生の主体的学修を促進するための双方向的な授業運営を重視している。具体的には、講義中に学生へ問いかけを行い、内容の理解を確認しながら進行することで、受動的な学びから能動的な学びへの転換を図っている。また、重要な概念や国試出題内容に関連する要点については、学生に線を引かせるなど視覚的な強調を行い、学修の焦点化と理解の深化を促している。授業の終盤には、毎回短いレポートを課している。この取り組みは、授業内容を学生自身が言語化し、学修内容を振り返る機会を提供するものであり、理解の定着と自己評価を促す効果を有している。さらに、次回の授業冒頭において前回レポートの内容に基づく解説を行い、知識の反復と補強を図ることで、長期記憶への定着を意図した教育的循環を形成している。また、各章ごとの学修内容を体系的に整理し、理解度を客観的に確認するため、次週に小テストを実施している。小テストは、学生が自身の理解度を把握する機会となることにも、学修の継続的な動機づけとして機能している。また、教員側にとっても、学生のみならず理解の偏りを把握し、授業改善へとつながる重要なフィードバックとなっている。</p> <p>以上の取り組みにより、調理学における講義は、知識の獲得にとどまらず、理解の深化・反復・定着を重視した構造的な学修過程を形成している。これらの教育活動は、学生が調理学の基礎的知識と技術を確実に身につけ、応用科目や実習へと円滑に接続できる学修基盤を構築することに寄与している。</p>
---------------------------------	--

<p>2.教育活動や教育業績 科目名②：調理学実習</p>	<p>調理学実習においては、通年で実習を実施する科目の特性を踏まえ、可能な限り実習回数を確保し、学生が繰り返し体験を積むことで基礎的技術を確実に習得できるよう教育設計を行っている。調理学の講義で学んだ理論を実習において具体的な体験として深化させることを重視し、単に調理操作を行うだけではなく、食材の特性や調理科学に関する補足知識を適宜説明することで、実践と理論を結びつけた学修を促進している。実習内容は、包丁の持ち方や基本的な切り方といった初歩的技術から始まり、回数を重ねるごとに難易度が段階的に上がるよう体系的に構成している。これにより、学生は基礎的技術を確実に身につけたうえで、応用的な調理操作へと進むことができ、技能の発達段階に応じた学修が可能となっている。また、調理操作に伴う栄養価の変化や調味%の算出方法など、栄養学的視点を踏まえた内容も実習に組み込み、学生が自ら計算し理解できるよう段階的に支援している。さらに、実習ではグループ単位で調理を行うため、協働性、コミュニケーション能力、役割分担の調整力など、管理栄養士として求められる社会的スキルの育成にも寄与している。実習中の観察や指導を通じて、学生が主体的に役割を担い、他者と協力しながら課題を遂行する姿勢を育むことを重視している。</p> <p>以上のように、調理学実習では、基礎技術の習得、理論と実践の統合、栄養学的視点の導入、そして社会的スキルの育成を総合的に行う教育活動を展開している。これらの取り組みは、学生が調理学の基礎を確実に身につけ、応用的学修や専門職としての実践へと円滑に移行できる学修基盤の形成に寄与している。</p>
<p>3.教育活動や教育業績 科目名③：食事計画論</p>	<p>食事計画論においては、大教室での一方的な講義に陥ることを避け、学生の主体的学修を促進するために演習形式を積極的に取り入れている。食事計画は、調理学の基礎知識を実践的な献立作成へと応用する科目であるため、単なる知識伝達ではなく、学生自身が計算し、考え、判断する学修過程を重視している。授業では、栄養価計算や調味料の配合比、ポーションサイズの設定など、管理栄養士として不可欠な計算方法を習得させるため、プリント内に随時計算作業を組み込み、学生が自ら手を動かしながら理解を深められるようにしている。また、授業中に質問や確認ができる時間を確保し、学生がつまづきをその場で解消できるよう配慮している。このような双方向的な授業運営により、学生は受動的な学びから能動的な学びへ移行し、理解の定着が促進されている。さらに、食事計画論では、最終的に学生自身が考案したレシピについて、ポーションサイズ、調味%、調理手順が適正であるかを自ら検証し、完成させる力を育成することを目標としている。これは、管理栄養士として求められる献立作成能力の基礎であり、実践的な判断力を養う重要な学修過程である。授業では、学生が自立して献立を構築できるよう、計算方法の理解からレシピの妥当性評価に至るまで段階的に支援している。</p> <p>今後は、管理栄養士として必要な基本的知識と献立作成スキルをより確実に習得させるため、授業内容のさらなる充実を図り、理論と実践を統合した教育を一層推進していく所存である。</p>

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：調理学</p>	<p>調理学における授業評価アンケートの結果は、近年継続的に向上しており、学生から一定の評価を得ている。しかしながら、講義形式の授業である以上、学生の集中力が持続しにくい場面があると考えられる。特に、一方的な説明が続く際には、学生が受動的な姿勢に陥りやすく、学修効果が低下する可能性がある。この点については、授業改善の重要な課題であると認識している。そのため、授業運営においては、学生が主体的に学修へ参加できるよう、手を動かす活動を意図的に取り入れている。具体的には、重要箇所を線を引かせる、メモを取らせる、問いかけを行い考える時間を設けるなど、学生が能動的に授業へ関与できる工夫を行っている。また、毎回の授業の終わりにレポートを記述させる取り組みを継続しており、学生が授業内容を振り返り、理解の要点を整理する機会を確保している。このレポートは、学生自身の学修の定着に寄与するとともに、教員にとっても授業内容の理解度を把握する重要なフィードバックとなっている。今後の改善点としては、プリント内の穴埋め形式の設問を増やし、学生が授業中に自ら考えながら内容を整理できる機会をさらに拡充したいと考えている。また、章末問題の解説を授業内で丁寧に行うことで、学生の理解をより確実なものとし、授業満足度の向上につなげたいと考えている。これらの取り組みを通じて、講義形式でありながらも学生の主体的学修を促進し、調理学の基礎的知識を確実に定着させる授業内容を今後も追求する。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：調理学実習</p>	<p>調理学実習における授業評価アンケートの結果は、近年継続的に向上しており、学生が実習を通じて知識と技術を効果的に習得していることが示唆されている。調理学実習は、調理操作の体験を中心とした科目であるが、栄養価計算方法やレシピの構成に関する演習も取り入れており、理論と実践を統合した学修が可能となっている。通年を通して基礎的なメニューから行事食、応用的なレシピまで幅広く扱うことにより、学生は段階的に技能を高め、講義科目以上に体験を通じた理解が深まっていると考えられる。特に、包丁の使い方、基本の切り方、飾り切りなど、多岐にわたる調理技術を扱うため、実習ではデモンストレーションを積極的にやっている。授業評価アンケートの自由記述欄においても、「作り方のコツが分かりやすい」「デモンストレーションが理解に役立った」などの肯定的な意見が多く寄せられており、視覚的・体験的な学修が学生の理解促進に寄与していることが確認できる。また、実習は学生の印象に残りやすく、学修意欲の向上にもつながることから、可能な限り実習回数を確保するよう工夫している。実習の積み重ねは、技術の定着のみならず、調理に対する自信の醸成にも寄与していると考えられる。今後の課題としては、学生がより主体的に技術を習得できるよう、実習内容のさらなる工夫が求められる。具体的には、応用的な調理技術の導入方法や、栄養価計算・調味%の理解を深めるための演習の充実などが挙げられる。これらの改善を通じて、学生が管理栄養士として必要な調理技術と栄養学的視点をより確実に身につけられるよう、授業運営の質を一層高めていきたいと考えている。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：食事計画論</p>	<p>食事計画論における授業評価アンケートの結果は、近年継続的に向上しており、学生の理解度および授業満足度が高まっていることが示されている。本科目は講義形式を基本とするが、学生が受動的な学修に陥らないよう、演習を積極的に取り入れ、各自のペースで課題に取り組める環境を整えている。授業中に計算作業やレシピ作成のプロセスをプリント上で行わせることで、学生が自ら手を動かしながら理解を深められるよう工夫している。また、質問しやすい雰囲気づくりを重視し、学生が疑問点をその場で解消できるよう配慮していることも、理解度向上に寄与していると考えられる。授業の目標は、学生自身が考案したレシピについて、ポーションサイズ、調味%、調理手順の妥当性を自ら判断し、適切な献立として構築できる能力を育成することである。授業評価アンケートの自由記述欄においても、「質問しやすかった」「自分で考える力がついた」などの肯定的な意見が多く寄せられており、学生が主体的に学修へ取り組める授業設計が効果を上げていることが確認できる。今後の課題としては、学生がより深い理解を得られるよう、重点的に指導すべき内容を明確化し、授業内での演習の質をさらに高める必要がある。これは、献立作成に関する高度な内容を段階的に導入し、管理栄養士として求められる実践的能力の育成につながる授業内容へと発展させていきたいと考えている。これらの改善を通じて、学生が食事計画論の知識と技能を確実に身につけ、応用的な献立作成能力へとつながられる授業内容を今後も追求していく。</p>
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業改善を目的として、学内外のFD活動に積極的に参加し、教育内容および授業運営の質向上に努めている。特に、管理栄養士会が主催する講習会や関連学会への参加を通じて、最新の知見や教育的示唆を得ており、それらを授業内容へ適宜反映している。これらの活動は、管理栄養士養成教育において求められる専門性の更新と教育改善の双方に寄与していると考えている。講習会や学会では、調理における実践的手法、SDGsに関連した食の持続可能性に関する取り組み、食物アレルギーに関する最新情報など、現代の栄養学教育に不可欠なテーマが取り上げられている。これらの内容は、学生が将来の実務において必要とする知識であり、授業に新たな視点を加えるうえで重要である。そのため、得られた知見を講義や実習に組み込み、学生が最新の栄養学的課題を理解し、実践に活かせるよう教育内容を更新している。また、授業評価アンケートの結果や学生からの自由記述をFD活動の一環として分析し、授業改善に活かしている。学生の理解度や満足度を把握することで、授業運営の課題を明確化し、改善策を検討することが可能となっている。これらの取り組みは、教育内容の質保証と継続的改善に不可欠であり、今後も継続して実施していく予定である。今後は、学外のFD講習や学会活動への参加をさらに充実させ、教育者としての専門性を高めるとともに、授業内容に最新の知見を反映し続けることで、学生にとってより価値の高い学修環境を提供していきたいと考えている。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年度においては、授業評価アンケートの平均値が令和6年度と比較して上昇しており、学生の授業理解度および満足度が向上していることが示された。講義形式および実習形式の双方において、それぞれの特性に応じた教育的工夫を行い、学生が主体的に学修へ取り組み、知識や技術の習得・向上に励むことができるよう働きかけたことが成果につながったと考えられる。</p> <p>授業運営においては、課題、レポート、小テストなど、個々の取り組みが成績に反映される仕組みを導入し、学生が自ら学修に向き合う姿勢を促した。また、授業の予習・復習を円滑に行えるよう、授業予定表やスケジュール連絡を毎週提示し、学修計画を立てやすい環境を整備した。さらに、毎回の授業において振り返りレポートを課し、授業内で質問時間を設けるなど、理解の定着を促す取り組みを継続して実施した。これらの取り組みは、学生の主体的学修を支援し、授業評価の向上に寄与したと考えられる。</p> <p>令和8年度においては、令和7年度に得られた成果を維持・発展させることを目標とする。具体的には、各科目における授業評価アンケートの項目および平均値が継続して高水準を保てるよう、授業内容のさらなるブラッシュアップを図る。講義・実習の双方において、学生が主体的に学修へ参加できる仕組みを強化し、知識と技術の定着を促す教育方法を一層充実させる。また、授業内容の質を高めるため、教材の改善、演習の拡充、学修支援の強化などを計画的に進め、教育の質保証と継続的改善を推進する。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：健康栄養学科

職位：教授

氏名：山田 ゆかり

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

基礎教育科目（教養教育）が主担当であり、「大学のディプロマ・ポリシー：立学の精神に則った知識・技術と人間力の修得する 総合的な学修経験を積むことで創造的思考力を培い、人間力を高める」を踏まえて、教養を深め、自らの心の健康に配慮して生きていく力を高め、将来の専門性の修得に必要な資質の養成を行うことができるように教育をする。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：心理学	講義と実体験をできるよう工夫した演習による授業を実施。令和7（2025）年度前期受講者231名（3クラス編成）。うち1クラスは大規模クラス（121名）であるが、体験的な要素を交えた授業、学生の実体験に即した内容を心がけて、知識の修得だけにとどまらず、自らの特性を振り返り、人間力を育てることができるように授業を行っている。
2.教育活動や教育業績 科目名②：人間関係論	講義と実体験を交えた演習による授業を実施。令和7（2025）年度後期受講者165名（3クラス編成）。後期開講で受講者数はやや落ち着いた。体験的な要素を交えた授業、学生の実体験に即した内容を心がけて、知識の修得だけにとどまらず、自らを振り返り、現実生活での人間関係の改善に役立てることを確認し、人間力を育てるように授業を行っている。
3.教育活動や教育業績 科目名③：卒業演習Ⅰ・Ⅱ（健康栄養学科）	学生が個別の研究テーマを設定し、資料を収集し、卒業論文を完成するように指導している。卒業論文のテーマが、管理栄養士としての職業に生きるように配慮している。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：心理学</p>	<p>心理学について、大規模クラス解消対応のため、3クラス開講としている。受講者数は、58名、121名、52名とクラス規模格差はまだ残る一方、クラスによる評価結果の差はあまりない。各クラスの授業の理解度は3.76、3.72、3.64、満足度は3.76、3.81、3.67となっており、総じて高い評価となっている。 このほか3クラス共通して評価結果が高いのは、「5. 教員の話し方 (3.85、3.82、3.79)」「6. 教科書やプリント (3.80、3.83、3.77)」「8. 授業の進み方 (3.78、3.82、3.72)」「9. 課題の量 (3.80、3.80、3.74)」等である。評価が3.5を下回ったのは、「1100000203」クラスでの「4. 自主学習でのシラバスの有効性 (3.36)」のみである。自由記述については、「プリントや実践を踏まえた授業でとても受けやすかった」「講義は興味深く、心理学をとって良かった」「板書の字が見やすい」「話が聞きやすかった」「性格検査や実験など実際に行き確かめるやり方が楽しくできた」「すぐおもしろかった」「心理について学んだことで自分についての理解が深まった」「授業中の例が分かりやすくなった」など肯定的な自由記述が多くなっていった。学生が努力した点としては、出席やノートテイクの他に、「プリントを使って復習できた」「教科書などで調べた」などより積極的な行動が増加している。今後も評価される授業となるよう努力する。</p>
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：人間関係論</p>	<p>人間関係論は3クラス開講である。受講者数は29名、90名、42名であり、クラス規模には依然として3倍以上の差がみられた。評価結果のうち、満足度は、3.81、3.76、3.97、理解度は、3.69、3.66、3.83であり、どのクラスでも高くなっている。1100000301、1100000302の2クラスは担当者の校務との関連でオンデマンド形式によるリモート授業を1回行ったが、対面授業時での「復習」に配慮した効果か、特に大きな影響はなかった。また、各クラスとも「話し方」や「プリント」の評価が特に高くなっていた。また、いずれのクラスでも評価が3.5を下回る項目はなかった。自由記述では、「話し方や声が聞き取りやすい」「プリントがわかりやすかった」「話が面白い」「説明がわかりやすかった」「日常生活に役立つ内容」「楽しい」など授業内容を肯定的に評価するコメントが多くなっている。なお、令和8年度以降は、この科目の担当なし。</p>

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>授業アンケートを用いて受講者の自由記述コメントを中心に情報を収集し、授業改善に役立てている。日本心理学会、日本心理臨床学会等の学会、日本臨床心理士会、愛知県臨床心理会、日本臨床心理士資格認定協会等の研修会に参加して最新の動向についても授業に反映している。</p>
-------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和7年度の目標

<p>令和7年度実績 授業の理解度 心理学：3.76、3.72、3.64、人間関係論：3.67、3.78、3.83（教育心理学：3.57 教育相談論：3.83 特別支援教育：3.51） 授業の満足度 心理学：3.76、3.81、3.67、人間関係論：3.81、3.76、3.97（教育心理学：3.53 教育相談論：3.67 特別支援教育：3.51） 授業評価については、すべて良好な結果であった。自由記述についても積極的、肯定的なものも多く、今後の授業実施について、現在の方法を維持していくことの妥当性が支持された。 教職課程科目について2年次開講の3科目を担当した。例年2年次は、教職課程を辞める学生が多くなる時期であるが、積極的な意義を示すことで、令和6年度は辞退1名に留めることができた。 卒業演習において、4名が自らのテーマに沿って、卒業研究を完成した。 令和8年度の目標 学生による授業評価については、現状を維持し、基礎教育科目が学生の人間力向上に役立つように授業を実施する。さらに、学生の達成度を高め、卒業後の専門性、生活に対しても方向づけを行い、十分な学修成果を得られるよう指導する。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科：情報メディア学科

職位：教授

氏名：吉田友敬

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエイター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

大学における教育の基盤として、学生が自身の人生の目標を定め、そのために自己研鑽をし、教育成果をもって希望する進路に進めることが必要である。

そのための教育理念として以下のような方針を立てている。

- ・学生が学修内容に興味を持ち、自ら進んで学修を楽しめること
- ・各科目の学修を通して、一定の学修成果・達成感を得られること
- ・前提知識としては、すべての学生に寄り添い、可能な範囲で個別に対応すること
- ・対面授業でも、可能な範囲で家庭での学修が可能にすること

また、演習授業では上記に加え、以下のことに留意している。

- ・学生の自己実現を促し、協働作業を通して人間関係・コミュニケーションを広げること
- ・演習での学修を通して目標を達成し、高い自己評価を得ること

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：デジタルサウンド入門	1年次前期の科目であり、音楽的素養のない学生であっても、感覚的な制作活動で魅力のある作品制作ができることを体験させている。 主な実習は大学のMacでのAudacityとGarageBandを使用しているが、同等の内容をiPadでも実習できるように配慮している。 音の編集作業を体験し、面白い音を作成したり、効果音を使うなどしてクリエイティブな学修ができるようにしている。 最終課題によって音の作品を制作し、優秀な作品はWebで発表している。1年前期ということもあり、Macの使い方から懇切丁寧に実習指導を行っている。 また、サウンド関係の検定問題を紹介し学生と一緒に考えさせて解説している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：音響学	2年後期の科目であり、実習先行のカリキュラムの中で理論的基礎を身につける科目である。 音響学に必要な理論的基盤と数学的基盤を、高等数学を用いずに学修する。WebClassを最大限に活用し、必要な資料を提示の上、学生各自が課題に取り組み形としている。課題の中には、応用的な内容を調べて答えるものもあり、学生にとっても興味深い設問内容としている。初めて音響学を学ぶ学生が多いため、5回に1回復習の回を設けて、知識の定着を図っている。 この科目においても、当年度からMIDI検定および映像音響処理技術者の検定問題を紹介して考えさせ、解説している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：各演習	担当する演習では、コンサートを開催することを大きな目標としており、これを達成することで学生が大きな達成感を得られるようにしている。 コンサートでは、学生の特性により、楽曲を制作する者、映像を制作する者、演奏発表を行う者、また、裏方スタッフとして音響、照明、舞台制作、録音さらには、ポスター・パンフレットのデザイン、Web制作、広報、配信用映像の編集などの役割分担を行って、規模の大きい協働作業を行っている。 コンサートの実現は、学生にとってもたいへんな負担であるが、成功したときの達成感は大いものである。 また、就職や卒業後の進路を見据え、さまざまな業界の研究をさせている。
4.教育活動や教育業績 科目名④：	

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和6年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：デジタルサウンド入門</p>	<p>全般的には、今年度もおおむね良好な評価内容であった。この授業は基本的には学生の需要によく応えているものと考えられる。 今年度目立った問題としては、特に1年生について、例年よりも欠席が多かったことが挙げられる。上級生については例年の課題であるが、1年生がこれだけ欠席したのは初めてのことである。この授業だけの問題ではないようで、根本的な対策が必要なものと思われる。 自由コメントもほとんどは良好な内容である。その中で、説明中にすでに作業を始めている学生についてのクレームがあり、この扱いを今後どうするか少し課題である。とはいうものの、説明の時間、作業の時間とその都度念を押すのは小学生に対する指示のあり方であり、これを大学生に対して行うのは少々疑問ではある。説明を聞くのに邪魔になるのでなければ、各自のペースで進めてもいいかもしれず、逆にそのような設定にしてもいいのかもしれない。</p>
<p>2.令和6年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：音響学</p>	<p>学生の満足度、理解度ともおおむね良好な結果であった。現在一番の課題は、学生の課題の成績が高すぎるため、最終の評価時に調整が必要になることである。調整不要な程度に課題の難易度を上げるとは、学生のモチベーションを下げるにつながらるため、解決方法は単純ではない。今年度の対応として、一部の課題について得点のフィードバックのタイミングを遅らせるなどを行った。若干の効果はあったが、全体としての高得点傾向は変わらなかった。次年度に向けて改めて検討する予定である。 当年度より、MIDI検定および映像音響処理技術者の検定問題を紹介したが、学生に好評であり、今後も継続したい。</p>
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：</p>	
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：</p>	

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<p>主にサウンド関係の授業を中心に、オープンクラスとして、他の先生の授業を拝見している。 また、実務家教員の先生に学修についての意見を求め、アドバイスを受けている。 関係業界の企業の担当者や社長などとコンタクトをとり、業界に必要な人材の資質を聞いている。 授業についてのコメントを関係の学生から日常的に聞いている。</p>
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和6年度実績 授業の理解度 デジタルサウンド入門：3.66、3.68、3.71 音響学：3.56、3.69 授業の満足度 デジタルサウンド入門：3.71、3.86、3.84 音響学：3.57、3.63 演習の総まとめとしてのコンサートを文化フォーラムの中ホールで開催し、大きな会場にもかかわらず、内容の濃いコンサートとして成功した。 当年度は特に3年生を中心に、学生が各部門に分かれ、高度な演出を実現した。来場者が100名を超えたのも学生の努力によるものである。</p> <p>その他の業績：令和7年度情報文化学会全国大会「情報系学部における通信制高校出身者支援の試み」</p> <p>令和8年度の目標 学生による授業評価については、現状を維持し、学生の満足度がより上がるよう検討する。 演習における学生の達成度を高め、より大きな達成感を得ることで、卒業後の進路に向けての足がかりとする。</p>
--

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 教授

氏名： 吉田 洋

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース
モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。
2. 映像メディアコース
映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。
3. サウンド制作コース
音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。
4. メディアデザインコース
グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインタフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

立学の精神にあるように自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨くべく教育を行っている。学園動続年数33年 常に立学の精神を意識して教育を行っている。部長室にはドアに立学の精神をドアに貼り付け、講義前に一目見てから教室に向かっている。フードビジネス学科のディプロマポリシー1にあるように授業ではビジネスの基本を体系的に理解できるように講義を行ってゆく。アクティブラーニングを実施している。基礎科目は立学の精神をもとにまた情報メディア学科の専門科目については情報の基礎を講義し、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成できるように意識している。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：簿記	フードビジネスにおける簿記の重要性について力説している。わかりやすい授業を心がけている。教科書のほかにそれを補強する教材や練習問題を配布している。小テストを実施し、平常点に加えている。アクティブラーニングを実施している。将来、会計不正を起こすことのないように倫理面の教育も重視している。
2.教育活動や教育業績 科目名②：企業会計	フードビジネスにおける企業会計の重要性について力説している。弥生会計というソフトを用いて実践的でやすい授業を心がけている。教科書のほかにそれを補強する教材や練習問題を配布している。小テストを実施し、平常点に加えている。アクティブラーニングを実施している。将来、会計不正を起こすことのないように倫理面の教育も重視している。
3.教育活動や教育業績 科目名③：卒業演習Ⅰ、Ⅱ、卒業研究	卒業演習ではフードビジネス最新キーワード64というテキストを用いて食ビジネスの未来を検討している。フードビジネス学科で学ぶ内容の多くをカバーしているので学科の総復習となる。学生が希望する研究テーマは多岐に渡るので担当教員も学生と一緒に同じテーマを1から学ぶような意識で対応している。現場を少しでも理解できるように工場見学会を実施したり、地域社会に関心が持てるように祖父江イチョウ講演会の参加を促すとともに、そこでゼミ学生のポスター展示などを行っている。卒業研究発表にはゼミ生全員が積極的に取り組み、学科の報告会で報告した。
4.教育活動や教育業績 科目名④：経営学	全学部全学科基礎教育科目として学問を通して知識技術を磨くという立学の精神のもと経営学の講義を行っている。わかりやすい授業を心がけている。教科書に代わる教材や練習問題を配布している。小テストを実施し、平常点に加えている。アクティブラーニングを実施している。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：簿記	授業評価は3点前半であるため更なる改善があることは理解している。数字を見るだけでいや。簿記がさっぱりわからない受講生も一部にいる。プリントを配布しただけでは困難なようだ。本人にやる気があるのであれば、オフィスアワーなどを使って個別指導をしたい。アクティブラーニングを増やしたい。
2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：企業会計	授業評かは3.7程度 徐々に上昇している。学生の理解度を見ながら徐々に講義のペースを速くしたり遅くしたりしている。今後は、会計数値の意味を丁寧に説明する。会計ソフトや弥生会計を用いて授業を行っているため実践的な授業としている。就職後役に立つように税務に関する授業も取り入れたい。アクティブラーニングを増やしたい。授業アンケート結果は比較的良好。
3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：卒業演習Ⅰ、Ⅱ、卒業研究	この科目には授業評価アンケートはない。全員が卒業研究を報告することができた。
4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：経営学	スライドがわかりやすかった、経営について詳しいことを学ぶことができ良かったなど肯定的な意見が多かった。プリントを毎回配布してほしいという要望があったので適宜プリントを配布する。アクティブラーニングを増やしたい。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープンクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み	授業アンケートを用いて受講者から指摘のあった事項について改善を進めている。簿記については日本簿記学会、企業会計については日本会計研究学会、ITマネジメント、ITストラテジについてはシステム監査学会、日本セキュリティマネジメント学会の学会などに参加して最新の動向について把握し授業に反映している。学会で同じレベルの他校の教員と非公式に講義内容の意見交換をしている。
-------------------------	---

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<p>令和7年の成果・教育業績：令和7年度前期は授業評価の理解度はやや芳しくなかったが、後期は概ね3.5以上の評価が得られた。企業会計については副読本として続々ズバツとわかる会計学（同文館）共著を出版したので副読本として使用している。令和7年度の成果、日本簿記学会、日本会計研究学会、日本経営学会、システム監査学会などに参加して最新の動向について授業に反映した。授業評価 全項目3.5以上を目指す。簿記については使用する教科書をビジュアルなものに変更する。企業会計についてはエクセルを用いたフードビジネスと管理会計についても1回程度講義に追加をしたい。ヒューマニソースマネジメントについてはフードビジネスを題材に具体的なトラブルについて取り上げたい。経営学については引き続き中小企業・ベンチャー企業に関する講義を充実させたい。全科目アクティブラーニングを充実したい。本年度試験的に集中講義で実施した原価計算について次年度より本格的に始めるのでその準備と履修者集めを行いたい。現在、管理職であるため他校での講義ができないが、そのような機会があれば本学での講義も有用なものとなるであろう。また、所有している資格を活用し、実務を行う機会が欲しい。新たな視点から講義が可能となるだろう。令和8年度の目標はフードビジネス入門で学科の教科書を作成することになっており、専門の会計学の視点からより最新の知見を加え学生に理解しやすい内容で執筆したい。次年度より大学院の新しい科目の授業が始まる。しっかり準備したい。</p>

名古屋文理大学

令和7年度 ティーチング・ポートフォリオ

基幹教員

学科： フードビジネス学科

職位： 准教授

氏名： 渡邊 正樹

【立学の精神】

本学は、自由と責任を重んじ、学問を通して知識技術を磨き、健康を増進し、特に品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を育成する場である。

【健康栄養学科・ディプロマ・ポリシー】

健康栄養学科では、以下の要件を満たす学生に学士（栄養学）の学位を授与します。

1. 「社会・環境と健康」「人体の構造・機能および病気の成り立ち」「食べ物と健康」「食品衛生」「調理」など、食べ物と栄養についての基礎的知識と技術を身につけている。
2. 「基礎および応用栄養学」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」など、栄養に関する専門知識と応用技術を身につけている。
3. 病院、福祉施設、給食施設、食品業界、あるいは学校や官公庁など様々な社会の場で、人々の健康の維持・増進、病気の予防・治療を栄養と食事の両面から担うための科学的、実践的な能力を身につけている。
4. 主体的に課題に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【フードビジネス学科ディプロマポリシー】

フードビジネス学科では、以下の要件を満たす学生に学士（フードビジネス学）の学位を授与します。

1. フードビジネス業界で必要とされる食とビジネスの基本を体系的に理解し、フードビジネスの専門領域に関する知識、技術、および実践力を身につけている。
2. フードビジネスを通して社会に貢献するために必要な思考力と課題発見力を有し、問題を解決するためのコミュニケーション力と解決力を身につけている。
3. 地域およびグローバルな社会に関心を持ち、フードビジネスを通して社会の発展に貢献するための倫理観と責任感、および他者と協働する能力を身につけている。
4. フードビジネスについて主体的に学修に取り組み、自ら考える姿勢を持ち、修得した知識や技術を活用して問題を解決し、発信する能力を身につけている。

【情報メディア学科ディプロマポリシー】

情報メディア学部情報メディア学科では、情報システムやネットワークに関する知識と技術を身につけ、情報活用・分析能力、コミュニケーション能力、創作能力、課題解決能力を磨き、社会で実践的な活動ができる人材を育成します。「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアデザイン」の4つの専修コースでの学修を深め、専門的な知識・技術を修得するとともに、基礎学力・社会人基礎力を養成し、人間力を高めることを目指します。

これらの知識・能力を身につけ、卒業要件を満たした学生に卒業を認定し、学士（情報メディア学）の学位を授与します。

専修コースで学ぶ内容は以下のとおりです。

1. 情報システムコース

モバイルアプリやゲームなどユーザー向けシステムのほか、仕事や社会インフラのための情報システムを開発・運用管理できるシステムエンジニアや、情報システムの企画提案ができる情報ストラテジストを養成します。

2. 映像メディアコース

映像制作を中心として、アニメーション、CGなどを学びます。芸術的感性と企画力を活かし、映像作品制作技術、色彩についての知識、プログラミング技術などを修得し、幅広い分野で活躍できるビジュアル・スペシャリストを養成します。

3. サウンド制作コース

音響技術・楽曲制作を中心として、サウンド制作に関するさまざまな知識と技術を学びます。音楽の基礎的能力、MIDI技術やレコーディング技術、音響機器の操作を修得し、舞台や放送で活躍できる音響技術者、サウンドクリエーター、音源開発エンジニアなど、サウンド関連のスペシャリストを養成します。

4. メディアデザインコース

グラフィックデザイン、Webデザイン、ユーザーインターフェースデザイン、デジタルファブリケーションなどのメディアデザインを学びます。多様なメディアにおける情報創造、コミュニケーションのためのデザイン技法を修得し、社会の諸問題に対し学際的な問題解決策を提示できる人材を養成します。

○立学の精神やディプロマ・ポリシーなどを踏まえて、自身の教育理念を記載してください。

私の教育理念は「企業ニーズに応える人材の育成」です。

「立学の精神」が目的とする「世界から信頼される日本人」の育成にあたっては、まずは、卒業生が就職先の企業・組織から信頼される存在となることが必要であると考えます。

本学の教育プログラムを終えた学生が、まず評価される場が、就職先の企業・組織です。ここで信頼を得ることができなければ、「世界から信頼される日本人」となることはないでしょう。

このような考えに基づき、企業から信頼される人間、そして「世界から信頼される日本人」を育てるべく、企業ニーズへの対応に主眼を置いた教育活動を行っています。

○教育理念を実現するために、科目ごとで行っている教育活動や教育業績（講義、実験実習、演習など）

1.教育活動や教育業績 科目名①：マーケティング論	<ul style="list-style-type: none">・卒業生の多くは日本の企業に就職します。この日本企業の特徴が、「現場」を重視した企業経営です。しかし、文字情報中心の座学では、この「現場」という概念を学生に理解させることは困難です。そこで、この授業では、企業の事例を扱った映像資料を活用し、「現場」への想像力を養うことに力を入れています。・遅刻については厳しく指導しています。新入社員が入社直後、社内から信頼を得るためには、まずは絶対に遅刻しないことが重要です。遅刻について、多くの日本企業では厳格な規律が保たれており、新入社員が1分でも遅刻したとすれば、そこで一瞬にして社内での信頼を失うことになります。このような事態を卒業生が招くことがないよう指導しています。
2.教育活動や教育業績 科目名②：商品開発	<ul style="list-style-type: none">・フードビジネス学科には、将来、商品開発の仕事をしてみたいという学生が多く入学してきます。しかし、実際、企業の商品開発部門が日々どのような業務を行っているかについては、ほとんどの学生がよくわかっていないのが実状です。そこで、この授業では、食品メーカーのマーケティング・リサーチ部門に在籍していた私の経験を活かし、商品開発の現場の業務を詳しく解説するとともに、そこで役立つ実践的な知識の修得に力を入れています。・具体的には消費者の「消費者インサイト」を把握することの大切さを理解するとともに、「消費者インサイト」を適切に捉えるための調査方法について学んでいきます。
3.教育活動や教育業績 科目名③：基礎演習	<ul style="list-style-type: none">・「スガキヤ」を運営するスガキコンスツムズとの産学連携事業を行いました。・東海地方でお馴染みの「スガキヤ」とコラボして、クリスマススイーツの共同開発を行いました。これにより、自らが考えたメニューが形となっていく過程、そのメニューが身近な外食チェーンの店舗でお客様に受け入れられる喜びを体験させることができました。合わせて低価格外食チェーンの商品開発では、味だけではなく、コストや店舗での制約（限られた調理設備・少ない工程数による効率的調理）についても考慮する必要があることを学ばせることができました。
4.教育活動や教育業績 科目名④：専門演習	<ul style="list-style-type: none">・学科の取り組みとして10年以上続いている産学連携の商品開発プロジェクト「NBMS」を令和5年度から引き継ぎ、専門演習の中で取り組んでいます。・フードビジネス学科には、将来、商品開発の仕事をしたと考えている学生が多数在籍します。しかしながら、実際の商品開発の仕事や、企業内での商品開発部門の位置づけ等について、具体的に理解できていない学生が多いのが実状です。そこで私の演習では、「商品開発では、アイデアを考えることよりも、アイデアを実現していく過程の方が大変である」ということの理解に重きを置いて指導を行っています。これは企業の商品開発の現場ではしばしば直面する事態であり、将来、商品開発の仕事をしたと考えている学生には必須の知識であると言えるからです。

○授業評価アンケート結果と、授業における自己省察を記載してください。

<p>1.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名①：マーケティング論</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・数値データは、概ね平均値並みでしたが、「教員の話し方は、はっきりとして聞き取りやすかった」については、全体平均よりやや厳しい評価でした。 ・自由記述では、映像資料を活用する授業スタイルについて「動画の活用やスライドを利用してわかりやすかった」「動画教材も多く使用しており理解を深めることができた」といった好意的な評価が多く見られました。 ・授業の方向性については一定の理解が得られていると考えます。話し方については、より明瞭に発話するよう心がけ、改善をはかっていきます。
<p>2.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名②：リスクマネジメント</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・数値データは、概ね平均値並みでしたが、「教員の話し方は、はっきりとして聞き取りやすかった」については、全体平均よりやや厳しい評価でした。 ・自由記述では、映像資料を活用する授業スタイルについて「実際にあった事件のドキュメンタリーを見ることができたので理解しやすかった」「しっかり動画を見て課題に取り組むことができた」といった好意的な評価が多く見られました。 ・授業の方向性については一定の理解が得られていると考えます。話し方については、より明瞭に発話するよう心がけ、改善をはかっていきます。
<p>3.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名③：ブランド（広告）論</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・数値データは、概ね平均値並みでしたが、「授業での課題にしっかり取り組むことができた」については、全体平均よりやや厳しい評価でした。 ・自由記述では、映像資料を活用する授業スタイルについて「資料が見やすくわかりやすかった」といった 好意的な評価が見られました。 ・授業の方向性については一定の理解が得られていると考えます。授業中の課題については、より内容の充実をはかり、改善をはかっていきます。
<p>4.令和7年度授業評価アンケート結果と授業における自己省察 科目名④：商品開発</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・数値データは、概ね平均値並みでしたが、「課題の量は適切であった」については、全体平均よりやや厳しい評価でした。 ・自由記述では、映像資料を活用する授業スタイルについて「例を出すのは良かったと思う」「授業と課題のバランスがとても良く学びやすかった」といった 好意的な評価が多く見られました。 ・授業の方向性については一定の理解が得られていると考えます。授業中の課題については、内容を精査し改善をはかっていきます。

○授業改善のために行ったFDの取り組み（授業アンケート、オープニングクラス、FD講習（学外含む）、学会活動、その他）

<p>令和7年度授業改善のために行ったFDの取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度までの授業評価アンケートでは「教員の話し方は、はっきりとして聞き取りやすかった」への評価が低い傾向にあったが、本年度は平均値を上回ることができました。改善の成果があらわれた結果だと考えられます。 ・専門演習では、産学連携の商品開発プロジェクト「NBMS」において参加企業を交えた年度末の総括会議を実施するなどの新たな試みを行いました。
--------------------------------	--

○令和7年度の成果・教育業績、令和8年度の目標

<ul style="list-style-type: none"> ・基礎演習で取り組んだスガキョシステムズとの産学連携事業では、「しろふわショコラ」という学生らしい視点で考案されたクリスマススイーツを開発しました。このメニューはスガキョ約170店舗で販売され、学生は自身が開発したメニューがお馴染みのスガキョの店舗で販売されるまでの過程を体験することができました。 ・専門演習で取り組んだ商品開発プロジェクト「NBMS」からは、現在、2品が実際に販売に向け商品開発が進んでいます。 ・ここでも、開発に関わった商品が形となっていく様子、それが実際に受容されていく過程について学生が体験することができました。 ・遅刻への指導によって、授業の規律を保つことができました。他の授業で、遅刻、欠席で問題となる学生も、私の授業では問題なく単位を取得していくことが多くあります。 ・今後も「世界から信頼される日本人」を育てるべく、企業ニーズに応える人材を育成するため、あらゆる努力を払っていきたくと考えています。
--